

幼女ルーデル戦記

com211

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ハンス・ウルリツヒ・ルーデルin幼女。

スツーカー大佐は強くてニューゲームで転生されたようです。

ハンスIIウルリツヒ・ルーデルは実在した人物です。

彼をご存じない方はアンサイクロペディア等の彼の項目を一度読まれてから

この二次創作を読むとより一層楽しめるはずです

目次

1 : 1990年(主観)	1	10 : 大隊	157
2 : 士官学校生活	13	11 : 訓練	179
3 : 北方研修	39	12 : ダキア I	199
4 : 北から中央へ、中央から西へ	62	13 : ダキア II	213
5 : 低地にて	82	14 : ダキア III	228
6 : 近接制空	97	番外 2 : ナチスの影と、お買い物帝国	
7 : ラインラントへ	109	244	
8 : ラインラントの魔女	120	番外 3 : 休暇と超合法戦略	265
番外 1 : ネームド候補 魔女の影	135	15 : ノルデン I	284
9 : 軍大学へ	139	16 : ノルデン II	301
		17 : ノルデン III	319

1：1990年（主観）

「^{Hanna}ハンナ・^{Ulrica}ウルリカ・^{Ruede}ルーデル」

その名を聞いたとき、私は自分の耳を疑った。

かつて数百両の戦車を破壊し、ある種の伝説となった男の名前にそっくりだったからだ。

確かにこの”帝国”は私が知るとある国に似ており、彼はその国の出身。

今までそのような例は見たことはないが、時代的にもその人物が存在している可能性はあった。

しかし、おかしいな。

「ハンナ」だと？「ハンナ・ウルリカ・ルーデル」だと？

彼の名前は「ハンナ」ではなく「ハンス」だったはずだ。

「ハンナ」では女の名前ではないか。

そもそも声が高すぎる。彼は男だ。となると名前が似ているだけの別人だろうか。

第一、今はルームメイトの自己紹介を聞いているはずだ。

初めて名前を覚えるであろう同期の、それも数少ない女部屋の4人、

いや事前に聞いていた話では女は自分ともう一人しかいない、実質2人部屋なのだ。結局思考はまとまらず。とりあえず廃棄することとして、

返答しながらその自己紹介をした人物の顔を確認した。

「ターニャ・デグレチャフだ。よろ——」

途中で言葉が切れた。再び思考が停止した。

自分が見たのは黒髪の年端も行かぬ、自分と殆ど背丈の変わらない少女。

「ん? どうかしたか?」

至極当然な反応が返ってきた。

もう一度思考を整理する。

つまりこれは、

”自分が前世から知っている人物とよく似た名前を持つ、

本来ならこんなところにいるはずのない年齢の少女がルームメイト”ということなのだろうか。

：気にするだけ無駄か。偶然にしては出来過ぎな気がするし色々とおかしいが後回しで良い。

「いや、なんでもない。ターニャ・デグレチャフだ」

何者だ? 死にたがりの天才少女か?

今は時間がない。招集に遅れてしまえば最初から悪い評価を残すことになるだろう。ルームメイトの正体に関しては、後々確認すればいいだけのことだ。

初日が終わり、就寝準備をしていた頃。

「なあターニャ。君は何故その歳で士官学校なんかに入つた？」
ルーデルが突然に口を開いた。

入学前にも軍人達に何度も聞かれたことだが、馴れ馴れしいな色々。

「私は孤児院で育つた。だが孤児院ではまともな生活なんかできないし教育も受けられない。だからより早く職について早く離れたかった。それだけだ」

表面上の理由を述べる。本当の理由は：「あちらの”中身”を探る時でいい。

だが、相手はそれは求めている答えではないと断つた上で

「私が聞きたいのはね、ターニャ。その知恵と精神は何処で手に入れたのかということだ」

やはり。分かつてはいたがやはり”自分と同じ”存在らしい。

でなければ年齢が二桁にも行っていなさそうなガキがこんな所にいるはずがない。

だが、自分から弱点になるかもしれない情報を渡す訳にはいかない。

先に相手は何者か確認できるならその後でも良い。

「そつちこそ、いったい何者だ。どうしてその歳で士官学校にいる」

「私の名前はハンス。

^{H a n s}
ハンス・ウルリツヒ・ルーデル。^{R u d e l} 元ドイツ空軍大佐だ」

まさかだった。

少女は急降下爆撃機を駆って4年間で一個軍団に相当する戦車を破壊し、

圧倒的な戦果から彼専用とも言われる勲章を授けられたという。文字通りの「バケモノ」

それが自分であると主張したのである。

ハンス・ウルリツヒ・ルーデル。

スツーカー大佐、ソ連人民最大の敵、魔王、悪魔…

彼を表現するとき、適当な言葉は自分の中からは見つからない。

800両以上の戦車を破壊し、それを超える数の火砲を焼き払い、

配属三ヶ月で戦艦を沈める。

前世のインターネットではJ u 87の話が出てきたら彼の名前が必ず上がる。

死後30年以上経過してなお伝説として語り継がれる数々の偉業。

「ルーデル?」スツーカー大佐のルーデルか?」

「だからそう言ってるだろう。」

まあ、疑われようが信じなかりうがどうでもいいんだがね。証明する手段もない。その通りだ。今現在、彼がルーデルであると証明する手段は存在しない。

「それでターニャ・デグレチャフ。もう一度問うが、君は何者なんだ?」

「自分も別に隠すべきこともない。証明する手段もない。事実をそのまま話すことにしよう。」

「名乗るべき名前は無い。どうせ後世に知られるようなこともしていない」

「なるほどな、”自称”神か…」

「そつちには現れなかったのか?」

「全く出てこなかった。1982年の年末だったか。突然頭痛がして意識が遠のいたと思っただけの体だった」

おかしい。

神、もとい存在Xの干渉なしにこの世界に記憶を留めたまま現れるなどということがあり得るのだろうか。

干渉があつたが存在を明かさなかつたか、

或いは逆に存在を明かさずに転生してくる場合が普通？

仮に我々以外の転生者が居たとして、

仮想敵国の政治的に優位な存在だつたりした場合、最悪の結果が待っている。

まあ今存在するかどうか分からないものに関して思考しても何の意味もないが。

存在Xはよりもよつて私の目の前にルーデルを送り込んできた。

私がいくらこの世界で策を弄しても、どんな超人的な戦果を叩き出しても戦争には勝てない。

そういうことを示したいのだろうか。存在Xは。

実際、目の前の人物はそれを経験している。

自分が知る超人的な人物のうち、実在した可能性が最も高く、

功績に疑いが掛かつていない人物は確かにルーデルである。

そのルーデルが目の前で挫折する様を見せつけることで精神を折ろうとでも？

何にせよ、存在X、若しくはそれに類するものの差し金であることは間違いないと考えるべきだろう。いったい何をさせる気なのだ。

「一応聞いておきたいのだが、こつちでの生まれは何処だ？ 孤児ではなかったか？」

「いや、殆ど変わらない。両親はあつちと変わらず、家庭環境もほとんど変わらない。

違う点と言えば、両親が若くて2人の姉が妹になってた程度だ。記憶に関して特異なものも自分だけ」

更に分からない。存在Xは何がしたいんだ。

私に会わせることが目的ならば私のように孤児院にでも放り込んで士官学校以外の選択肢を潰せばいい。

あれだけ出撃に拘っていたルーデルだ。

入ればまた飛べると知れば、ほぼ確実に士官学校へ行こうとするだろう。

だがこちらで普通の家庭に生まれただと？

何故確率を落とすような真似をする。

精神や記憶に操作でもしたのか？ まるで目的が分からない。

「家族以外はどうだ？ 変化は？」

「家族以外は全部変わっていたな。少なくとも自分の記憶にある人物は居なかった」

存在Xは何かしら大きな手違いでもやらかしてしまったのではなからうか。

目的が全く見えない。少なくとも私の思考力で予想できる範囲にない。

「そつちはどうなんだ？ 自分の”こつちでの”親は何者だった？」

ルーデルが尋ねる。

「1歳になる頃には既に孤児院に居た。それ以前の記憶がないが、聞いたところでは父親は戦死、母親の家庭環境云々で捨てられた」ということ”になっっている”

実際は存在Xが何かしらの操作を行った可能性がある。というかほぼ確実にそうだろう。

ルーデルはそれを聴くと5秒ほど考えてから口を開いた。

「我々がここに居ることも神が干渉していると考えているのかね？」

「少なくとも自分の方は魔導適性付きで孤児院に放り込まれた時点で一番マシな選択肢がこれだ。

遅かれ早かれ軍に入らざるを得なかっただろうし、奴が私の人間性を勘違いしてないければ明らかに誘導されている。

そつちこそ、その年でしかも女だというのに。よく親が士官学校入りを許したな」

「普段から魔法で空を飛ばないかと考えつつ崖からの飛び降りを繰り返してたからか”空を飛ばしたい”と言ったら普通に許してくれたよ。理解ある両親に感謝の限りだ」

「ご両親は感覚が麻痺していたのだろうか。両親ですら彼—いや彼女を止めることは

できなかったのだろう。

何せ上司どころか彼の国の最高指導者ですら、出撃を止めることはできなかったのだから。

実際は単にアカが嫌いなだけでこの世界のアカを粉碎するのを夢見てる可能性もあるが――

——こつちに来てまで急降下に取り憑かれているのか。それとも空に戻りたかったのか。

とりあえず、分かったことが一つ。

ルーデルを止められるものは誰も居ないということだ。

恐らく存在Xでも干渉を周囲に気づかれない方法では不可能だろう。

となるとやはりここで会ったことは偶然か、若しくは存在Xはそれも含めて最初から織り込み済みだったのか。

「何にせよ、同じような立場の人間に出会えてよかった。

改めて、ハンス・ウルリッヒ・ルーデルだ。私もこつちに来て大分変わったからな。別人だと思って”ハナナ”とでも呼んでくれ」

「こちらこそ。ターニャ・デグレチャフ、ターニャでいい」

少女、いや幼女と言えるかもしれない年齢の2人が士官学校で2度目の握手を交わした。

中身はどちらも”おっさん”だ。いやハンナはおじいちゃんか。

翌朝。

ハンナは最初の朝食から大量の牛乳を確保してやがった。何処から持ってきた。

「厨房に行つて牛乳がいっぱい飲みたいと言つたら余剰分から1Lほど出してもらつた」

よくそれで通つたな。やはり見た目を活用したのか？ だが厨房で許されても指導教官に許されるとは限らない。

：怒られるのは私もか。こんな下らない理由で連帯責任なんて御免だぞ。

かの有名な軍曹なら同期全員に連帯責任を課すだろう。

それで同期全員からいじめられるのである。

だが――

後日、教官から封筒を渡された。

”ターニヤ・デグレチャフ 二号生、及びハンナ・ルーデル 二号生は身体強化のための補助食として1日辺り1Lから2Lの牛乳及びその他随時必要とされる糧食を支給する”

要約するとそういった書類が入っていたのである。

やりやがった。通しやがった。

牛乳をよこせと文書で要求し、見事通ってしまったのである。私も巻き込んで。

しかも”その他随時必要とされる糧食”というおまけまで付けてきた。

士官学校でこれが通るだと？ どういう手腕を使った!?

「年相応の女の子の振る舞いを真似てみるのも悪くないぞ」

そこまでして牛乳が欲しかったのか…プライドは無いのだろうか。

あんた実業家として普通に成功してたよなあ？ おいおっさん。

「牛乳がなければ戦えないからな」

…この変人と2年は共にするのか。先が思いやられる。

用語解説：ハンス＝ウルリッヒ・ルーデル (Hans-Ulrich Rudel)
第二次大戦中のドイツ空軍 (Luftwaffe) の急降下爆撃機パイロット。

「嘘百科事典」とアンサイクロペディアに嘘を書かせなかった人物」とされているが、

細かい所を見ると所々面白さと誇張のために嘘が混じっていたりする。

公式記録では

戦車 519両

装甲車・トラック 800台以上

戦艦 1隻 (共同戦果：マラート)

嚮導駆逐艦 1隻

上陸用舟艇 70以上

航空機 9機

など「大戦を通したスコアで行けば2個機甲師団を殲滅したに等しい」程のスコアを
持つ。

アンサイクロペディアは結構出処不明の話も多いが一度は目を通しておくと分かり
やすいだろう。

2：士官学校生活

私、ターニャ・デグレチャフ二号生の一日は起床ラツパの一時間以上前に始まる。

毎朝ハンナが先に起きて私を起こし、朝の日課の体操が始まる。

当然、最初は体操をするつもりなど一切なかった。貴重な睡眠時間を削ってまでやることではないと思っていた。

だがハンナが言うには、生き残るには撃墜されても生き残れる体と体力が無ければならないらしい。

30回撃墜されても徒歩で、それも敵の追跡を撒いて味方基地まで帰還した実績がある。

少しでも生存率が上がるのであればと自分もハンナと共に毎朝の体操を始めたのである。

そして体操を終えて戻ってくる頃には窓の外の箱に牛乳が配達されているので500ml1瓶2本を保管庫に移し、

1本を一気に飲み干す。飲み干してしばらくすると起床ラツパが鳴って士官学校の一日が始まる。

——何か毒されている気がするが、生存のためであれば致し方無い。

牛乳は昼食に500ml、シャワー後にも500ml。一日1.5L。

ハンナにとっては70年近く飲み続けてきたから苦でもなんでもないのでだろうが、牛乳が好きではない私としてはそれなりにキツイ。

牛乳以外にも合わせると子供の体に必要な量を超えて水分を摂取している気がする。

士官学校に入って早数ヶ月。

他の連中との知能的な差は無いにしても2人揃って見た目には浮きまくっており、私達2人は「姉妹」と言われている。ハンナは私と違って黒髪だし顔が似ているとも思わないのだが。

因みに私の方が姉なのだそうだ。

中身はあっちが70代半ば、こっちが40強なんだが。

”おじいちゃん”は時たま年相応の女の子らしい仕草と言動を見せることがある。

本人は牛乳のときの一度きりのつもりだったらしいが、

以前からそういうことは起きていたらしい。

本人が以前言っていた通り、こっちに来てかなり精神的に変化があったようだ。

自分はそのような部分を見せることが無いために「姉っぽい」と評価されているようだ。

嫌な予感がする。2年でこの関係が終わる気がしなくなってきた。

しかし――

「姉様ー、朝ですよー。起きてくださいーい」

これは本当にかのルーデルなのだろうか？

確かに人の精神は、記憶ではなく状況に大きく左右される。

化学物質によって人の精神をある程度制御できることは向精神薬が証明しているが、その手の物質は体内でも発生する。アドレナリンなどのホルモン類がそれだ。

我々2人は、成人男性の記憶と精神を持った9歳の少女”である。

当然、体内で発生する化学物質が脳に作用して変化をもたらすこともあるだろう。

しかし、その結果がこれなのか…？

そもそも、私の方ではこのような現象は起きていない。この差は何だ？

私も生まれてから身体が精神に追いついてない、精神と身体が一致していないという感覚はあった。

しかしそれも5歳頃には無くなっていった。

ストレスが原因で幼児退行するという精神疾患の可能性もある。

現実逃避やストレス発散の手段として無意識的に切り替えながら幼児退行しているのだろうか。

何にせよ、このような現象は休憩時間や就寝前、起床直後にのみ起きているため、士官学校での生活に問題はない。

”自分が自分であるためには、驚くほど多くのものが必要——か、何処で聞いたかよく覚えていないが、

最低限必要な要素を備えていないからこのような事が起こるのだろう。

我々2人の本来の持ち物は記憶だけ。精神も本当に引き継いでいるかどうか確認する手立てはない。

そういう意味でも、本人の言う通りルーデルは既に記憶だけを受け継いだ別人と考えるべきなのかもしれない。

身体の方にかなり引つ張られている印象を受ける。前世の本人に会ったことがないために憶測だが。

「その姉様と言うのをやめろ。不愉快だ」

「はい」

とりあえず、起きて体操を始めるとしよう。

今年の士官候補生には2人の変わり者が居る。

と言つても私の仕事教官の支障になるようなものではない。

むしろ私が教えることなど無いのではないかと思うほどだ。

最初、資料を見たとき上は何を考えているのかと思つた。

初等学校も卒業していない8歳の女兒を、それも2人も士官学校に入れるなどどうかしている　と。

入学規定に性別及び年齢の下限は無く、試験さえ通つてしまえば誰でも入れることになつていた。

準戦時体制でなければ何かしら理由をつけて断つたのであろうが、

魔導適性の高い志願者を断れるほどの余裕は帝国には無い。

2人の少女はいつも行動を共にしており、まるで姉妹のようであることから、

他の候補生からもそう呼ばれるようになっていった。

”妹”はハンナ・ルーデル。

普段、訓練や座学の時は至つて真面目な候補生であるが、

休憩時間や起床時間前には年相応の子供らしさやたまにつたない喋り方をするなどの一面もある。

見た目からは想像できないほどの精神力と体力を備えており、

2ヶ月間の国境研修における敵地浸透訓練では彼女が率いる分隊が最初に目的地に到着した。

分隊員の優秀さもあるが、殆ど睡眠せずに一人で多少先行して経路探索を行っていたらしい。

通常、行軍経路探索は最も疲労する。

何せ道のない場所を歩き回って経路を確定した後、

引き返す必要があるために歩く距離がかなり延びるのである。

本来それを指揮するのが士官の役割であるが、彼女は分隊員を休ませて一人で斥候をしていたと報告されている。

彼女はまだ、“変人の天才少女”に見える。

だが“姉”のターニャ・デグレチャフ。

妹同様、成績は優秀な候補生ではあるのだが彼女は“妹”とは全く異なる。

訓練前に「部隊の統制は絶対であり、作戦遂行能力の無いと判断した分隊員は容赦なく処分する」

と宣言し、実際に分隊員のうち2名が“銃の暴発事故”で負傷している。

一号生になってすぐ、指導先任として二号生の指導に入った際、その見た目と年齢で

侮った二号生が命令に背いたとき、その二号生はデグレチャフ指導生に吹っ飛ばされ「今のが敵前でなくて良かったな。敵前であれば貴様は既に死んでいる。私が殺す」と銃剣を首に突きつけたり。

確かに合理的ではあるし軍法からすると当然の行いではあるのだが、優しさどころか人間性の欠片も感じられない。組織の歯車そのものという表現が適切か。

簡潔に言つて、「異常」だ。

軍隊のために作られた人形なのではないかと思えるほどである。

しかしながら2人に、「死刑囚の”銃殺処分”の任務が与えられたとき、

引き金を引くのすら躊躇う候補生すら居る中、平然と撃ち殺したのである。

デグレチャフ候補生の方はいつもと変わらないのであるが、

ルーデル候補生に関しては明らかに目つきが変わっていた。

それどころか、殺すのが共産主義者だと分かった瞬間、笑ったのである。

初めて彼女に恐怖した。恐らく少女が初めて人を殺すというのに楽しげに笑っているのだ。

本人曰く「既に死が確定している人間を誰が殺そうと変わりはない」と。

外見からは分からないが、「姉妹」と言われるだけあって本質的に2人は似ているか

もしれない。

この2人は只者ではない。だがその本質を見抜くことは今の私にはできないだろう。

銃殺任務。

配属前に殺人に対する心理的障壁を減らそうという目的で行われる。

人を殺すときに躊躇しては殺されるのが戦場であるし、

配属する前に実際に人を殺しておくことで殺人に“納得”する術を学ぶという側面もある。

要するにPTSDを予防しようということだ。

「幾ら何でも本物の人間を殺す必要性は無い気がするが…有効ではあるんだろうがな」

記憶の上では最低でも数千名殺してきたハンナにとっても態々本物を使うことには疑問のようだ。

「必要性はともかく、他の手段で発砲率を改善する方法が分かってないんだろう」

二次大戦とベトナム戦争期の兵士の発砲率は5倍近く異なる。

殺人に対する心理障壁を減らす訓練を行うことで発砲率を改善できると解ったため

であるが、

復員後に精神疾患となる例が多く、後に社会問題になっているため、

ベトナム戦争以降は調整されたらしい。

「私は空軍だったからその辺りはよく分からないな。殺すにしても最初から最後までアカしか殺していない」

「まさかこつちに来てても最初に殺すのがアカだとは思わなかっただろう?」

銃殺任務の死刑囚というのが共産主義者だった。まさか暴力革命を実行するとは愚かなものだ。

「思わず笑ってしまった。こんな所まで来て私は共産主義者を殺さねばならんらしい」
「こつちのアカも相変わらず兵士の数だけは圧倒的らしいからな。」

例によって大粛清をしているから立ち直らなければ一気に踏み潰せるだろうが…」

—— 共産国家との開戦は当面ないというのが残念でならない。

「ああ、楽しい楽しいアカ殺しは最後まで取っておこう」

ハンナがこの年頃の少女には見られない口元を歪めた笑みを浮かべる。やはりルーデルだったか。

対魔導師戦闘訓練としての模擬戦は実弾で行われる。

といってもただの曳光弾であり、防殻術式に干渉した時点で撃墜判定となる。

当然魔力残量次第では死に至るが、その程度で死ぬような奴はどつちにしろ戦場に出たら真っ先に死ぬ。

戦力に計上できない程度の雑魚だということだ。

4人で小隊を編成し、大隊を二分割し小隊単位で6小隊対6小隊で戦闘を行う。

基本的に准尉候補生である成績優秀者が小隊長となる。

私とハンナはどちらも小隊長として、別のチームとなった。

当然ながら私は飛行訓練でも優秀な成績を収めている。

だが：模擬戦開始直後、一騎単独で突っ込んできたのを目視で確認した。

「正面から一騎、急速接近。小隊各員迎撃せよ」

一騎で正面から突撃？ 何者だ？——まさか！

「小隊全騎散：：被弾！」

回避運動をしつつ小隊に指示を与えようとしたが、

回避した先に1発を撃ち込まれ、私は防殻術式が反応し撃墜判定となった。

『2番被弾！』

私以外に小隊員一人がやられた。

「相対速度300ですれ違いざまに2人を撃って当てる？ 何だそれは。照準が間に合わないだろう。」

「少なくとも我々が知る限り、あんな飛び方をする魔道師は居ない。速いうえに機動がおかしい。」

「奴」を狙って弾が飛び交っているが一発も当たりそうにない。

後ろに目がついているのかと疑いたくなる。弾のほうを避けているようにすら見える。

そしてそれができる可能性がある人物を私は一人知っている。

『何が起こった!?!』

『第二小队半壊!』

『3番被』『4番被弾!』

『こちら第一小队、全滅だ』

空を見上げて自分の小队全員が撃墜判定を食らったことを目視で確認し、報告した。降下して地上に降りる前に自分の小队は全滅してしまったのだ。

『こちら第四小队何が起こったわああああくるなあ!』

『第七小队援護に うへっどどどこから撃たれた!』

『こちら中隊長! どういうことだ! 何が起こっている!』

小隊間通信は完全に混乱している。何が起きているのか把握できているのは既に撃墜されたもののうちの、更にその一部だろう。

中隊長役をするはずの教官も何が起こってるか分かっていない。

こんな真似をしたのは何者か。言うまでもなくハンナだ。

本来、こんな酷い結果を残したときは小隊員を蹴飛ばしてでも役立たずを反省させるのであるが、

叱るべき立場の私が真つ先に、それもチームで最初にやられていてはとうしようもない。

実践であつても、”あんなの”を相手にして壊滅した部下の責任を追及する気には流石になれない。

さて、私もようやく状況が把握できてきたので再整理するが、

相対速度300で、弾を避けながら一瞬しか無いすれ違いの間に2発撃つて当てる。

それが常人の技ではないのは説明するまでもない。

私も一人落とすならできるだろうが、2人はおかしい。

照準する時間がないだろう。

飛び回るハンナを見上げながら何をしているのか観察していたが、

尋常な速さではない。本当に同じ宝珠である速度が出せるのか。

航空機的なあの機動から推測するに、位置エネルギーの活用で速度を維持している？
元飛行機乗りとして本能的に理解できているのかもしれない。

自分が見た範囲では、ハンナのスコアは19騎。圧倒的すぎて訓練になっていない。
それでもハンナはハンデのつもりなのか敵魔導師の正面からだけ射撃している。

一人が防御し損ねて腕を負傷したが、私から見ても同情せざるを得ない。

並の候補生ではあのハンナの位置を把握するのも難しいだろうし、

急降下で突然目前に現れた影に撃たれて反応できるなら優秀と言えるだろう。

模擬戦は損失1対24で惨敗に終わった。わずか5分で終わったのである。

下から、離れて見ている状況を把握しやすいはずの教官達も全く理解できていない。

片方が全滅したことに気づいたのはハンナが降りてきてからだ。

そして小隊を変更して再び模擬戦が行われた。

負傷した一人が離脱したためハンナの小隊を3人小隊に変更し、4小隊対8小隊で行

われたが：

今度は10分で全滅した。

損失0対32である。今度は余裕ができたのか、味方を全員守りながら戦っていた。

因みに私はまたもや最初に撃墜された。クソツ。

ハンナ曰く、

「この中で唯一脅威足り得るのはターニヤだけだ。あとは射撃の的と変わらない」脅威と思われるのは名誉以外の何物でもあるまい。

さて、確かに相手は全員候補生である。新兵以下で練度は低いが数を揃えればそれなりに使えるはずだ。

ここまで圧倒的だと、戦場でも中隊規模程度であれば一人で相手にしてあっさり殲滅しかねない。

これでも爆撃機乗りである。

ハルトマンやバルクホルンなどの戦闘機乗りだったらとも思ったが、あまり変わらな
い気もする。

その日最後の模擬戦は1対46、

ハンナ一人で他の全員を相手にしようというのである。

まあ、結果を言うまでもなからう。損失46対0。

私は再び最初に撃墜された。狙ってくるのが分かってもこれだ。

三度に亘って一人が一方的に蹂躪するかのような空戦を見上げていて、ふたつほど分
かつたことがある

まず一つ。ハンナは「狙っていない」のだ。

狙わずに確実に当てる術をハンナは持ちあわせている。

通常、飛行中の射撃は小銃を構えて照準器を見ながら射撃する。

だがハンナは照準器を見ずに、「腰だめ」の姿勢でタイミングだけを測って射撃したのだ。

我々魔導師は小銃を撃つとき、照準器を使い、腕で照準する。そう教わる。

だが戦闘機やルーデルの搭乗機であるJ u 8 7 Gなどは違う。

機関銃や機関砲は機体に固定されているため、機体の向きを合わせて照準する。

当然、そういう射撃術も教本には載っているが、

それもあくまで照準器を見ながらというのは大前提だ。

腰だめ姿勢で照準器を見ずにやるものではない。

J u 8 7 Gのガンポッドと照準器の位置は大きく離れているゆえに

照準器は特定の距離でのみ正確に着弾し、ガンポッドは左右同時に発射される。

距離を直感的に把握し、弾道交差距離になったタイミングで引き金を引くというのはできて当然。

そのうえ、ハンナは敵の真後ろにつくということをしない。

敵のケツを追いかけるという空戦の基本を無視し、殆ど偏差射撃で当てている。

「どういう向きで小銃を抱えてどのタイミングで撃てば当たるか」というのを本能的に

理解しているのだろうか。

このような能力を「当て勘」とでも言うべきなのだろうか。

もう一つは「どう機動すれば敵が撃ちにくいか、当てにくいか、弾が当たらないか」と言うのを把握し、

敵の位置だけではなく、高度、速度、移動方向、距離を全て把握して機動している。視界の後ろであつてもある程度敵の位置取りを把握しているように見える。

そのため、敵が撃ちやすい位置取りや機動を全くしない。ゆえに当たらないのだ。流石に終戦まで戦闘機からの攻撃で一度も撃墜されていないだけのことはある。

確かソ連のトップエースが逆に撃墜されたりしたな…

こっちは「避け勘」とでも言うっておこう。

更には「当たる」と確信しない限り撃たない」。

普通なら一人で46人を相手にしたら弾切れで負けるのが普通だ。

だが「当て勘」によるものなのか一発も外していない。

Ju87Gの装弾数は24発。12回しか撃てない。

ちよつと外したらすぐ弾切れするだろうし、補給は煩わしかったに違いない。

一度帰還すればアカの戦車を撃破できる数は確実に少なくなる。

当然一回たりとも外したくはなかっただろう。

今、弾を一発も外さないのはその辺りに理由があると思われる。

実際にできるのどうかしているが。

—— 一つ一つ取っていけばなるほど分からなくはないが

それをこつちで、飛行機ですらないのに実現する時点でおかしい。

一応、この世界において単純に経験としての“飛行時間”はぶつちぎりのトップだろう。

出撃回数と無断出撃から推測するに、1万時間など余裕で超えているに違いない。

“空戦”の経験も少なくないはずだ。

本人の記憶によれば、Fw190に乗るようになってからだけで5機以上の航空機を確実に撃墜している。

文句なしのエースパイロットである。

曰く、F—8なら1000kg爆弾を吊り下げてても空戦は可能とのこと。なんだそれは。

最初から戦闘機に乗ってても300機どころか500機撃墜などということをやらかしそうな気がしてきた。

これを世に、というか戦場に放ったとき何が起こるのだろうか。

実際には当てられるとしても防殻術式で防御されるが、

そもそも位置を捕捉できない魔導師も多いだろうし、

あの魔導適性から引き出される火力だ。防殻術式が有効かどうかも分からない。

三十分で敵の魔導大隊が消えたとか、

無断出撃によって誰が撃破したかもわからない敵の魔導師の遺体がそこらじゅうに落ちてるとか、

司令部が迎撃を命じたら迎撃に向かう隊が交戦する前に敵が謎の爆発で全滅したとか。

敵味方双方が混乱に陥るミステリーが日常のように発生するのだろうか…

…ありえる。前世で推測200両以上の戦車撃破スコアを味方の軍上層部が把握していない、

ある意味で戦場神話のデパートのようなやつだ

…このバケモノを相手にする敵魔導師が哀れでならない。

”これ”と交戦した場合、生きて帰れる確率は一割以下だろう。

いや生きて返してくれるだろうか。余裕があれば駐屯地まで追撃して駐屯地ごと焼きかねない。

配属されたら早々にハンナに二つ名が付くのは最早確定したようなものだが、何になるか最早想像できない。恐らく、あれと交戦する側にとって理不尽な存在だからだ。

現状で「バケモノ」とか「悪魔」とか「鬼神」とか思いつきはするが、その程度では適切な表現とは言えない。

実際配備されてどの程度の戦果を出すか分からない。敵がどんなあだ名を付けるか楽しみにしておこう。

結果として、ハンナは模擬戦から外された。

熟練の航空魔導師のみで編成された中隊すら蹂躪しかねない候補生を相手にしているても、

そんなのを相手にする可能性が低すぎて訓練にならないのだ。
結局一人で対地攻撃訓練をするということになった。

——本業ではない空戦でこれだ。本業の対地攻撃訓練なんてやらせたら何が起るか分かったものではない。

——教官共、ハンナに空戦技術の指導をさせようとしたらしい。

「そもそもこの飛び方自体前世の経験に基づいたものだ。

考えずとも体が勝手に動く。それを教えろと言われても困る」

「アルゼンチン空軍で教官をしていただろう。そのときはどうだったんだ？」

「私はあくまで教官として至って普通のことを教えただけだ。

航空機の、低空での戦闘技術なら色々教えられるが、魔導師としては本当に直感で飛んでいる。

「教えられることは今のところ無い」

魔導師としての経験は浅いから他人に教えられるわけではないと。

——本当に経験の浅いやつがあんな飛び方するかどうかは別の話として。

「いや多分、一部は教えられなくはないんだ。

ただ結局は十分過ぎる経験を積み重ねば真似できないことが多すぎる」

仮に教えて真似できて同期と後輩が「こんなのだらけになつたら周辺各国の魔導師戦力が一年持たずに枯渇するだろう。

「それに、この飛び方は通常とは多少異なる。

空力に術式で干渉することで一部、航空機的な機動をしているわけだが、

不用意に使うと錐揉みを起こして回復できず落ちる。

便利だが、航空機でそれなりの時間飛んだ経験のある人間以外が使うと恐らく死ぬ。そもそも航空機で空戦を経験していないと、どこでどう使えばどのように動くかと言うのが分からないだろう」

あの高速飛行や姿勢変更はやはり揚力を使っていたか。

圧倒的な飛行時間と空間把握能力があつて初めて使えると。

「私に言わせれば、飛行時間2000時間を超えてからでも遅くはないと思うが」
推測飛行時間1万時間超が言う。

こんな空飛ぶ非常識を何故、存在Xはこちらに連れてきたのか。本当に謎だ。

私、ターニャ・デグレチャフ准尉候補生はまたもや”おかしなもの”を見ている。

何がおかしいか？ いや私の考えが及ばなかったことの方が問題なのかもしれない。こんな単純なことにどうしてすぐ気づかなかつたのか。

今、私は対地攻撃演習に來ている訳だが、そこには見知った先客が居る。
名前を出すまでもありますまい。

突然だがハンス＝ウルリッヒ・ルーデルの乗機といえは？

そう。J u 8 7 G カノーネンフオーゲルである。

では、J u 8 7 G の装弾数は？ うむ。24発である。

ただし左右同時に発射される。このため攻撃可能な回数は12回だ。

では、魔導師の携行弾薬は？ これに関しては決まってはいいないが魔力量次第では240発近く携行できる。

尤もそれが全部使える状況と人材は限られる。飛行などに魔力を取られるためだ。

どんなに優れた魔導師であつても180発が実用的な上限だろう。

更には、体力精神力疲労その他諸々細かい条件を加えれば”普通なら”更に少なくなる。

砲撃術式の火力は、魔力量依存だが概ね15cm榴弾程度、推測TNT換算5—7kgといったところ。

さて、ではハンナ・ウルリカ・ルーデル准尉候補生の魔導適性及び魔力量は？

魔導適性A、魔力は本人曰く「飛んでりや回復する」とか。

——もう突つ込む気力もない。

体力？ 自分の体重と殆ど変わらない20kg近い装備を背負つて3時間睡眠で山を大の大人より速いペースで5日間歩き回る程度である。

精神力？ 昔と変わらなければともに歩けない状態のまま、

足が吹つ飛んで傷口が塞がってなくても血を流しながら出撃する程度。

疲労？ 奴にそんな概念があるのか？

そしてハンナの対地攻撃技術は——ルーデル大佐を知っているならば説明不要だろう。

この点を踏まえたうえで何が分かるか。

簡単に言えば15cm砲を搭載して装弾数が180発、

航続距離及び飛行可能時間は不明。

空戦性能は表現が難しいが、“おかしい”と言っておけばいいか。

これを装備するルーデル大佐。

そういう戦闘爆撃機を、我々候補生は目前にしている。そんな感じである。

東部戦線にそんなものがあつたら史実の三倍以上の戦車を破壊していただろうし、こつちでも桁違いの戦果をもたらすことは目に見えている。

ハンナは急降下して加速し、超低空で高速を維持しながら砲撃。

瞬く間に砲列を模した射撃目標が数十個単位で吹き飛ばされていく。

この前の模擬戦で揃いも揃って吹っ飛ばされたからか、候補生には大した驚きもない。

私も予想をし損ねたが最早驚くに値しない。

普通、魔導師の対地攻撃は遠距離から照準して砲撃術式で叩く。

少なくとも機動しながら撃つにしてもある程度距離をとるものだ。

だが奴にはそれが無い。

低空高速飛行で限界まで接近して吹っ飛ばす。

その戦い方はJ u 8 7 GやI L 2を彷彿とさせる。
カフーネンラオーゲル シュトルモウイーグ

ただし、斜め下向きに小銃を構えながら並んだ砲列を攻撃するので、

複数目標を連続して攻撃する際、アプローチし直す必要がない点は異なるが。

”ルーデル”なのだから空戦に比べ対地攻撃は更に凄まじいだろうとは思っていた。

今となっては予想の範囲内である。

と言つてもあくまで一人だ。間違はなく超人ではあるのだろうが宝珠の性能限界を

超えることはできないし、高高度の爆撃機や戦闘機などは落とせないだろう。

——まあ戦闘機に乗ればそれはそれで圧倒的な強さを見せるだろうが：

用語解説

・ Ju 87 Stuka (シュトゥーカ)

ユンカース社製の急降下爆撃機。スツーカーとも。

ルーデルの愛機であり、ルーデルといえはスツーカー。

後部機銃手と二人で乗り、機銃の操作以外に航法、索敵、誘導なども担当する。

ルーデルの場合、後部機銃手が整備兵だったり軍医だったりする。

ルーデルは主にD型とG型に搭乗していた。

・ Ju 87 G Kanonenvogel (カノーンフォーゲル：大砲鳥)

上記のスツーカーにガンポッドで37mm対戦車砲を2門乗せた代物。G型。

ルーデルにすら「恐ろしく操縦が難しい機体」と言われた。

なお、ルーデルの戦車撃破スコアが急に伸びるのがコイツに乗り始めてから。

それまでは1000回の出撃で100両以下の公式スコアだったのに、

残りの1500回で公式に400両程度、実際には推測で600両以上を撃破している。

(そもそも1500回の出撃には無断出撃が含まれていないが)

・ 戦闘爆撃機 (ヤーボ)

現代的に言えばマルチロール機。

戦闘機でありながら十分な重量の爆撃装備を搭載できる機体のことを言う。

ヤーボとはドイツ語で戦闘爆撃機という意味のヤークトボンバー（Jagdbomber）を略したもの。

・ F w | 190

フォッケウルフ社開発の二次大戦ドイツ空軍主力戦闘機の片方。

A、D、F、G型が存在し、

戦争末期のルーデルも500回程度の出撃をF w | 190でしている。

主に乗っていたのは恐らく戦闘爆撃機型のF | 8。

戦闘機なのに1トン爆弾を搭載できる。

3：北方研修

”ハンナ・ルーデル一号生は特別選抜候補生として8ヶ月の北方管区研修とする”

これが空戦訓練と対地攻撃訓練の結果から判断されたハンナ・ルーデルの処遇である。

普段から非常に優秀な成績を収めているうえ、特別空戦指導教官の立場も本人は拒否。

とするならば、士官学校に置いておく意味は無いと判断された。

士官学校から要確認として提出された評価資料を人事局は虚偽若しくは判断ミスとして

当該資料を書いた教官に処罰を与える予定であったが、

人事局は実際の演習を見て評価を一転。

北方国境地域への研修と相成り、実質的な配属となった。

1923年2月某日 北方ノルデン マルメ港

私を含めて准尉候補生の全員が6ヶ月の北方管区研修でスカンジナビア半島の南端、

スコーネまで行くこととなった。

陸軍との連携訓練が目的だとしてもまさか国境地帯でやるとは。

今更ながら帝国の国土状態を確認するが、

ちよび髭伍長閣下要らず。最初から我らの帝国は大ドイツ仕様である。

”二重帝国”の部分はご丁寧に異民族部分だけ分離されており、

北の海沿いは西はベルギーから東はメーメルまで。

『分割済み』ポーランドとネーデルラントと大ドイツを足したような状態にある。

更にユトランド半島とスカンジナビア半島の間にある島々に加えスコーネ地域も帝国の領土となっている次第だ。

ちなみにこっちの世界に”道”を含む低地諸国は存在しない。

本土からスコーネまでは鉄道を使う場合、最低2つの海峡を渡らねばならない。

我々が乗った列車はいわゆる”渡り鳥回廊”を通った。

まずブットガルデンからロービユまで連絡船に乗ってフェーマルン海峡を渡り、

さらにエーレスンド海峡を渡るのでコペンハーゲンからマルメも連絡船だ。

数年前までは更にもう一度、ストーストレム海峡を渡るための連絡船があったのだが、

補給能力の増強のために北方島嶼地域に複数の鉄道橋が建設され、手間が一つ減った。

だが通ってきた状況を見るに、恐らくこれでも不十分。

あくまで既存の戦争形態では余裕が出るように建設されているのだろうか、

私やハンナが予想する通り、次の戦争が複数の国家総力戦が発生する”世界大戦”

だった場合、

補給能力は確実に不足する。

いや、そもそも補給能力は多いに越したことはない。

欲を言えば大ベルトとエーレスンドの2つの海峡に鉄道橋が欲しいものだが、

現行の技術と予算では難しいだろう。

かつて一次大戦において、部隊の再配置と補給と食料輸送を同時にできずに国内の一

般市民に餓死者を出した国もあった。

まあ他ならぬドイツなのだが。

…というか”帝国封鎖”が実施された場合、食料は大丈夫なのだろうか。

同日 北方方面軍スコーネ駐屯地仮設乗降車場

「久しぶりだな、姉様。出迎えに来てやったぞ」

先に到着していた、姉妹⁵が出迎えに来た。

「それやめてくれハンナ。そういう癖⁶は直らないのか？」

「任務に支障がないなら直す意味もないからな。これはこれで楽しいもんだ」

幼児退行が趣味なのかストレス性なのか現実逃避なのかもう分からないな。

「全く、威厳もへつたくれもない。それで部下が付いてくるのか？」

「お前らだつてターニヤより私の下の方が良いよな？」

一緒に来た他の候補生が一斉に頷く。

「つまりそういうことだ」

「貴様ら……」

振り向いて睨むと一斉に視線を外された。クソッ。

「そもそもターニヤのやり方が極端過ぎる。

前も言ったが、戦場に出るまでに直しておかないと後ろから撃たれるぞ」

…流石に6年間近く、最後は第2地上攻撃航空団²を率いて世界大戦を戦い抜いた男の

言葉は無視できない。

「…分かった、善処しよう」

今後どのように接するべきかは後で考えるべきか…

「とりあえず移動するぞー」

「君がターニヤ・デグレチャフ候補生だね？」

師団本部に移動している途中に現れた男は大佐の階級章を着けていた。

「はっ、小官がターニヤ・デグレチャフであります」

反射的に敬礼をする。慣れたものだ。

「君宛てに装備局から荷物が来ている、付いてきたまえ。ルーデル君も」

佐官が態々いち候補生のために荷物の案内…？

集積所で渡されたのは小銃だった。

我々が普段使っている Gewehr 21 よりも幾分短い。カービンか？

「知つての通り、現在我が国では魔道師戦力の拡充のために”拡大志願”を実施している」

要するに魔導師としての素質を持つ人間の”動員”のことだ。

名目上志願になつてゐるがあれでは徴兵と大して変わらん。

「今まで女性魔導師は後方任務に回される場合が多く、特段問題は起きなかつたが、

今回は「志願」が多く男性同様の前線配置を予定している」
「しかしながら、女性の体格はどうしても男性に劣ってしまい

小銃の取り回しに問題があるという話が上がったため、我々装備局は小銃を新たに開発した」

ああ、なるほど。

「それで、我々ですか」

「その通り。女性で、さらに身長が低い君達こそ新しい小銃を試すのには最適だと判断し、

こうやって引き渡しに来たわけだ」

今まで扱っていた小銃は非常に扱いづらい。銃剣込みの全長が身長に対して9割近くに達するのだ。

自動小銃であるGewehr 21はまだ扱いやすい方で、歩兵用のボルトアクションライフル、Gewehr 98に至っては銃剣を付けてると自分の身長よりも長い。

「当然、問題を発見した場合やその他の意見などは遠慮なく言ってくれて構わない。

むしろ言わないことは帝国の不利になる。軍人としてあるまじきことだ」

「大佐、この小銃はGew 21と同様に扱って良いのですか？」

ハンナが口を開いた。そういえばまだこの小銃そのものについては何も聞いていな

い。

「見てもらって分かる通り、Gew21の銃身を切り詰めて調整しただけだ。

名称もGewehr 21ケルツ。

我々としては全く新しい小銃を用意したかったのだが時間の問題で単なる騎兵銃カラビナーになつてしまった。

取り扱いはGew21と変わらないから覚えることが少なくて悪くはないと思うが「早速ですが意見よろしいでしょうか」

この後、我々2人は文字通り遠慮なく様々な意見を述べ続けた。

帝国の魔導師戦力と私の生存のためには遠慮している場合ではないのだ。

要約すると、

・上下逆にしたときの排莖不良が多い。現在は近接制空戦は主流ではないが、演算宝珠の高性能化に伴い高速化すれば航空魔導師の戦いは近接制空戦が主流になる。

このため、機動条件下での動作は必ず改良するべき。

・銃は制空戦闘用と対地攻撃用に分離するべき。

・曲銃床では反動制御が難しい。ピストルグリップと直銃床の組み合わせの方が良

い。これは地上攻撃用装備も同様。

い。 30 発程度。

- ・ 近接制空戦中は弾切れが命取り。装弾数は取り回しに支障がない範囲で多い方がいい。

- ・ 近接制空戦闘中にフルオート射撃が可能な方が良い。
- ・ 制空用の銃は反動制御を容易にするため短小弾。但し投射魔力量と弾道特性を確保するため口径はそのまま。

以上が主だった意見ではあるが、

察しの良いあつちの世界の人物が聞いていたならば、もう分かったかもしれないが、要するに S t g 4 4 と F G 4 2 を作らせようとしているのだ。

制空戦用に S t g 4 4、対地攻撃用に F G 4 2 といった具合だ。

あまりにも具体的に、そして大量に意見を述べているので最後には

「後ほど書面で出してくれ。可能な限り要望には応えよう」ということになった。

1923年6月某日

北方ノルデン地域第八警戒区

ここ数日、どうもきな臭い。

夜には友軍の訓練もないのに遠くから砲撃音はするわ、哨戒飛行のときに当たる北風から明らかに硝煙の匂いが混じっている。

現在の状態は、帝国と協商連合がそれぞれ陸軍部隊を部分動員充足状態で国境線上に貼り付けている状態。

最早いつ開戦しても不思議ではない。

『こちら北方^{ノル}方^{デン}地区^{ノルデン}航空指揮管制^{フエアリー08}。フエアリー08、定時連絡』

『こちらフエアリー08、感度良好。異常なし』

『ノルデンコントロール了解。所定経路での哨戒任務を継続せよ』

『フエアリー08了解』

「暇だ。ポーランドの長距離偵察を思い出すほど暇だ。

このままこつちでも偵察や観測の仕事ばかりに回されるなら航空魔導師やめようか」

我々研修生の一部は哨戒任務を任されていた。

2人組での哨戒任務なのだが、例によって相棒はハンナ。

この“空飛ぶ非常識”は我々が到着する前に陸軍との連携訓練を終えており、研修生は研修生同士で班を組むために2ヶ月ほど、待機命令が出続けていた。

それで相当退屈したらしく、

終いには“自主的な飛行訓練”と言って駐屯地を抜け出し海を渡ってコペンハーゲンまで本を買いに行っていた。

——それが許されるのが全くもって謎だ。

それはそれとして、軍法会議にかけられる前に同期に忠告をしておく。

「研修生が哨戒任務を実施するような状況で退役が許されると思うか？」

開戦すらしていないが魔導師の人的資源は実質、徴兵によって全て利用することになり、

魔導適性のある子供は皆幼年学校とやらに送られた。

「学費を払わされるだけで済むわけが無い。

既に魔導適性がある者は徴兵され、幼年学校で立派な、いや中途半端な新兵が急造されてる真つ最中。諦めろ」

特にこの前線配置中に退役など願い出たら、

逮捕で済めばまだ良いが状況によっては敵前逃亡として処刑もありうる。

「もし仮に戦争が起きなければ、また哨戒任務に縛り付けられ終わるわけか……」

ポーランド侵攻からバルバロッサまでの期間のことを思い出しているのだろうか。

その顔からにじみ出ているのは悔しさか、出撃への執念か。

『ノルデンコントロールより全空域に通達。哨戒班が協商連合軍陸上部隊の越境を確認。哨戒任務中の各班は交戦規定を防空哨戒戦に移行する。別命あるまで待機せよ』

「待つてました！」

戦鬪狂め。

やたらとタイミングよく越境してきたが、連中は帝国に勝つ見込みがあつてこんなことをしているのか？

どつかの大国から協力や義勇兵、レンドリースの約束を取り付けでもしない限りこんな真似は普通できない。

例えば、もし仮に南半分に米軍が駐留してる状態の朝鮮半島においてDPRK単体では戦争を起こせないが、

これにPRCが義勇軍を派遣することを確約すれば話は変わる。

——まあ実際には米軍はほぼいなかったし、DPRK単体で南進して釜山まで追い込まれ

PRC義勇軍の派遣はスレッジハンマー作戦の後になるわけだが：

これらを現在の状況に当てはめればDPRK単体で38度線を越えて南進している”ように見えている”段階だ。

どうせ”ブリテン”か”フレンチ”辺りが焚き付けたのだろう。

若しくは協商連合では救いようのない馬鹿共が政治を行っているか。

『ノルデンコントロールよりフェアリー08、観測任務に切り替える。事前射点群 グスタッフ Gへ向かえ。

以後はゴリアテ07に引き継ぐ。周波数そのまま』

『フェアリー08、観測任務、地点G、周波数維持』

通信内容を再確認。リードバック

「地点G、方位20だな」

ハンナは通信を聞きながら移動を開始していた。

到着までハンナが先導、私は通信に集中する。

以前はこれを全部一人でやらされていたらしいが、流石にどうかと思う。

『こちらゴリアテ07、フェアリー08応答せよ』

砲兵部隊から連絡。周波数そのままだと通信相手ごとに切り替えなくて済むから本当に楽。

『こちらフェアリー08、感度良好。まもなく観測地点に到達する』

『確認。砲撃は事前試射に基づき転移射で行う。但し目標が射点群より1km以上離れる場合は通常の観測射撃に移行する』

『フェアリー08了解』

転移射とは事前の観測射点を基点に目標位置、気象条件等を考慮し補正し、観測射無しで効力射を実施する方法である。

今回に関して言えば事前に歩兵が通過しやすい地点を確認し、

そこに演習弾を用いて試射を何度か行い、それを基準に転移射を実施する。

『フェアリー08からゴリアテ07、観測地点に到達』

眼下に広がる北方国境の森の中には幾つかの道があり、

その中の一つに整列して移動する歩兵を見つけた。

なんだあれは。他国の領土に武装して侵入しておいてパレードでもしているつもり

なのか？

ハンナは既に地図を出して位置を確認していた。変人だが流石に仕事が早い。

「街道の方だな。街道G—3上、G—3—11から3—9にかけて」

私が地図を見る必要すらない。

『フェアリー08よりゴリアテ07、目標地点はG—3—11からG—3—9の間を南方へ行軍中、旅団規模、速度1』

『ゴリアテ07了解』

この場合、行軍で移動することを見込んでG—3—12からG—3—10を目標地点とする。

通常であれば位置を確認するのに多少時間が掛かるが、街道上だとすぐに場所がわかる。

お陰で連中は既に死んだようなものだ。

相手のレベルが低いと考えるべきか、時代のせいだと考えるべきか。

次は砲撃の観測に入り、ハンナは周辺警戒を行う。

——やっぱりこれ一人だと危なくないか？

『ゴリアテ07よりフェアリー08、転移射を開始。観測求む』

『フェアリー08了解』

微かに砲弾の風切り音が聞こえ、直後に歩兵隊の中心で砲弾が炸裂し人が吹き飛んだ。

遠くから複数の乾いた炸裂音が聞こえる頃には

歩兵がまるで水を注がれた蟻のように混乱し逃げ惑っていた。

試射も無しに大量に撃たれた砲弾は、見事に敵歩兵隊を射界に捉えており、

1分としないうちに散り散りに逃げ始めた。

早くも連中は組織戦闘能力を喪失したと考えていいだろう。

『こちらフェアリー08、敵歩兵隊は散布界内にあり。射撃を継続されたし』

私は慈悲深いからな。

敵とは言え、開戦早々、中途半端に生き残って後方勤務という不名誉を防いでやるためにも

あの歩兵隊には「名誉の戦死」をさせてあげようではないか。

『ゴリアテ07……いい』

ん？

『こち……ノ……探……迎……』

なんだ？ ノイズだらけで聞こえない。ECMか？

「ECMだな。方位340から魔導師部隊」

ハンナが目視で確認したようだ。妨害で聞こえなかったのは敵魔導師発見情報だったか。

「数は？」

「恐らく一個中隊。推測距離11000、進行方向がずれているがこのままでは見つかるだろう。」

接敵するまで3分と言ったところだ」

まずい。流石に2人で一個中隊を相手にするのは宜しくない。

その片割れが人外の類であったとしても、信頼に値する成果が無い以上は後退するのがセオリー。

足元の歩兵隊は最早壊滅したが、その後ろにいる連中も砲撃目標。

だがそれを観測するのは増援と合流してからでも遅くはない。

『フェアリー08からノルデンコントロール。点群Gより方位340、距離9000、高度4200。敵一個魔導中隊が接近中。一時後退する』

『こちらノルデンコントロール。後退は許可できない。遅滞戦闘に努めよ』

——何？

『フェアリー08、ノイズが酷い。再送求む』

実際にははつきり聞こえているが理解が及ばない。

この状況で後退を許さないというのはシンプルにまとめ”死ね”ということだ。

『ノルデンコントロールからフェアリー08、サブチャンネルで通信障害は確認できない。』

後退は許可できない。繰り返す。後退は許可できない。遅滞戦闘に努めよ。増援は600以内に到着する』

つまり、10分間、一個中隊と戦えと？ 2人で？

600秒。それだけあればカップラーメンの湯を沸かして注いで食べて片付けまでできる。

6倍の敵と600秒交戦して生き残れと？ 何を言ってるんだこの指揮官は。

死ねと言いたいなら素直にそういえば良い。何も得られないのに死ねと言うのなら抗命の正当な理由にもなるだろう。軍法会議で弁明できる。だが敵は目前、下がれば友軍に被害が出る。

——引けば敵前逃亡。処罰は言うまでもない。進めば、一応死なずに済む”かもしれない”

『……フェアリー08了解。せいぜいあがいてみせましょう』

『幸運を祈る。神は我らと共に』

「schei・e！」

クソツタレクソツタレクソツタレ！ 態々意図的にこんな状況に放り込むクソツタレな神など

碌でもないゴミに決まっている！

そんなのが一緒に居たら心地悪いうえいつ死ぬか分かったものじゃない！

神は我らと共にい？ そんなんで勝てるか戦争に！

「仕方ない。私が低空で接近して突き上げる。連中が陣形を乱したところを狙え」
流石に30回撃墜されて死線を何度もくぐり抜けてきた奴は安定感が違う。

「……それが最善か。自分が囨になる。感づかれるなよ」

「見えても対応できんよ」

そう言うとはンナは急降下で加速し高速低空飛行に入った。

同年同日

協商連合軍第五魔導大隊本部小隊及びA中隊
帝国軍北方ノルデン地域第八警戒区

『師団本部から全隊へ！ 一時後退し再編成を』

『こちら第4連隊、現在砲撃されており死傷者多数、行軍不ザツ』

『第4連隊どうした！』

『第8連隊、敵の砲撃により死傷者多数、後退もままならない！敵砲兵をなんとかしてくれ！』

『こちら第1砲兵、敵に捕捉され砲撃を受けている！』

協商連合軍の広域通信は混乱する一方であった。

無線越しにも聞こえる砲撃の音、壊滅しても後退できず一部の連隊は通信が途絶えて

いく。

「カニンガム！ 地上の状況は」

「現在、第3、4師団の作戦区域下において4、5、8の各歩兵連隊が壊滅、

その他砲兵旅団のうち第1が砲撃を受け後退中、第2及び3が対砲兵射撃を行うため再配置中。

全体的に混乱していて本当にこれで合ってるかどうかすらわかりませんが……」

政治が国内の不満を国外に逸らすため、帝國との係争地であるスコーネ地域を奪還するという目標を掲げ、

威勢よく陸上部隊を進めたはいいが、予想外の反撃により一部の部隊が壊滅。

まるでフォークランド紛争のような流れだ。

尚、開戦の実態はアルゼンチンより遥かに愚かな有様。

帝國を取り巻く情勢を見れば、共和国と連合王国辺りに話を持ちかければ

各種支援や万が一の場合の同時宣戦布告、独立保障などの約束を比較的容易に取り付けられたはずだが、

それを全くせず動員をかけて越境しているのだから無能以外の何物でもない。

防戦の準備？ 戦争するのは計画に含まれないので当然していない。

そしてそのツケは現在進行形で協商連合の兵士、いや国民が血と命で支払っている

真つ最中。

このうえ戦争が長引き、アカいエージエントが混じった日には革命不可避である。

「政治家共め、何が」緊張感ある軍事演習に過ぎない」だ！

協商連合軍で第五魔導大隊を率いるアンソン・スー中佐はその無能共を呪っている最中であつた。

だがそんなことをしても現状は変わらない。

『大隊各騎、我々は友軍の後退を援護するため敵の観測手を排除、敵軍砲兵隊の位置情報を友軍に通達した後離脱する』

「これが我々が今できる最善だと信じたい」

マイクを外して呟く。

『B中隊了解』『C中隊、了解』

『敵砲兵隊搜索中に敵の迎撃があつた場合は各中隊長の判断で離脱せよ、以上だ！』

対砲兵射撃よりも友軍の撤退援護及び観測妨害のための航空戦力の温存を優先するという判断である。

「大隊長！ 2時方向に観測手を確認！ 距離4000！」

「よし、排除して敵砲列の搜索に「下方敵騎！」

しかし対応は間に合わず。

中隊は下方から3発の射撃を受け、3つの爆発は容易に防殻を突き抜けた。

初撃で3人が空から消え、敵魔導師は速度を維持して中隊の上方に離脱、

様子を窺うかのように緩く旋回し始めた。

「敵騎左上方！」「撃ち落とせ！」

幾多の弾が上方に向けて放たれるが一発たりとも当たらない。

上を取られ、その回避運動と高速性能の前にアンソンは焦っていた。

相手は普通の魔導師ではない。

その異様に低い身長からひと目で子供だと分かったが

だがそれに関して考えている余裕はもはや無く、

敵観測手と同時にあの子供の相手をして、更に敵の増援が来る可能性が高い。

『大隊長からB中隊へ！A中隊は奇襲を受け交戦中、後退を援護してくれ！』

『B中隊了解』

アンソンは更に指示を飛ばしまくる。

「ラガルド！ お前は小隊を率いて観測手の相手をしろ！」

「了解大隊長！ 任せてください！」

用語解説

・歩兵銃

名前の通り。歩兵が持つてる小銃。

帝国軍ならば Gewehr 98 のこと。

・ Gew 98 / Gewehr 98 (ゲヴェーア98)

実在するマウザー製ライフル。1898年制式化された歩兵銃。

本体だけで全長1250mm。銃剣も着けると更に150—300mmほど長くな

る

二次大戦では主に騎兵銃の Ker 98k が使われたが、Gew 98とは異なるので注

意

・騎兵銃、カービン、カラビーナー (Karabiner)

名前の通り。騎兵のための銃。

標準型が歩兵銃で、それを短くして作ることが多い。

日本ならば38式歩兵銃と騎兵銃の関係がそれに当たる

カービンは英語、カラビーナーはドイツ語。

・ Ker 98K / Karabiner 98 kurz

PUBGで有名になったかもしれないドイツ軍の二次大戦における主力小銃。長すぎて取扱の難しかった Gew 98 を短縮した騎兵銃。

Kurzも「短い」を意味するドイツ語で、「1898年制式採用の短縮型騎兵銃」の意味になる

・ Gew 21 / Gewehr 21

独自設定。「1921年制式採用の歩兵銃」を意味する。

Gew 43 とほぼ同じ仕様の自動小銃。

Gew 21k は「21年制式採用の短縮型歩兵銃」である。

作中では騎兵銃と呼ばれているが、

あくまで試作品扱いで制式化されていないため名称がおかしい。

Gew 21k という名称は装備局が勝手につけた仮名だろう。

メタ説明：

アニメ版で使われているメキシコで設計開発されたモンドラゴン M1908 が技術力も生産力もあつて戦時ではない段階で用意された帝国軍の自動小銃が帝国で開発生産されたものではないという事に違和感があつたために上乗せされた独自設定。

4：北から中央へ、中央から西へ

1923年6月某日

スコーネ駐屯地臨時軍病院203号室

ターニャ・デグレチャフが目を覚ましたとき、見えたのは天井だった。

所謂見知らぬ天井というやつである。

何が起こったのか、さっぱり分からなかった、覚えていない。

それでも、魔術ドーピングをしすぎたことは覚えているが、その影響とも思えない。

直後、頭痛が襲った。

「いつつ…」

更に立て続けで襲ってくる足と腕からの痛みから状況をようやく理解した。

「少なくとも死んではない…」

そして病室であることも分かった。

「起きたか、怪我の度合いにしては早いな。まだ数時間しか経ってないぞ」

視界の端つこの人影が本を畳み、デグレチャフは記憶の空白について問いかける。

「お前が離脱して、一人で中隊を相手にしなければならなかった後の記憶がない」

「もう一個の中隊を相手にするために離脱した後のことか？」
「そこからだ」

交戦中、新たな敵魔導中隊の接近を感知したルーデルは
合流を防ぐべく一旦離脱して迎撃に向かい、

デグレチャフは一個中隊を相手にせねばならなくなり、それ以降の記憶がない。

「その中隊と交戦して8騎潰して、

味方増援を感知したのか後退したから戻って合流しようとしたらターニヤが自爆した」

「私が、自爆……」

「覚えてないか？」

頭痛が続く頭を抱えて朧気な記憶を掘り起こす。

「——思い出してきた。弾切れを起こして……」

「地面に落下したターニヤを回収して離脱してそのまま病院送り。

敵中隊が3人になって離脱していったのを見たくらいか」

頭痛で情報と記憶を上手く整理できない。

「今は休みたい。明日でいいか」

あの戦鬪の翌日、再び病室に現れたハンナから前日の戦鬪での戦果が伝えられた。

ハンナは撃墜8、未確認及び共同なし。

私は撃墜5、未確認3、共同なし。

これが2人の戦果であり、新兵2人が2個中隊相手に出したものとしては驚異的である。

当然、叙勲モノの戦果だ。

——まあその新兵のうち一人はブランクがあるといえ通算軍歴12年くらいのベテランだというのは置いといて。

今更ながら、ハンナ本人は8騎潰したら敵が逃げたと言っていた。

本人は味方増援を感じたからだと思っっているようだが、

中隊相手に数分で半壊どころか壊滅したら普通逃げる。

むしろあの異常な動きを見て逃げなかった辺り、敵の中隊は優秀だったのかもしれない。

さて、その尋常ではない“初”実戦から数日、ベッドの上で“人外の相棒”を伴って、その勲章が授与されようとしているのだが……

「ターニャ・デグレチャフ准尉及びハンナ・ルーデル准尉。

貴官らは協商連合軍との戦闘において、2人で2個中隊と交戦。

満身創痍になりながらも、増援到着までに合わせて13騎以上を撃破し敵2個中隊を撃滅。

敵魔導部隊の対砲兵攻撃を阻止した。その行動と勇気を讃え、銀翼突撃章をここに授与する」

銀翼突撃章。

銀翼突撃章は帝國の勲章の中でも特殊なものの一つで、

窮地に陥った味方部隊を救った者のうち、戦史に記録すべき人物のみに与えられる。

また、通常の勲章と異なり上官が推薦するのではなく、救われた側の部隊の指揮官が推薦するという

かなり特殊な勲章。

個人の、それもただの下士官もしくは尉官で後世に名前を残す戦史に記録されるような人物は少ない。

居たとしても、殆どが勲章を授けられる前に死亡している。

日本で例えるならば爆弾三勇士が分かりやすいだろうか。

実際は導火線の長さを間違えて爆死しただけという説もあり、

劇的に死ねばストーリーとしては上出来。

死なずに戦史に一兵士が名を残すには

それこそ船坂弘、シモ・ヘイへ、ルーデルのような尋常ではない記録を残すか、

もしくは“コマンドー”ケリーののように幸運と狂気で部隊を救う必要がある。

帝国においても同様であり、そのような人物のみが銀翼突撃章を授与される。

立ち位置として一番近いのは米軍の名誉勲章、所謂“メダルオブオナー”。

こちらでも死後の授与の比率が高い。

但し、銀翼突撃章よりは遥かに多く授与されている。

我々2人はそれを久々に生きたまま授与された。

要約するに、エースとやらになってしまったのだ。

これの何がよろしくないか。

最前線での活躍を命じられる可能性が高いということだ。

ルーデルのように働きすぎてその死が士気に与える影響を恐れ、

前線から下げられる可能性はあるが、残念なことに帝国には余裕がない。

何せ周辺各国との関係は良好とは言えないため、全方位が敵になる可能性がある。

例外が2カ国ほど存在するが、一つは永世中立を宣言しており

更に国家自体が究極の要塞のようなものであるため、“障害物”や“通行不可能地形

”という評価が正しい。

もう一カ国は帝国との国境紛争を抱えながらも比較的友好的だが、場合によつては十分敵になりうる。

まあその程度ならどこの国でも有り得る話だが、帝国はその周辺各国のうち、4カ国が列強国だ。6カ国の列強国のうち4カ国が帝国のお隣。

更に私の推測が間違つてなければ、

大洋の向こうの大陸にある列強の某新興国も戦争に介入する可能性が高い。当然敵の側で。

本当に、立地としては最悪と言わざるを得ない。

この上、”二重帝国の片割れ”、”もとい”破片か。

細々した部分を他国に持つていかれているのだから周囲全部を相手にして戦う日が来たら

単純な考えならば、”第二帝国”と二重帝国の同盟よりも短期間で”帝国”が敗北するだろう。

因みに第三帝国は事情が大きく異なるので比較には使えない。

さて、そのような状況にあるのだから、

圧倒的な戦果を叩き出せば前線から下げられる可能性もあるにはあるが、戦況によっては後方勤務に回されないこともまたありうる。

そこまで到達する前に戦つてる間に死ぬ可能性のほうが遥かに高いし、

私はあの魔王のように不死身ではない。

そのうえ、同時に生きたまま、

いや負傷もせず勲章を受け取った”信頼できるがあまり一緒に飛びたくならない”相棒は前線大好き人間である。

恐らく皇帝がカイザー直接命じても前線から下がるということをしないはず。

私の立場は”それ”と常に比較されるだろう。

後方に行きたがる姉と前線で戦うことを死んでもやめない妹。

”姉妹”呼ばわりされていることが、今になって宜しくない評価を招くことになりかねないと気づいた。

だが全ては手遅れ。浮いた存在として比較されるのは間違いない。

表向きだけでなく、本当に前線に張り付いて…

いや逆にハンナと同じ部隊に居たほうが生存確率が高い気もする。

奴ならば、たとえ敵陣ど真ん中であつても周囲の敵を一掃して回収するに違いない。実際敵地に落ちた部下を何度か回収し、果てには離陸できず徒歩で帰つてきたこともあつたらしい。

何にせよ、「信頼はできる」のは間違いない。

それが生存率につながるかどうかは別の評価が必要だが。

1923年7月某日

スコーネ駐屯地 師団本部軍令部室

何たることだ。

仮に存在X以外に神がいるのだとすれば、

そいつに関してはある程度信頼してやってもよいの”かも”しれない。

但し今後どうなるか分からないのだから、あと50年ほどは評価を保留させてもらうがね。

因みに存在Xに関しては神とするには余りにも酷いので信じる気は1ミリもない。

何が起こつたのか。

簡単だ。後方勤務だ。

私、ターニャ・デグレチャフ少尉の配属の内示は“後方勤務”であることを示していた。

「本国戦技教導隊付きの内示と、同時に総監部付き技術検証要員の出向依頼：テストパイロットでしようか」

「先月末、ルーデル少尉にも同様の内容で内示が来ていたのだが本人は前線配置以外にありえないと言いつ張るもので、とりあえずノルデン管区で新規の小隊編成をしてもらうことにしたが……」

協商連合の皆様。

脳内という場所ではありませんが、心よりお悔やみ申し上げます。

誠に残念ながら、あなた方は悪魔とか鬼神とか魔王とかそういう何かとんでもないものと戦わねばならなくなったのです。

抵抗は概ね無駄なので諦めて潔く皆殺しにされて頂きますよう心より忠告を申し上げますとともに、

葬儀に關しましては賠償金の支払いという形で云々

そしてルーデル小隊に配属される新兵たち。

その隊長は生還率は保証するがめちやくちや速いから随伴するのは諦めろ。

——まあ、予想通り。

あの前線大好き、自分の足よりも出撃が大事な奴が後方に行くわけがない。

「ルーデルは士官学校でも飛行指導を依頼されたことがあります。

本人は無理だと言つて断つておりましたが」

「ルーデル少尉の飛行技術は帝国のために役立てた方が良いと思うのだが……」

「同感ではありませんが、本人が言うには航空機での飛行訓練を十分に行わねば危険とのもので、

私も部分的に真似して高速飛行に付いていくのが精一杯であります」

「何にせよ、人事局はルーデル少尉と同じく銀翼突撃章持ちの君にも部隊教育能力を期待している。

ここだけの話、上もエースとは言えその年齢で前線に出すのは対外的にも宜しくないと考えているようだ。

この内示をそのまま受け取つてくれると助かる」

帝国もまだ外面を気にできるほどの余裕はあると捉えるべきか。

「分かりました。配属命令を受領いたします」

上がそう望んでいるなら仕方がない。仕方がない。

対外的に良くないなら後方勤務も致し方ない。仕方ない。
兵士は上の命令を聞くだけで良い。

最前線で外面気にせず暴れてる少女が居るらしいが、
奴を止めることは何者にもできないので考えるだけ無駄だ。

1924年8月上旬某日

首都ベルリンから南西30km

総監部装備局 ポツダム試験場

”存在X以外に神がいるのだとすれば、

そいつに関してはある程度信頼してやってもよいの”かも”しれない。”

そんなことを考えた奴がいるらしい。

私だ。

だがそれを考えたやつは多分馬鹿だ。当然私も馬鹿だ。

つまりそのときの私は後方勤務の内示に、嬉しさのあまり頭が壊れたのか、判断が鈍ったのか。

それとも変な脳内物質が分泌されて薬をキメていたような状態だったのか。まさか牛乳が不足していたのが原因か。

神の存在を多少なりとも認めてやるかとカス程度に思った矢先にこれか。

評価を保留にしたのは正解だったようで、私は今、後方勤務だというのに命の危険を感じている。

後方勤務が決まった後、ハンナと話したが

『テストパイロットはかなり危険だぞ?』と言われたのを今思い出している。

走馬灯かもしれない。酸素が足りない。減圧が酷い。頭が痛い。頭痛が痛い。それらに対処するために更に更に魔力を使う。

『デグレチャフ少尉! 意識はありますか!? 少尉!』

私は今、既存の演算宝珠では不可能だった高度9000ftに居る。

辛い。そして宝珠は非常に不安定で、魔力を内部に保持できるため、いつ爆発するか分かったものではない。それも半端ではない威力の爆発だ。これは前線より危険なのではないかと疑う。

間違いない”安全な後方勤務”の類ではない。

少なくとも奴の僚 F1. g e i m a n n 機の方が100倍マシだ。あまりにも酷い。

ハンナ・ルーデルも結構な狂人だが、当然こつちの世界にも狂人が居るもので、そのうえ信頼できない。

”信頼出来るが一緒に飛びたくない奴”と”信頼できないし一緒に飛びたくない奴”

どちらがマシか。言うまでもあるまい。

早急に転属願いを出さなければ。

帝都ベルリン中央駅

8月下旬某日

転属願は正常に受理され、私は西方国境への転属が決まった。

戦争が起これば前線勤務になる位置取りではあるが、

あの確率で爆発するような爆弾を抱えたまま飛ぶよりはマシだ。間違いない。

因みに。その爆弾は脅迫とマッチポンプを当然のように使ってきて

神とは到底思えない行動を取る存在Xに祈りを捧げれば爆発しないようで、

意思とは関係なくあれを着けてると強制的に祈りの言葉を言わされる。

完全に呪われたアイテムだがその性能だけは認めざるを得ない。

こうして一応使えるようになった九五式は次の任地に既に送られたらしい。

尤も、私以外が使うと起動すらしなくなつたうえ、

名目上は「実戦での評価試験」となるため装備局の紐付き。

…まあ呪われていても死ぬよりは良いか。

「現在動員令に伴い臨時ダイヤでの運転となり…」

「第八方面軍行き列車が到着しますので…」

「第104師団はどれに乗ればいいんだ？」

今日の中央駅はいつにも増して人が多い。

それもそのはず。

帝国内の鉄道は現在、兵員輸送のための特別ダイヤが敷かれている。

対協商連合ではない。対共和国戦の準備のためだ。

8月中旬、遅すぎる気もする動員令が共和国にて布告された。

これに対抗するためにも帝国も拡大動員を実施し、対共和国国境へ160師団が配置されることとなつた。

総兵力200万近くに及ぶ大規模動員であり、

それを輸送する鉄道は師団配置のための装置として全力稼働し始めた。

因みに戦争装置として高い完成度を持つ帝国は、共和国よりも早く動員を完了でき

る。

鉄道網を見ただけでその差は歴然であり、程度に差はあるにしろ、普仏戦争の焼き直しのような状態になる。

先に動員令を布告した共和国側が侵攻する前により多くの兵力を国境に配置できると思われる。

時間的余裕があるので塹壕を掘る時間すらある。

この時点で普通なら共和国の敗北は確定したようなものだが、共和国がそれを理解するかどうかは不明だ。

何故ならこちらの世界で普仏戦争に相当する戦争が発生しておらず、

よって鉄道輸送が原因の敗北は発生していないし、機動戦計画を無理に遂行する可能性もあるが、

何にせよ十分な塹壕網を作ることのできる帝国に負ける可能性はほぼ無い。

つまるところ、開戦前から共和国は勝利できないことが半ば決まっている。

極東で起こった戦争の見学に行つたくせに新しい戦い方を学ばなかつた愚かな国として。

因みに帝国はちゃんと反映されているため塹壕戦での防御時の消耗抑制に関しては時代を考えると完璧に近い。

但し、双方が防戦に入り消耗が少なくなつていった場合は戦争の長期化が予測され、その場合どう転ぶかは分からない。

ただ、一ヶ月で共和国が欧州の国からアフリカの国になる、などという事態は起きそうもない。

何故ならこの世界は一次大戦を経験していない、

そのため大規模塹壕戦の経験がなく、突破戦術に関して有効なものを見つけ出せていない。

現実に視点を戻すと、本当に人が多い。新宿駅ではないよなここ。

どちらかと言えば帰省ラッシュ時の上海駅のほうが近いかもしれない。

荷物を抱えて長距離普通列車に乗るために待機して地べたに座り込んでいる。

違うのは全員が男であることくらいか。

動員のための予備役の男共が滅茶苦茶多い。改札に近づきたくない。

階級章と勲章が分からないバカが居ないとも限らない。

最悪その場で友軍に危害を加えたとして射殺しても良いのだが、

生憎ライフルしかなく拳銃の持ち合わせがない。

この人混みはライフルを撃てる状況ではなからう。

…さて、それで私はどれに乗ればよいのやら。

転属令と共に渡された移動許可証を再度確認すると、利用は一等車と書かれている。動員輸送時の一等車は将校の連絡輸送などに使われており、

軍人もしくは公務員であれば帝国陸軍運輸部もしくは帝国海軍運輸局発行の移動許可証さえあれば切符なしで乗れる。

一等待合室は将校専用となり一般人はたとえ一等の切符を持っていたとしても入ることはできない。

動員輸送中の一般市民の移動は大きく制限され、移動するには軍人と同じく移動許可証が必要になるうえ、切符も必要になる。

加えて、軍の輸送に支障のない列車を待たねばならない。

更によえば、一等車以外は二等どころか有蓋貨物車すら人員輸送に使っており実質的に使えるのは一等車に限られるのである。

——まあこんなこと考えても仕方ない。

一等待合室へ行くか。あそこなら改札を通らなくてもいいだろう。

煙草臭で鼻が曲がりそうだがまだこつちのほうがマシだ。

待合室で噂を聞いた。

ルーシー連邦は現在、スオミ共和国と戦争中だ。

しかし、ルーシー連邦との圧倒的な国力差にもかかわらず

戦争はスオミ共和国優位に進んでいるらしい。

どうも”こつち側のヨシフ”も人間不信に陥つたらしく、絶賛大粛清開催中。

そもそもレーニン抜きでヨシフが単独である国を革命を起こして、纏められると思えないのだが一体どういふことなのだろうか

話がそれてしまったが、

つまるところ大粛清で弱体化した連邦はスオミに勝てていない。

私とハンナにとってはどこかで聞いたことがある話、冬戦争だ。

そしてその噂の中であるネームド、”白い死神”の噂を聞いたわけだが

冬戦争の白い死神と言えばあつちの世界では有名狙撃兵のことだ。

それも同じフィンランドの地で。

その航空魔導師はあまり空を飛ばず、地上などから超遠距離で狙撃してくるのだという。

かなりの数の連邦軍航空魔導師が撃墜されたようだが正確な数は不明。

白の迷彩服をまとったそのネームドは年齢はおろか、

男なのか、女なのかすら分からない。

味方にとつてもその正体は極少数の人間しか知らないとか。

我々としては転生者ではなく

史実通り獵師が訓練で化けただけの存在であることを祈るばかりである。

因みに、スオミ共和国程度の国では演算宝珠を作れないのではないかと思われるかもしれないが

実際には帝国と連合王国、更に少し前には協商連合からも支援が行われており、数は少ないものの他国製の演算宝珠を運用しているようだ。

用語解説

・二重帝国

1918年まで存在した、オーストリア＝ハンガリー帝国のこと。

何故二重帝国というのかといえは

「オーストリアとハンガリー、2つの国に同一の皇帝／国王」という名目のため

×××××××××××××××

・第二帝国（ドイツ第二帝国）及び第三帝国（ナチス・ドイツ）

ナチスが使ったドイツに存在した帝国の呼称及び自称。

”神聖でもなければ、ローマ的でもなく、そもそも帝国ですら無い”と言われた
神聖ローマ帝国を「最初のドイツ人帝国」として「第一帝国」

プロイセンがドイツを統一して誕生した「ドイツ帝国」を「第二帝国」

そしてナチス・ドイツが「第三帝国」を自称した。

5：低地にて

一等客車の寝台で横になりながら、ルーデルに関することを一つ思い出した。

『奴一人で全赤軍戦車の1%強を破壊している』

『仮にルーデルが例の勲章通り12人も居たら単純計算、そいつらだけで赤軍戦車が14%ほど消滅する』

——こつちで円卓十二騎士の席をすべて埋めるように、あんなのが12人居たら帝国は無敵だ。間違いない。

そういえば、

Fw190かJu87に30mm機関砲を4門載せて弾種をAPCRにした奴があればもつと殺せてたとか言ってたな。

現状のハンナはそれを遙かに凌ぐ継続火力と貫通力を備えている状態なわけで、これがどこまで戦果を伸ばすのかというのは非常に気になるものである。

1923年8月8日

ブリュッセル郊外 第七強襲戰團駐屯地

西方方面軍司令部直轄機動打擊群

第七強襲戰團、第二〇五魔導中隊。それが私の新しい配属先だ。

第七戰團は本来北方に配置されていた部隊だが共和国の動員令に伴い再配置となり

「ここ西方に配置轉換された——と聞いている。

「久しぶりだなデグレチャフ少尉。ようこそ我が中隊へ」

「中尉殿、お久しぶりであります」

転属先の中隊本部に到着したが、そこには顔見知り居た。

「今コーヒーや紅茶は無いから代わりに牛乳を飲め。あと上官だと思わなくていい。今まで通りに接してくれ」

「せめてコーヒー牛乳とかは無いのか？」

「なんだそれは」

牛乳中毒の少女中尉殿は駐屯地の大隊本部テントで私を待っていた。

出されたのは紅茶でもコーヒーでも酒でも水でもない。彼女の常備飲料であるところの牛乳だ。

牛乳瓶を持ってきた。しかもでかい。500ml瓶。

「しかしまあ、ここまで短期間でまた昇進とは珍しいどころじゃないな。何があった」「特殊な昇進というやつだ」

話を聞けば、遠くないうちに彼女の下に戦技教導隊から2名ほど研修で送り込まれてくるらしい。

現在、その2名は航空隊に派遣されて航空機の操縦訓練と簡易的な空戦の訓練をしているそうだ。

それで階級が逆転してはまずいということと適当な戦果と引っ付けて昇進したんだとか。

要するに上の都合だ。と後付けした。

まあ、こいつのことだから既存の戦果からしても大佐辺りまでの昇進は確実に見ていいし、

上もそれを分かかって昇進の前払いなんて事をしているのかもしれない。

———というか、上は本気でルーデルの飛び方を他の連中にも真似させる気らしい。

「それで、よりによってこの中隊に転属になった理由は聞かせてもらえらんだろうな」
「私が人事局に圧力をかけた。戦技教導関連の取引みたいなものだ」

上に圧力をかけて配置に干渉するってどんな手腕を使ってるんだか。
相変わらず上を操るのが得意なようだ。

「北方で小隊編成したはいいがやっぱり小隊員が付いてこれないんでな。結局私一人で飛ぶことになった」

これとツーマンセルを組まされた新兵はさぞ苦労しただろう。

「ということは私はここに呼ばれた以上、ハンナの小隊で飛ぶことになるのか？」

——しかし、書類には小隊長と書かれてたはずでは…

「いや、新規に小隊を編成してもらおう」

——？

ルーデル小隊の補充じゃないのか？

「待て、それだと呼ばれた理由と矛盾するだろう」

「これがまた複雑でな…」

中隊本部小隊の隊長が、中隊長のイーレン・シュワルコフ大尉。

その隊員その1がハンナ・ルーデル中尉。

ハンナは研修生が到着次第、新規に小隊を編成するがそれまではこの配置。但しこれは書類上の話であり、実態としてはハンナは第四小隊を名乗ってほぼ単独行動という状態らしい。

ターニヤ・デグレチャフ少尉は第三小隊長。

元々ハンナが隊長を務めていたが、北方に居た頃に隊員が3人其他の中隊に回された。

新兵には無理だという戦闘団本部の配慮だそう。

空っぽになった第三小隊には私と幼年学校から3人新兵の補充で実質新規編成。

——新兵の世話か。生存率が落ちるな…

「で、私を呼んだ理由になってないぞ」

「名目上、小隊長にしておく必要があるという話だ。別に常時僚機が必要だというわけでもないしな」

要するに新兵が増えて不足するであろう士官を一つの小隊に2人以上置くのは勿体無いと上が言ったのでとりあえず小隊長にしておくよ。

「今後とも宜しく頼むよ」相棒」

翌9日早朝

世界は我々を休ませてくれる気は一切ないらしい。

早朝、共和国軍が越境したとの一報が入り武装状態での待機を指示された。

主力の動員が完了しないうちに完全充足の精鋭師団で奇襲とは。

フランスの割には上出来。

「さて、中隊諸君。共和国軍は戦車を先頭に自動車、騎兵を多数用いて

リール、ダンケルク方面から多数越境、

航空魔導師の援護を受けており、行軍速度が非常に速く

今日中にブリュッセル、アントウエルペン正面の防衛線に到達する見込みだ」

地図を開き部隊を示す駒を配置してシユワルコフ大尉が説明する。

「我々の任務は、このうちブリュッセルに接近している軍団の防衛線突破を阻止することだ」

「はいっは…」

「シユリーフェン・プランか？ 攻守方向が逆だが」

あつちでは様々な理由で失敗したシユリーフェン・プランだが、

戦車を含む半自動車化騎兵で実行された場合は恐らく成功する。

ブリュッセルを突破されたら帝国はライン川まで後退することになるだろう。

「最悪の場合、二〇五中隊はこの駐屯地から撤退する。」

その場合は作戦終了後に北に向かって飛んでくれ。ロツテルダムで再編成する」

新兵3人を引き連れて数十キロから数百キロを後退する：厳しいな。戦闘後なら尚更。

「第七戦闘団からは二〇二、二〇四と我々二〇五中隊が制空戦闘を実施する。」

但し第三小隊は不参加だ。デグレチャフ少尉は本部小隊でルーデル中尉とツーマンセルを組め」

「何故ですか中隊長！」

うちの小隊の伍長が余計なことを言い出した。新兵が口を出す状況じゃない。

「やめろハラルド伍長」

「ですが少尉！ 自分は戦うためにここに来たのです！ 新兵だからと「やめろと言ってるんだ！」

死にに来たのかこの愚か者は。

「今の貴様らが行っても無駄死にか足手まといになるだけだ！ これ以上無駄口叩くよ

うなら抗命で処分するぞ！」

そう言うのとハラルド伍長は悔しそうに拳を握りしめながらも黙った。

「申し訳ありませんでした」

「良いかな？　では我らのエース、副隊長殿からお言葉を賜わろう」

ハンナにそう問いかけるシユワルコフ大尉。少し楽しそうに見えるのは気のせいだろうか。

「こういうときは隊長が言うものだろうが、全く……」

そして上官に向けたものとは思えない態度で応じるハンナ。

「新兵達には申し訳ないが、現状においてこれが最善の判断だと考えている。

魔導師との戦闘は体力と魔力を激しく消費し、敵の攻撃ではなく魔力切れで墜落することすらある。

その配分が分かっている新兵が戦闘後、150 km 近い飛行を行うことは危険だ」
「出撃する諸君は義務を全うせよ。ヴァルハラに転属することは許可しない」

敵の作戦の目的は不明だが、ネーデルランド辺りを帝国本土方面から分断して部分的にでも部隊を殲滅させることにあるならば時代性から考えれば優秀であり、

機械化が不完全ではあるが電撃戦そのもの。

その場合、これはシユリーフェン・プランと言うよりマンシユタイン・プランの方が近いか？

仮に作戦目標がネーデルランド分断だった場合はその計画を策定した人物が問題になる。

最悪の可能性は転生者によるものだが、

転生者でなくても一次大戦無しに電撃戦を考えるような奴が共和国軍に居たとすると、

帝国はこの戦争で相当苦戦するか、場合によっては敗北する。

それが誰かという点であるが、一人心当たりがある。

こちらの世界においても、

数は少ないが聞き覚えのある名前でも似たような立場についている奴が居る。

例えばルーデンドルフとルーデルドルフ、

ヨセフ・ジュガジヴィリとヨシフ・ジュガジヴィリ、

——そしてフランスのド・ゴールとフランソワのド・ルーゴ。

ド・ゴールは電撃戦の提唱者であるが、フィリップ・ペタンやモーリス・ガムランら二次大戦基準での無能共によってその主張は受け入れられず、

逆に敵国ドイツによる電撃戦によってフランス本土を離れることとなったが、こつちでこのような作戦を実行できるような地位にいるとすれば…

考えるのは後で良い、今は出撃準備だ。

『アドラー2からアドラー1、^{ツヴァイ} ^{アインス} 第四小隊は先行して敵魔導師部隊を奇襲する』

『アドラー1了解。ルーデル小隊の幸運を祈る』

我々ルーデル小隊は一番槍として先行するため巡航速度を150から350に引き上げた。

これも九五式でないと実現できない速度。但し例外が一名。

「2人だけで奇襲か。普通に考えれば敵は中隊以上の規模だろうが…」

「その九五式があれば2人で大隊相手にするくらいなら問題にはならない。事故死しない限り」

低地地方に配置されている魔導師部隊は第七と第九、第十一戦闘団。

そのうち最も敵に近く優速なルーデル小隊。そしてそこに正面から突っ込もうとしている。

敵も長距離行軍状態だとは言え戦闘団規模で付いていると考えるべきで、

最低でも3個大隊は居るはずで、余裕を見るなら敵も9個大隊もしくはそれ以上。

2人で大隊を相手にすると言っていたが、1.8倍の敵を相手にするということだ。しかしギリギリではあったものの実績として、既に2個中隊を壊滅させている。

九五式の力を最大限發揮すれば大隊規模なら大したことではない…のか？

普通に考えれば、小隊ですらなく班。2人で大隊に突っ込む。

自殺行為以外の何物でもないし、私は自殺願望があるわけではない。あるわけがない。

だが前線に配置された以上、

帝国に宣戦布告すらせず侵入してきている無礼な害虫を駆除しなければならぬし、ここで任務を拒否すれば当たり前だが敵前逃亡。問答無用で銃殺。

そして何より、2人で先行して突っ込んだほうが最終的な生存率は高まる。

普通であれば戦力の逐次投入は愚策である。

だが人数が少ないなら奇襲が成功する可能性が高く、

低空高速飛行ができる二人で、なおかつ圧倒的な速度差、性能差。

敵が混乱しているところに第一、第二小隊が到着する図式の方が敵に迎撃される可能性が低い。

用語解説：APCR

『半自動車化騎兵』というのはそのようなものを指す。

一般に歩兵よりも早く機動できる。

なおサーベルチャージするのは相変わらずの模様

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：自動車化歩兵、機械化歩兵

機械化歩兵はロボットの歩兵：というわけではなく、

装甲車や自動車に乗って移動する機動力の高い歩兵のこと。

概ね騎兵の上位互換に当たる。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：シユリーフェン・プラン

一次大戦前に策定されたドイツによる対フランス戦争計画

中立国ベルギーとルクセンブルクに宣戦布告、ここを通過することでフランスの側面を取り、

パリを挟んで反時計回りに進軍しフランス軍の背後を取ることで包囲殲滅。

短期間で対仏戦争を終わらせる戦争計画ではあるが、

反時計回りの最も外側の部隊は一日40km、1日辺り12—14時間の徒歩移動が必要になる計画であり、

荷物を背負ったまま12—14時間ほど歩くことになり、それを10日ほど続ける。無理。

史実ではパリを目前に進軍できなくなり、そこで戦線が膠着し塹壕戦へ移行していき、

流星に歩兵ではできないので、騎兵や自動車化歩兵などで実行するべき作戦。

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：マンシュタイン・プラン

二次大戦において実行されたドイツによる対フランス戦争計画。

アルデンヌの森を抜けてイギリス海峡まで走り抜けることで

前線に配置された連合軍を包囲殲滅することを目的とする

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：電撃戦

一次大戦後から研究されていた「新しい時代の機動戦」ドクトリン

前述のシュリーフェン・プランは“機動戦”

マンシュタイン・プランは“電撃戦”に相当する

戦車を先鋒に、自動車化機械化された歩兵を前線の一点に投入し、

敵前線後方の脆弱な地点、物資集積施設や司令部などを破壊することで

6：近接制空

先程、ド・ルーゴが転生者である可能性を考えたが

よくよく考えたらその可能性は低い。

一つは、今回の機動戦に用いている師団編成。

報告によれば「騎兵主体だが自動車や戦車がいる」ということだった。

しかし、ド・ゴールが求めていたのは機甲師団であり、騎兵ではない。

仮にド・ゴールの転生者であれば、この“似て非なる世界”でもっと高い地位に立てるよう振る舞い、

完璧な根回しの下、完全な機甲師団を求めるはずである。

だが現実として、出てきたのは中途半端な戦車旅団付き半自動車化騎兵師団。

「機械化した歩兵及び騎兵を戦車部隊に付随させ、更に火力的な支援を行う野砲も機械化、自走化する必要がある」

と主張したのは他の誰でもないド・ゴール自身だったはずだ。

この主張を実現できなかつた結果としてフランスは歴史的大敗に至り、それを見届けておきながら実行していないはずがない。

この前提により、可能性は2つ

一つはド・ルーゴが転生者ではないパターン

発案者は不明ながら戦車を用いた機動戦を思いついた奴が居て実行されたが、何かしらの都合で機甲師団に騎兵を混ぜる他なかった。という可能性。

もう一つはド・ルーゴがド・ゴールの転生者であったとしても、

機甲師団を編成するほどの立場と地位を確保できなかった場合。

結果として、どちらだったとしても現時点ではあまり脅威にはならない。

但し、ド・ゴールは戦後フランス大統領として核兵器の自国開発自国保有を推進した男だ。

もしド・ルーゴがド・ゴールの転生者であればその点において非常に不味い。

詳細な技術情報は持ち合わせてないだろうが、

基本的な知識があるだけでも核開発が早まることは間違いない。

現行の技術で可能かどうかは不明ながら、

原子爆弾自体は「ガンバレルGun Barrel（銃身）式」構造を採用すれば簡単に作れてしまう。

——今考えても仕方がない。ただ奴はそういう点において要注意なのは間違いない。

1923年8月24日 ロンセ郊外

フランソワ共和国陸軍 低地方面軍団 第三魔導大隊

大隊長 シャルル・ナンジエツセ少佐

大隊は地上部隊より少し先行し、更に少数の偵察を前に出していた。

敵魔導師襲来を早く感知することで地上部隊への損害を最小限に抑えるためである。

「大隊長から全隊へ。もうそろそろ敵の迎撃が上がってくる頃だ。」

魔力感知は不完全だということを覚えておけ。目を見開いてよく探せ」

『第2班から大隊へ、ブリュッセル方面から敵魔導師を捕捉。数は2、低空を非常に高速で飛行しており追いつけない』

先行させていた偵察班が敵魔導師を捕捉。

『大隊本部了解』

「全隊聞いた通りだ。噂の新型宝珠の可能性がある。注意しておけ」

この共和国が認識している”新型宝珠”、実はエレニウム九五式のことではない。

九五式と並ぶほどの高性能を持つ九一式装備のハンナ・ルーデルのことである。

ハンナは北方においてもその高性能、上昇、高高度、高速旋回性能により敵を圧倒

し一方的に蹂躪。

そこにポツダムにおける九五式開発の噂が混ざって”あれは新型宝珠を装備したテストパイロットである”と誤認されたのである。

それを装備しているのが初等教育を受けているはずの年齢の少女だとか、既存の宝珠と見た目が変わってないとかいう情報は殆ど戻らなかった。

何せ前線でハンナを見た者がほぼ撃墜、死亡しているか

正常に記憶するだけの精神的余裕が無い状態であるか。どちらかだったからであり、共和国の観戦武官がそこから生まれた新型宝珠に関する推測を真に受け、情報が本国まで届いてしまった形になる。

「敵視認！距離8000！速度300！低空でまっすぐこちらに向かってきます！」

「よし全隊！よく狙え！あれに接近されるな！」

ナンジエツセ少佐は直進で突っ込んでくる敵魔導師に共和国軍魔導師部隊の制式装備であるMAS-22を向け、

銃に固定されているテレスコピックサイトを覗き込んだ。

高速域においては長距離射撃を受けたら回避は困難。

それが既存の航空魔導師の常識。

ナンジエツセ少佐もその常識を信じ、銃を構えていた。

協商連合軍はあの“新型宝珠”に何度も奇襲を受け、多大なる損害を被っていた。

そしてあの“新型宝珠”を装備した魔導師は近接制空戦闘に特化しているとも聞いていた。

対策として、事前に捕捉し大隊で長距離射撃をすれば撃墜できると考えたのである。実際、共和国の宝珠及び補助具は長距離射撃戦に特化して設計されている。

”騎馬”スタイルの補助具はそのためのものだ。

この構造であれば非常に高い安定性を確保できる。

さらに長距離射撃時に“馬”の頭に当たる部分にハンドガードを載せることで安定した狙撃を可能にする。

当然、共和国の魔導師部隊の基本的な戦闘術は長距離射撃によるものになる。

そして現在の魔導制空戦は長距離射撃を主体としたもの。

更に言えば、高い安定性ゆえに訓練期間を短くすることができるといってすぐれものだ。

この騎馬型補助具は、“今のところ”は理に適っている。

欠点として、高い安定性を求めすぎたがゆえに飛行中の姿勢変更がほぼ不可能とな

り、

宙返りなどしようものなら補助具から外れて地面に真つ逆さま。

当然固定具を付けることもできるが、補助具が重く、逆転時制御が不可能なために、上下逆さまにした状態では飛行を維持できない。

これらの点は連合王国で主流の”箒”型にも同様のことが言える。

対して帝国の”前掛け”型や協商連合の”スキー”型などは射角も広く、宙返りも容易にできる。

その代償として制御が難しく、訓練期間が長くなる傾向にある。

姿勢を安定させられなければ戦場に出る前に墜落して死亡する事も珍しくない。

その代わり、自由な飛行姿勢、機動性、さらに小さい被弾面積という利点がある。

特に帝国の”前掛け”型は現在存在する宝珠補助具の中で最も飛行姿勢の自由度が高く、

共和国及び連合王国のものと比較して近接制空戦闘を得意とする。

1923年現在、魔導制空戦闘の主体は長距離射撃戦であり、殆どの魔導師がそのように訓練を受けるが、

以前から宝珠の高性能化、高速化によって次第に近接戦闘へ移行していくという予想があった。

1920年の段階で、

共和国と連合王国では近接制空への移行にはまだ早いと判断し前述の宝珠および補助具を開発。

一方の帝国と協商連合は接近制空への移行を考慮して新たに開発した。

しかし、その帝国であつても接近制空戦闘は未知の領域であり、戦術が確立されていなかったのである

1922年までの段階でも暗中模索という状態だったところに

突然、接近制空戦闘の天才が現れた。ハンナ・ルーデルである。

彼女は士官学校で近接制空戦闘で圧倒的な実力を見せつけ、

更に北方国境地域における研修で単独で一個中隊と交戦、近接戦闘でこれを壊滅させた。

それが軍令部直下の戦技教導隊の知るところとなり、人事局に圧力をかけた。

彼女の飛び方を研究すれば近接戦闘において他国を圧倒できるはずであるから、戦技教導隊に配属させると。

だが彼女は戦技教導隊への配属を拒否した。他人に教えられるものではない。不可能だと。

結果として、人事局は彼女を戦技教導隊に配属させるのではなく、

戦技教導隊から彼女の下に研修に出すという本来なら到底あり得ない選択をしたのである。

「見つかつたみたいだな。射程に入つたらすぐ撃つてくるぞ」

ハンナが高速飛行をしながら単眼鏡を覗き、敵魔導師に捕捉されたことを告げた。

——また妙な飛び方を覚えたな…

「どうするターニヤ、減速するか？」

常識であれば、このような高速飛行中に射撃を受ければ回避運動は取れない。

エレニウム九五式でもそれは変わらない。

「空力制御を使えば、回避できる…んだつたな」

「少なくとも北方では速度400でもロール回避ができた。ターニヤができるかどうかは分からない」

私もハンナから教わつたため、多少であれば空力制御飛行ができる。

だがまだ実戦で使つたことがない。

「…このままだ」

「分かつた。速度を維持して突っ込む。」

撃ってきた瞬間にそれぞれ左右に回避しあとは各自弾幕を突破。
敵の弾を全部避けるか防殻で防ぎ切り、接近したらその時点で勝ちだ」

照準器越しの敵魔導師は狙われているというのに全く減速せず、
むしろ加速しているように見えていた。

「私の号令で一斉射撃！ 多少の精度は気にせず撃ちまくれ！」

30人の魔導師による全力射撃。普通なら全ては避けられないし避けきれない。
それが今までの常識。

「射程に入って敵が射撃したのを見てから左側にロールすれば弾の方が勝手に避ける、
三回転だ。タイミングを間違えるなよ」

「了解」

ただし、相手が非常識である場合はどうなるか。

「撃てえ！」

「今！」

ハンナは右にロール機動、デグレチャフは左にロールし敵の射撃は地面まですつ飛んでいった。

残念なことに、片方は超技術の塊を装備し、

もう片方は世界大戦で生まれた”非常識そのもの”だった。

「何だ今の機動！」

「怯むな撃て！ 撃ち続けろ！」

空力制御によって生まれた、彼らにとって完全に未知の機動をする敵魔導師。

当然、そんな相手でも攻撃が当たれば落ちる。

しかしただの自動小銃では偏差射撃を補えるような弾幕を形成するには不十分。敵魔導師が射程の半分に到達する頃には殆どの大隊員の弾倉が空になっていた。

「どうした！ 撃て！」

大隊長はそれを理解できない。非常識を前に全ての状況が理解できない。

「逃げろ！」

誰かがそう言った。あれには勝てないと悟ったのかもしれない。

その一言の直後、大隊長以外の全員が総崩れになって後退し始めた。

「逃げ出したか。あとは鴨を撃つより簡単だ。掃討するぞ」

大隊全滅。それが分かったのは尋常ではない魔術攻撃によって気化爆弾のような爆炎が発生し、

それに対し他の魔導大隊から偵察班を派遣されて、報告する間もなく瞬殺された頃。

更に右側面に配置されていたはずの騎兵師団からの連絡が途絶。軍団側面が敵魔導師に制圧されたため共和国軍は作戦を中止。

帝国は低地地方の支配を確固たるものとした。

後日、帝国軍の公式記録には次のように記録された。

西方方面軍司令部直轄機動打撃群

第七強襲戦闘団戦闘記録

8月9日 第205中隊

ターニャ・デグレチャフ 確定28 未確認0

ハンナ・ルーデル 確定6 未確認2

用語解説：宝珠補助具

アニメ版にのみ登場しているアレ。原作と漫画には無かった奴。

特に共和国のものは「おまる」にも見えるが

それが分かるのはおそらくターニャだけ。

各国の戦い方を反映しており、内容はほぼ本文の通り。

特に「おまる」型は近接制空戦になったらほぼほぼ間違いなく最弱。

X X X X X X X X X X X X X X X X

用語解説：MAS-22

アニメ版で使ってたのもやっぱMAS臭いので勝手に命名。
イメージ的にはMAS-40に近いかも。

7：ラインラントへ

ラインラント

ライン川がフランスⅡドイツ国境となつてゐるエルザスⅡロートリンゲン地方、フランス語で言う所のアルザスⅡロレーヌ地方より北方下流。

国境からライン川までの地域をそう呼ぶ。

この地域は所謂「ルール工業地帯」を含んでおり、ドイツの工業において中心的な役割を果たす。

その辺りは、「ドイツであろうと」帝国”であろうと変わらないらしい。

共和国は騎兵主体の機動戦による低地地方奪還に失敗した後、

歩兵を主体にした火力戦に移行、その攻勢正面をこのラインラント方面に定めた。

エルザスⅡロートリンゲンは国境がライン川そのものであるが

防衛陣地を構築してゐる帝国陸軍の前での渡河を強いられるためにここからの攻勢は不可能に近い。

低地地方はブリュッセルやアントワープ、私の知る所の“ベルギー”に相当する地域

までの侵攻は難しくないが、

そこから先は湿地が多く道路や鉄道整備が進んでおらず、川幅もかなりあるためライン川を渡るのは困難。

となると、残る選択肢はラインラント方面からの攻勢である。

しかし帝国は共和国よりも早期に動員を完了、防衛陣地を構築して待ち構えていた。そこに共和国が攻勢を仕掛け、多大な損害を蒙りながらも少しずつ確実に帝国に食い込んでいった。

双方が攻勢を諦めているエルザス・ロートリンゲンや、

帝国本土方面への突破が困難ゆえにまともに戦闘が起きない低地地方と異なり、

ラインラント戦線は文字通りの地獄、私と奴がよく知る地獄の塹壕戦そのものと化していた。

我々第七戦闘団が低地から引き抜かれてラインラント戦線に配置されたのもラインラント地域の戦力増強が目的であることに他ならない。

9月半ば 夕刻

影、
眼下に広がるのは度重なる砲撃により茶色になった大地、その中をうごめく無数の

遠くには複雑に張り巡らされた塹壕、飛び交う曳光弾と発砲炎、着弾の閃光。
いつか映像で見た一次大戦の景色によく似ている。

違うのはそれを上から見下ろし、我々はただの小銃を手に持って戦闘へりまがいのことをしていること、

そして適切に運用すれば塹壕など突破できるはずの戦車たちの残骸。

共和国軍の戦車はどことなくルノーB1bisに似ている。大規模塹壕戦の経験など無いはずだが、

あの手の戦車を作れる理由が未だによくわからない。

「規程射数終了」

「射撃効力を確認。継続せよ」

「了解」

現在、我々第205中隊第三小隊に与えられた任務は敵歩兵部隊の塹壕突破を阻止すること。

制空戦闘に不安が残る新兵を三人も引き連れていてはこんな撃ちレベルの任務し

か回ってこない。

もつとも、そんな配慮をしてくれるということは帝国軍全体はともかく、我々の地域では余裕があるということ。

本来なら喜ぶべきことなのだが、とある一人はそう思っていないらしい。

「つまらん。敵魔導師も居ない、味方砲兵は魔導師が観測もしていないのに正確に阻止砲撃を撃ち込んで、

機関銃の配置に不備はない、敵戦車は既に鉄クズ。敵は何がやりたいんだ？」

中隊の副隊長殿がぼやく。もはや引き金を引いてすらいない。

ちなみに今日の副隊長の任務は第三小隊が魔導師と交戦した^{しんがり}場合の殿、時間稼ぎ要員だ

：まあ稼ぎ出す時間は10分もあれば十分すぎるのに、無限の時間的猶予をいとも簡単に稼いでしまうのだが。

ハンナにとつてこの手の微妙すぎる対地攻撃任務はもはや作業と変わらず、退屈この上ないらしい。

そのため敵魔導師を捕捉すると真つ先に飛んでいき、30分くらいすると

”つまらん相手だ”などと愚痴りながら帰ってくる。というのがここ二週間くらいのパターンと化している。

そして帰還して撃墜数を報告するのだが大抵1か2くらいで、新兵共はそれを本気で信じているらしい。

まあいくらハンナがエースだとは言え相手は最低でも小隊規模になり、少数落としたら敵が撤退するというのが常識の範囲ではある。

ただし本当に常識が通用するならばの話だ。

実際はどうか？

ハンスⅡウルリッヒ・ルーデルがどういう人物か知っていれば言うまでもあるまい。

「大方、地上部隊と航空部隊の連携がうまく行っていないのだろう」

かつてのフランス軍のようにな。

「この前の低地地方への機動戦は見事なものだったが、同じ国の軍とは到底思えんな」ハンナは向こう側の塹壕を憐れむような目で見下ろしながら言う。

あの作戦を実施した将校は陸軍だけでなく空軍にも顔が利く人物だったのだろうか。今のところ、あれにド・ルーゴが関わっていたという情報はないが

関わっていないという情報もない。

このように時間を持って余し愚痴をこぼす暇があるのは我々第205中隊が属する第

七戦闘団ぐらいのもの。

基本的に、戦線の数からして魔導師の数が絶対的に足りていないうえ、

共和国の演算宝珠はその特性から訓練が容易ということもあり、数的には優位にある。

当然このラインラントでも帝国は数的な劣位に甘んじる他無い。

確かに、帝国の魔導師の練度というのは共和国よりは高い。

だが絶対数の不足を補える状態ではなく、殆どの戦闘団に幼年学校卒の新兵が次々送り込まれてきている。

しかし我々第七戦闘団は北方で多大な戦果を上げ、その戦果に対し損害の非常に少なく、全体的な練度も高い。

何せ他の戦闘団では最低でも2割が幼年学校卒の新兵という状況の中においても

第七戦闘団の新兵は私が抱える205の第三小隊の3人だけなのだ。

同じ戦闘団に属する第201から209中隊は周囲の戦闘団への増援に回されることも多く、

最早ラインラント戦線を支えているのは第七戦闘団と言っても過言ではない。

「うおっー！」

至近で炸裂音。

クルスト伍長に野砲の砲弾が直撃したらしい。砲兵による対空射撃。榴弾だったからか防げてはいるようだが：

「くそつ、あの野砲を潰さないとまともに対地攻撃なんてできん！ 攻撃する、付いてこいハラルド！」

「了解！」

クスルト伍長とハラルド伍長は敵砲兵陣地の方に向かって飛んでいく。

「両伍長、命令違反だ。我々の任務は敵の突破攻撃を阻止することで野砲攻撃ではない」

「砲兵射撃も立派な突破攻撃です！」

「命令違反だ！ 戻ってこい！」

低地の頃から幾分熱意と憎悪が先行しているフシはあつたが、これは駄目だ。

「ダメな犬だ、命令の一つも聞けんとは」

ハンナも同じことを考えていたらしい

——むかし、最高指揮官の命令を拒否していたのは誰だったかなあ？

「ヴィーシャはああいう真似はしないでくれよ？ 多分早死にする」

「は、はいっ！」

第三小隊のもう一人の新兵、

ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブリャコフ伍長はハンナの緊張感のない一

言に真面目に答える。

その少女は国家的指導者と対面し、その際に言い渡された命令に対して正面からNOを突きつけた経験を持つ

ということとは言うべきではないだろうし、そもそも言ったとしても意味不明である。ただまあ、結局総統は命令を撤回したから命令違反ではないのか

「ハラルド伍長、クルスト伍長は強制送還とする」

「納得いきません！ ルーデル中尉だって中隊長の命令に反することが多々あるではないですか！」

あー、やっぱりアレが原因の一部だったか。

だがアイツの場合は命令に完全に従わせるよりも、ある程度自由に飛ばせたほうがよっぽど役に立つ。

それはシユワルコフ大尉も承知している。

「あれは中隊長が認めた範囲での行動だ。そういう立場になりたければ一度後方で頭を冷やしてくるんだな」

「ですが！」

まだ言うかこの駄犬は。抗命で強制送還だけで済むだけマシだというのに、銃殺されたいのか？

だったら…

「だつたらしばらくルーデル中尉に随伴して飛んで、生き残つたらこの処分を撤回してやろう」

「本当ですか!？」

まあ、仮に死ななくとも、ある程度反省するだろう。

「お前たちがアレの本気について行けるならな」

「ただいまー、あいつら屠ってきたよー」

哨戒とか言つて単独出撃していた少女精神化したハンナが戻ってきた。

他の言動に似つかわしくない物騒な言葉が含まれるが。

「んー？ どうしたの姉様」

あーもうスイッチのオンオフが激しすぎて調子が狂うぞこの爺様。

「いや何、こいつらに処分を言い渡していたところだ」

「そうかー」

頭止めてるな、これは。寝ぼけてるといった感じだ。

とりあえず、処分の内容を話すか。

「ルーデル中尉」

「んー？」

「次の出撃、この2人を引き連れて飛んでくれ。遠慮はしなくていい」

「いいよー、遠慮はいらないんだね？」

「そうだ、”遠慮は要らない”」

「じゃあ今すぐ出ようかー、二人共ついてきて」

「はい！」

帰還してすぐ出撃。これぞルーデル。因みにいつも通り無断出撃。

処分対象の2人は勇んで中隊本部テントを出ていった

まあ今回に関しては事後ではあるが中隊長に話をつけておこう。

そもそも無断出撃に関しても中隊長が明らかに黙認しているから報告する意味もないとは思わうが。

僅かながら明かりが見え、目を凝らせば少数の歩兵が寝ずに警戒しているのが見える。

昼間なら聞こえないような遠くから砲撃の音が夜も途絶えずに聞こえ、

視力が良い者なら曳光弾や砲撃の閃光を見ることができるといえる。

それがラインラントという戦場の眠れない、眠らない夜である。

魔導師も砲兵も、歩兵も安心して寝ることは平等に許されない。

夜間戦闘は砲兵による嫌がらせのような散発的な砲撃、

魔導師による対砲列射撃、その迎撃戦闘、歩兵による夜襲などに分けられる。

魔導師と言えど夜間は余り見えないので対地攻撃の効果も、迎撃の効果も限定的だが。

「ようこそ夜間飛行へ。新兵共」

ハンナは空に戻るとスイッチを切り替えた。

「本日の再研修は砲列射撃だ。好きに撃ってこい」

「了解！」

威勢のいい返事を聞いて、新兵2人が飛んでいった後に続けた。

「ただし、反撃には十分注意しろよ……」

8 : ラインラントの魔女

結論から述べよう。ルーデルと共に帰還したクルスト・ハラルド両伍長は後方への配置転換を受領した。

あの2時間後、顔面蒼白になった二人を連れてルーデルが戻ってきてからすぐのことだった。

「いったい何をしたんだ」

「単に中隊規模の敵と戦わせたただけだ。それ以上のことはしてない」

そういえば奴ら、まだ対魔導師戦闘の経験はなかったか。

初戦だというのに中隊規模、12人から16人程の敵を2人で相手にしたのだ。普通なら死んで当然だが

死ななかつたのはハンナが何かしたからだろうか：

「もう遅い。今日は寝る」

ハンナは詳しいことは何も言わず寢床に向かっていった。

11月9日 0700

205中隊本部テント

「中隊諸君。任務だ。」

戦線中央地域で砲撃観測をしていた友軍魔導師が敵魔導師部隊に捕捉され、友軍の塹壕に釘付けにされている。

「これを救出、可能であれば制空戦闘を実施する」

「観測手狩りですか」

「ルーデル中尉とデグレチャフ少尉は北方で経験済みだったな」

「ええ、一人だったら死んでました」

「共和国の雑魚共ならともかく、私もあまり一人で協商連合の一個中隊を相手にする気にはなりません」

「我々が苦戦している相手を雑魚とは、酷い評価だな」

「北方と比べると数だけやたら多い割に歯ごたえが無さ過ぎます。接近して荒らし回るだけですぐ壊滅して逃走を始める。これを雑魚と呼ばずして何と呼べば？」

相変わらずのルーデル。どうも楽しめない敵ばかりでご立腹のようだ。

「我が軍のすべてが君のように戦えれば我々もこういう任務をせずに済むのだがね……」

「それだと帝国が慢性的な牛乳不足になってむしろ戦えなくなるのでは？」

隊の誰かがそう言った。

隊長を含めた全員の笑い声が本部テントから聞こえてくる。

基本的に”地獄”と形容されるライン戦線でそんなことが起こる部隊がどれだけあるだろうか。

第七戦闘団以外ではほぼありえないだろう。

数に押し切られて全滅した中隊もそれなりにあると聞いている。

作戦説明中に冗談が言えるこの部隊を良いか悪いかで語ることはできないが、少なくとも全員に余裕があるということ。

結果と戦果も考えればまあ悪いことではないと断言できる。

「確かに牛乳の欠乏は深刻だな。さて、本題に戻るが……」

「何か質問は」

「我が小隊は現在2名です。セレブリヤコーフ伍長の技量と疲労を考えますと作戦遂行は難しく、セレブリヤコーフ伍長を外してルーデル小隊に合流するべきだと考えます」

流石に新兵を引き連れて制空戦闘に出るといっなのはあまりよろしくない。

第一ハンナが居るなら、伍長は足手まといだ。

速度差がありすぎて色んな所に支障をきたす。

「はつきり言つて今回の任務においては邪魔です」

…いやまあ、制空戦闘能力だけ見れば本来あれ一人でも十分だが。

「救援に出た挙句、部下も救助対象も死なせるわけにはいきません」

「中隊としては構わないが、伍長の意見も聞かねばな」

「私は…私は任務に志願します！」

「やめろセレブリャコーフ伍長、今回は仮に撃墜されたとして貴官を拾える余裕があるか分からない」

「私とて帝国軍人です！ 小官は任に耐えうると確信します！ 中隊長！」

「だそうだ、少尉」

中隊長は本人の意見を尊重しろとでも言いたいのだろうか。

だがお断りだ。無駄なリスクを増やすべきではない。

「あんな伍長」

「いいじゃないかターニヤ、本人がこう言っているわけだし、たかが共和国軍相手だぞ？」

ハンナまで同調する。対共和国制空戦闘をピクニックか何かと同程度にしか思つてなさそうに言う。

奴の感覚では、吹けば飛ぶ共和国軍を殲滅するのは雀や鳩を蹴散らすのと何も変わらないのだろう。

…というか出撃は食事や歯磨きなどと並ぶ日常生活の一部と捉えているに違いない。前世からそうだ。

食事の回数より出撃回数のほうが多い、それがルーデルの日常だったわけで、今もそんな生活をしている。

だがそれを新兵にも適用できるわけではないことは本人もよく分かっている。

加えて部下の面倒見が良いのも前世からであり、

ハンス・シユウイルブラッドなど、対地攻撃エースを配属直後から育て上げた実績から考えるに…

「ただしヴィーシャ。付いてくるのはいいが、くれぐれも同輩の2人と同じような真似はしないようにな」

「はいっ！」

そのルーデルが認めたのだ。ある程度は期待できるのかもしれない。

私も認めてやるべきか。

「分かった。だが足手まといと判断したら容赦なく置いていく。そこは覚悟しておけ」

若しくは…まさか伍長もアレに感染したか？

『アドラー2からアドラー1、救援対象を見つけたが目の前で撃墜された。塹壕上空に敵魔導師部隊、大隊規模』

『こちらアドラー1了解。ルーデル小隊は一時後退し本隊と合流せよ』

『Nein^{ナイン}。既に敵大隊の射程圏に近い。追撃されたら足の遅いうちの伍長がやられる』

『…後退に関してはそちらの判断に一任する。幸運を祈る』

『あの程度気にもすることでもないだろう。アドラー2アウト』

『ということでも小隊諸君。あの敵部隊を潰すぞ』

『隊長、相手は大隊規模ですよね…？』

『そうだ。30名ほどの部隊だな』

『いくら中尉でも大隊規模を相手にするのは無茶です！』

私を切り捨てて退避してください！ 覚悟はできています！』

『断る。私が高速で近接していつも通りかき乱す。後はヴィーシャと2人で適当に攻撃』

してくれ」

「いつものだな」

「あ、あのっ隊長！」

ハナナは返事もせず上昇しながら加速していった。

ここ最近では低空ではなく高高度がお気に入りようだ。

「隊長！ ルーデル中尉！」

この場合、軍人としては新兵を切り捨ててでも増援と合流して叩くのが正しい判断だろうし、

セレブリャコーフ伍長もそれを分かっているってこんなことを言い出したのだろう。

…例外だらけの小隊でそれが正しいとは限らないが。

「少尉！ 今からでもルーデル中尉に私を見捨てるように進言していただけませんか
！」

しかし伍長はどうしてここまで必死になっているんだ？

…ああ、そういえば。

「確か、貴官はルーデル中尉の制空戦闘を見たことがなかったな」

「えっ、はい」

「なら、奴…ルーデル中尉と飛ぶときだけは常識的な判断は意味がないということを知

解しろ」

「それは…」

「見てれば嫌でもわかる。空飛ぶ非常識を目の当たりにしてから考えても遅くはないぞ」

「空飛ぶ非常識…ですか？」

「ああ。わが帝国、いや世界最高の非常識的魔導師だ。」

「この世に生まれてきたこと自体、神にとつてすら大誤算だろう」

「前世でも非常識だったが二周目ともなると磨きがかかってくる。」

「あつちでも大戦初期は割と普通だ。二周目は最初から非常識。戦争が終わるまでにどこまで行くのやら。」

” 運の悪い奴らだ ”

「推測するに観測手の救援に来たのであろう定数の4人に満たない3人編成の小隊が見えたときは、

そう思った。」

「眼下の塹壕から出てきた敵魔導師は大隊によつていともたやすく撃墜。」

「そんな所にひよっこり現れた小隊に憐れみすら感じた。」

奴らが救援する対象はもはや存在しない。この距離なら追撃して一個小隊をつぶすことなど容易い。

運が悪いことに、その小隊は大隊にスコアを献上に来たに等しかった。

しかし、三人のうち隊長と思いき一人が突然急加速しとんでもない上昇率で昇っていく。

その瞬間大隊長は気づいた。奴は“魔女”だと。

そして大隊はそれを見ただけで逃げ出すしかなかった。

『見たら死ぬ』

それがラインラントの魔女なのだ。

同日 1607 パリ

共和国国防省某室

「我軍の制空戦闘は全戦線において概ね、一部戦線を除き優勢を保っております。

キルレシオにおいては若干劣るものがありますが、帝国は二正面で戦争中、

更には他の国境に配置する戦力を差し引きますと、数の優位は当面揺るぎないものかと思われます」

「で、その“一部戦線”というのはどこだね」

「…ラインラント中央部の戦線です」

「またか！」

共和国は悩みを抱えていた。

それは突破するべきラインラント戦線の制空権が全く確保できないどころか配置する度に

突然部隊ごと消滅することだ。

「私はここ2ヶ月、ラインラント中央戦線においてろくでもない報告しか聞いてないが、いい加減なぜそのようなことになっている理由くらいは分かったのかね」

「今朝ようやく情報が入りまして、該当地域に展開している敵魔導師部隊、『第七強襲戦闘団』が原因である可能性が高いとの報告が」

「その部隊の詳細は？」

「情報局が収集した資料によると、北方戦線から転線してきた部隊のようで…」

「——確か協商連合魔導師の損耗率が極端に高い地域があったな」

「その地域に配置されていたのも第七強襲戦闘団だったようでして、

例のネームド、“魔女”、その姉の方だけです、それと思わしき魔導師との交戦も少ないですが記録されていました」

ネームド“ラインラントの魔女”

該当者は二人、黒髪の少女と金髪の少女。

外見から推測される年齢は二人とも”幼い”という表現ができるほど。

2人で行動しているという報告が多く、場所によつては単に”姉妹”とも呼ばれる。

詳細は不明のため共和国軍内では黒髪のほうを姉、金髪のほうを妹と便宜上呼称している。

「北方での魔女被害の詳細は分かるかね」

「それが目撃報告自体はかなり少ないのです。開戦初日に2個中隊が壊滅した際に当該部隊の大隊長が目撃しているくらいで、それ以外は殆ど部隊自体が推測全滅の記録が残っているばかりです」

この姉妹が共和国によつて初めて確認されたのは低地地方での制空戦。

最初の接敵報告からもものの10分で大隊は偵察に出ていた数名を残し全滅。

このときの報告では4核連結型の高性能新型宝珠を使用していると推測されており、速度400で大隊に接近し近接戦闘を強いて組織的戦闘能力を一瞬で奪い、

最後は撤退しつつある大隊を広域照射魔術により大隊ごと消し飛ばされた。

「第七戦闘団に対して損害を与えられたと推測できる撃墜レポートに関して我が軍も含めて全く存在しません。」

おそらくは、魔女の姉妹だけでなく戦闘団全体の練度がかかなり高いものと推測されま

す」

9月も半ばに入るとラインラントに現れ、

ラインラントでの最初の出現から三か月と経っていないのに、特に姉単独での損害報告が相次いでおり、

場合によつては報告すらままならず未帰還になる中隊や大隊が相次いだ。

妹はあまり目撃されていないが、恐らくは未帰還部隊と交戦したものと思われる。

姉一人ですら大損害を被るのだ。そんな敵が二人もいたとすると全滅は当然の結果である。

特に姉は早朝から深夜に至るまで、ラインラントの全域、広い範囲に現れるため

概ね制空戦闘では優勢である共和国軍魔導士の間でも、

突然現れ部隊を全滅させていく魔女の噂は瞬く間に広がり士気を落とす一因となっている。

「ラインラント中央戦線は士気低下が著しい。歩兵部隊どころか魔導師部隊からすら敵前逃亡や脱走が相次いでいる」

「実際、先週は334大隊の全員が中央戦線への配属を拒否して拘束されたそうじゃないか」

「それは初耳だな」

魔女の攻撃による推測損害は2ヶ月強で魔導師530騎以上、野砲1200門以上。歩兵に関してはもはや数えることすらできない。

ラインラント中央戦線は”戦場”ではなく”墓場”だという噂が軍全体に流れ、

実際に墓標のない共和国軍兵士と魔導師の死体ばかりが転がっている有様だった。

「ラインラント中央戦線の突破が実質不可能になった以上、アルザスの方に集中したほうが良さそうだが」

「それはまずい。ただでさえ損耗が激しくて縦深と予備戦力が乏しい。ラインラントから引いたらいともたやすく突破される」

「しかしこのままラインラントに集中していても損耗が増えるばかりで突破は見込めない」

「仮に第七戦闘団が脅威なのだとして、奴ら魔導師の配置転換はすぐにはできない」

攻勢正面の変更を察知されたら対応されるどころか先回りされてしまうだろう」

「打つ手なし……か」

「クソツ、機動軍団が残っていればまだ手は打てたというのに……」

会議は何も生み出せず、タバコの消費量だけが増えていく。

ハンス・シュウイルブラッド (Hans Schwirblat)

「ルーデルの影」とも言われた対地攻撃のエース。

最終階級は中尉。出撃回数831回。

1943年10月にルーデルの部隊に配属され、2番機を務めることが多かった。

1944年5月、ルーマニアにて敵航空機に撃墜された際に左足と手の指を7本失うも

8ヶ月後、義足で部隊に復帰。ルーデルのそういう部分は伝染するのも知れない。

”最後の飛行”においても2番機だった。

ちなみに酒もタバコもしない。ルーデル同様牛乳飲みだったらしい？

ヘルムート・フィツケル (Helmut Fickel)

ルーデルの副官。最終階級は中尉。出撃回数800回以上。

シュウイルブラッドと同じくルーデルの2番機を務めることも多かった。

3回撃墜されたもののシュウイルブラッドやルーデルと違い負傷はしていない。

大戦末期には第2地上攻撃航空団第I I I飛行大隊第9中隊 (9. / I I I. / S G 2) の隊長、中隊指揮官に任命された。

なぜ2番機が2人いるのか。

それはルーデルに鍛えられた彼らでもルーデルの出撃回数には付き合いきれなかつ

たからかもしれない。

なんせ彼らがルーデルの2番機を務めていたあいだ、ルーデルは“公式記録で”1500回以上の出撃をしているからである。

ルーデルの記録を漁ると一日に14回出撃などという記録が平然と出てくる。つまりそういうことである。

番外1：ネームド候補”魔女の影”

幼年学校の卒業を控え、配属する部隊の上官は「銀翼突撃章持ちのベテラン」と聞いていた。

それは事実だった。この戦争が始まる瞬間に立ち会い、戦果を上げたのだという。

その上官は女性だった。確かに軍では珍しいが居ないわけではない。

それでも、まさか幼年学校の入学年齢にすら達していないような少女がその上官だとは思わなかった。

だがその年齢を感じさせる要素は容姿以外には何もない。

言葉遣い、知識、身のこなし、その他の全てが少女のそれとは違う。

私が配属された中隊にはもう一人、女性士官が居る。

ハンナ・ルーデル中尉。彼女もまた、デグレチャフ少尉と同様、幼年学校にすら入れない年齢を思わせる容姿。

そしてデグレチャフ少尉と違い、中身も少女のそれだった。

「ヴィクトーリア・イヴァーノヴナ・セレブリヤコフ伍長、F大隊出身です！」

「びくとーり…えーと、長くて呼びにくいね。何かあだ名を考えよ。何か無い？」

「ゆ、親しい友人からはヴィーシャと…」

「ヴィーシャ、うん。よろしくね、ヴィーシャ！」

満面の笑みを浮かべて話すハンナ・ルーデル中尉。

なぜこんな女の子が戦争の最前線に居るのか。デグレチャフ少尉は見た目と中身が不一致なだけ。

だけどルーデル中尉は容姿なりの話し方をする。

それでいてデグレチャフ少尉よりも階級が上。最初は訳が分からなかったが、初めて一緒に出撃時に分かった。

「新兵達は戦場の空を飛ぶのは初めてだろうが、まあ敵の魔導師にさえ出会わなければ中々死ぬことはないから安心して飛べ。」

まあ仮に魔導師と接敵しても我々にかかれば蹴散らすのは容易い」

初めて無線越しに聞いたルーデル中尉の声は口調、語彙、声色さえも違う。

誰が話しているのか、すぐには気づけなかった。

デグレチャフ少尉が”機械のように精密な軍人になってしまった少女”だとすれば

” 熟練の航空魔導師と普通の少女が一つの体と知恵を共有している多重人格者”
それがルーデル中尉だった。

まるで少女の体に何者かが憑依しているかのよう。

そして今、自分の目の前の光景によって更に評価を変える事になる。

以前から同じ宝珠を装備しているとは思えない高速で飛び回る事は知っていたし、その速度であれば50騎撃墜も納得。

目の前で起きているのは「魔導大隊に対して一人で突入する」という完全に自殺行為
と思えない光景。

本当に自殺行為であればデグレチャフ少尉が止めに入るはずなのに：

ルーデル中尉が上昇し始めると、敵の大隊が逃走を始めた。

『高度8000、いい景色だ』

『奴らこつちを全く見てない。初撃はこちらから撃つ。』

『了解。ヴィーシャー！聞いてるか！』

目の前の現実を受け入れられず呆然とした中で自分の名前を呼ばれ、反応が遅れてしまっ
まった

『は、はいっ！』

『これがこれからの時代の制空戦だ。よく見ておけ』

『語弊があるな、敵が逃げるのは制空戦じゃなくてただの狩猟だろう』

『それもそうか』

今までの自分の常識が目の中の非現実の前に覆されていく。

魔導大隊がただでさえ一人欠けた小隊を目前に逃走。全く理解できなかつた。

数分で敵大隊が消えて、ルーデル中尉が戻ってきた。

「ルーデル中尉、あの飛び方は一体……」

「あれはまあ慣れだ慣れ。一応ヴィーシャにも教えてみようか」

9：軍大学へ

「何？ラインラントで共和国軍魔導師部隊が激滅？」

ゼートウーア准将は2つの書類に目を通していた。一つは参謀本部で作成されたものの。

もう一つは添付されたもので、諜報部から参謀本部宛に提出されたものの写し。

「諜報と状況からの推測なのですが、実際に11月以降、極端に交戦報告が減っています。」

今となつてはここ一週間、僅か2件です」

「敵のほうが数では勝っていると思つていたのでが」

「共和国軍魔導師全体に”ある噂”が広まってまして、それが原因のようです」

「噂？」

「”魔女”と呼ばれる我が帝国軍のネームドによつて、ラインラント戦線では魔導師部隊が投入するたび壊滅させられる。といったものです。諜報員と現地協力者による差はほとんど無く、一致しています」

「確かにラインラント戦線には我軍屈指の戦果を出している第七戦闘団が配置されてい

るが、であれば敵もそのような高練度部隊を送り込んで拮抗状態になるというのが普通だろう」

「それが”魔女”というのが個人のネームドで”金髪と黒髪の二人の少女”らしいのです。

二人組なので”魔女の姉妹”と呼ばれているとか」

「少女…か」

「准将もご存知かと思いますが、ハンナ・ルーデル中尉とターニャ・デグレチャフ少尉の2名が”魔女”で間違いないかと」

「2人は我が軍の中でもその容姿と能力から目立つ。第七戦闘団に配属されているのだったな

北方戦線で2個中隊を撃滅したことを考えれば彼女らが魔女と呼ばれるのは無理もない」

「ですが不可解な点がいくつかあります」

「いくら第七戦闘団に2人の銀翼が居たとしても流石に戦線に穴を開けるのはおかしいな」

「いえ、それもそうなのですが…」

「それ以外に何かあるのか」

「共和国軍の”噂”と我軍の撃墜報告数に大きな開きがありました」

「撃墜数は多少多めに報告されるものだ、実際に損失して正確に数えられる被撃墜報告との差もあるだろう」

「我々もそのように考えたのですが、報告の数よりも噂での撃墜数のほうが多いなど、説明の付かない部分が多いので一応報告を」

「…分かった。その詳細も聞いておこう」

「一部の諜報員の報告には魔女の撃墜数に言及したものも含まれておりまして

それによれば2人の魔女によるものだけで開戦以来、実に700以上の魔導師が戦死しているとの事で」

「700か…確か最近の記録では2人合わせても200には届かなかったな」

「先週宣伝省が戦意高揚のためにエースの撃墜数リストを要求してきましたが、そんなに多くはなかったですね」

そして、その撃墜数リストのトップ2が、ハンナとターニヤ、魔女と目される2人であった

「その資料を転用しますと、先月時点でデグレチャフ少尉が107、ルーデル中尉が87になっています」

「ただ単に”尾鰭がついた”という説明もできるが、事実としてラインラントに魔導師

部隊が出ていないというのが気になるな」

「今の所我々にとつて何か問題があるという訳ではありませんが、敵の情報工作の一環である可能性もあります」

「穴を作つておいてそこに誘い込んで半包围……しかしこのように敵に感づかれ、味方の士気を下げようとするのを流すとも思えん」

「第七戦闘団への問い合わせはしたのかね」

「無論です。しかし撃墜数に間違いはないとの回答が……」

「……まあ別に調査の必要はないだろう 第七戦闘団が多大な戦果を上げているのは間違いない」

我々は、この戦争に勝てるだろうか

いや、正確には「私はこの戦争を生き延びることが出来るだろうか」

生き延びること自体はそこまで難しくくない、少なくともアレと空を飛んでいる限りは。

奴こそ、どんな状況でも生き延びて敵に最大限の損害を与えることに人類で最も長けた人間である事には確信が持てる。

しかし、仮に“戦争”を生き延びたとしても仮に東側で捕虜になれば良くて収容所送

り、

悪けりや収容所にすら送られずに処刑。収容所から生きて帰ってこれる確率はかなり低い。

：いやまあ誰かが昔やったように東部戦線から離脱して西側に降伏すれば良いのだろうか。

ありがたいことにこの年齢と容姿を最大限活用すれば悪い扱いはされない可能性もある。

プライド？そんなもの生存のためには犬にでも食わせてやる

：いやそもそも戦争に負けることを前提にしてどうする。今は勝てる見込みがあるかどうかを考えなくては。

共和国は？すでに消耗している。あれに負けることなど考慮する価値もない。

協商連合も同様。

では連合王国の参戦は？

恐らくある。今の状況で帝国の拡大を許してしまえば完全に手を付けられなくなる。

仮に後々、他国と協同して帝国に圧力をかけるくらいなら今のうちにやっておいたほうがまし、

どっちにしろ、共和国が降伏したら連合王国単独での参戦は不可能。

仮に参戦しても大陸上陸はかなり難しいので考える価値なし。
合州国はともかく、連邦と手を組むなんてことはないだろう。

つまり共和国が降伏した場合参戦するとすれば残る可能性は合州国との同時宣戦のみ。

但し合州国はこっちでも例によって例のごとく世論がモンロー主義に染まっているらしく、

帝国側が何かへまをしなければあの新大陸の巨人を動かすことは難しいだろう。

可能性は低いが当然連邦やパスタの奴と手を組むということもないと断言出来るほど仲が悪いわけではない。

軍大学の入学審査は最後に一部から異論が出たため残った2人の候補の再審議を、
特例として匿名指定を解除して行っている最中だった。

「ターニャ・デグレチャフ少尉とハンナ・ルーデル中尉か……」

「彼女らはいくらなんでも若すぎる。そもそも軍に居る事自体、対内的にも対外的にも良くないのに、

その上帝都の軍大学に入ってしまったえば国民から年齢に見境なく徴兵しているとの批

判は避けられない」

「概ね事実だろう。その批判は人事局に向けるんだな」

「彼女らは幼年学校の入学年齢にすら達していない！彼女らの存在は誤解を招く。宣伝省は断固反対させてもらう」

戦争が始まって以来、軍にとって宣伝省は重要な位置を占めるようになったため

軍の関係組織としてこのような場所にも出てくるようになった。

宣伝省の心配は至って当然のもので、ただでさえ魔導師の適性がある子供は初等教育が終わり次第、

事実上の徴募として幼年学校に入ることになり、卒業したら即配属という流れになっている。

共和国のように短期間で養成できるものではないし、需要に対して絶対数の少ない魔導師候補は

一人あたりの質と生存性を高めた状態のほうがより効率的に活用出来て都合が良い。以上のような経緯からこのような体制に至った。

本来18歳以上の健康な男子が徴兵の対象になり、2年の兵役に就くのだが、

魔導師に限っては15歳以上で魔導適性のある男女の全てが対象となり、

2年間の軍事教育と6年間の兵役、更には45歳まで予備役として年に数日訓練を受

ける義務が生じる。

給与体系が通常の徴兵とは比較にならないほど高いため男子には比較的人気であるが

女子は大抵後方任務になるとは言え反発も強く、それを抑えるために多額の費用を投じていた。

さらに言えば、開戦すれば後方任務などと言われず酷使されるのは目に見えていたのだ。

国家に広まった不満と反感は国家総力戦の遂行にすら支障をきたしかねないと考えた宣伝省は

北方にて銀翼突撃章、西部戦線ではトツプエースとなった2人の若い女性士官の話を聞きつけ、

彼女らをプロパガンダに利用し英雄に祭り上げるべくルーデルとデグレチャフについて資料を請求したものの、

実際には幼年学校の年齢制限を下回る二人の少女であることが判明すると、

その低すぎる2人の年齢に逆効果を恐れて今のような後方に戻すことに消極的な立場を取るようになる。

実はデグレチャフら2人には軍法務局からの通達で労働に関する法的問題を指摘さ

れたため、

戦闘時以外の常時に退官する権利があることにはなっている。

但し士官学校卒業後本人達へ通達されるはずが、開戦の混乱と特にルーデルを手放したくない人事局に握り潰された。

「人事局としてはハンナ・ルーデル中尉を前線から離れさせ、戦技指導教官に着任させるまたとない機会と考えている。彼女の空戦技術は一度見ておいたほうがいい。考えが変わるだろう」

「ルーデル中尉のもとに教導隊から研修派遣するという話はどうなった」

「パイロット訓練中に2名とも墜落死。単なる事故だが、航空魔導師に航空機操縦を習得させるのは感覚が違いすぎて難しい」

「だったらなおのこと断念するべきだ」

「彼女の部下の一名が例の飛行術を部分的にだが習得しているのを確認した。やり方が他にない訳じゃない」

「……えー、デグレチャフ少尉についても推薦状、素行、愛国心、機密保持の能力などに問題は見られません。模範的な士官と言えます」

両2名は士官学校でも非常に優秀な成績を残しています。体格のこともあり近接格闘の評価が芳しくありませんが、デグレチャフ少尉は座学において、ルーデル中尉は野

戦演習において突出しています」

「更にルーデル中尉は113、デグレチャフ少尉は84の撃墜スコアで帝国軍でトップ10に入ります。」

特にルーデル中尉は本人の申告で共同撃墜や未確認を報告していないとの記載があります。

彼女がどれだけ戦技教導隊に必要な人物かはご理解していただけるかと」

「政治的な問題はあるが、手続き上の問題はない、

資料を見る限り、部隊の推薦、身辺調査、軍功は優れている。

これで君が先日まで居た人事局に反発してまで再審議請求をするほどの理由があるのかね。レルゲン中佐」

「まずルーデル中尉ですが、能力は確かなものがあります。しかし先程の言及のなかった部分で士官学校等においての調査で”年齢相応の子供のようではあったが、学業、任務などにおいては別人のように変貌、まるで熟練の航空士官のようである”といった趣旨の評価が多数見られます。」

通常通りの解釈で行けば多重人格者と考え、精神疾患として3次審査すら選考の対象にならないのが通常では？」

「それは我々も考慮したが、人事局が全ての責任を取ると言って聞かないのだよ」

「人事局は彼女の任務に対する精密さを高く評価している。

任務に支障があったという実績はなく、本人の主張も含めて鑑みるに意図的なものであり精神疾患ではない。

休日には酒を呑んで人格が変貌したら精神疾患などという理屈は存在しない。誰にでも起こることだ」

「虚偽の可能性は？」

「現状を見る限りあらゆる点で支障をきたさない。それが人事局としての判断だ」

「…では、もう一つ。ルーデル中尉の撃墜スコア偽装の疑惑があるのはご存知でしょうか？」

「人事局ではそのような件は把握していない」

「共和国の一般部隊における情報収集記録によれば、ルーデル中尉及びデグレチャフ少尉と思われるネームドが700以上の魔導師を撃墜したという噂が蔓延しているという記述がありますか」

「それには私も目を通した。所詮噂だ。一人頭350だとしてどうやってそんな数を撃墜できるんだ」

「そうです。所詮は噂。しかしながらこの噂は複数の部隊での情報収集を実施しているエージェントがほぼ同一の内容で報告しており、この手の戦場神話特有のばらつきが見

られません。

何より、事実としてルーデル中尉と見られる少女の帝国軍魔導師が1大隊を一人で壊滅させたことを確認していますが

その日のルーデル中尉の報告では2騎の撃墜にとどまっています。いくら未確認の撃墜があるとは言え、30以上の撃墜をわずか2騎と見間違えるでしょうか？」

「そ、そもそも大隊規模の部隊を一人で壊滅させるなど、不可能だ」

「あなた方は知っているはずです。彼女の能力の異常性を。私もあなた方とともに野戦演習を見学しましたから。

出来るからこそ、あなた方はどうやってでもルーデル中尉を戦技教導隊に招きたい。

違いますか？」

「……」

元上司と言い争う自分の部下と人事局のやり取りを眺めていたゼートウアー准将が話が纏まったと悟りようやく口を開いた。

「レルゲン中佐、つまり彼女は嘘をついている。そう言いたいのだね」

「はい。しかしルーデル中尉の目的が分かりません。撃墜数を過小報告する理由が分かり、

それが合理的でない限り、彼女を信用するのは危険であると判断します。デグレチャ

フ少尉に關しても同様です」

「よろしい。過小報告の目的、そもそも事実かどうかを確認せねばなるまい。

しかし再審議期限には間に合わないので再調査はするがこの件は今回審査対象外とする。

調査が完了次第、再度処遇を決める。それで良いかね」

この場ではこれ以上は何も分からない。人事局の意向も理解できるがレルゲン中佐の心配も尤もである。

調査してからでも遅くはないというのがこの場で出た結論だった。

「了解しました。次にデグレチャフ少尉ですが……」

数ヶ月後 帝都ベルリン 軍大学。

前線から離れた帝都で二度目の大学生活。

何故か、そこには奴も居る。

驚くべきことに、奴は前世であれだけ嫌がったのに前線を離れた。あつさりど。

『共和国と協商連合程度なら私抜きでも勝てるだろう。だが合州国と連邦はそうも行か

ない。

「数を潰しただけで勝てる相手じゃない」

その2国に勝つなら、部隊を動かせる地位を確保して未来視点から介入する必要がある。ということだった。

「例の件からするに共和国にはドゴールが転生している可能性がある。あの詰めの甘い機動戦から推測するに脅威度は低いが、それでも万が一は考えなくてはならない」

「全く、こちらにもグデーリアン将軍が居れば良かったのに。大統領閣下が居ればなお良い」

「ヒトラーは今回不要だろう。軍事的には邪魔な気がするが？」

「…大統領閣下を悪く言う気はないが、それに関してだけは同意させてもらおう」

軍大学の図書館。そこで我々二人は「電撃戦」を研究していた。

片や軍事知識が多いだけの元会社員、片や大戦を戦い抜いたとは言え陸軍に関してはあまり知識のない元爆撃機パイロット。

…そういうえば空から味方戦車部隊を指揮して敵戦車大隊を潰した気もするが…

「そう言えば敵の戦車や対戦車戦闘力はどうなってるんだ。情報は得られたか？」

「スオミでの話を聞いたただだが76mm砲を搭載した重戦車が沼にハマって放棄され

まくりらしい」

「KV—1か。予想以上に面倒な流れだな。T—34が前世と同じ仕様と生産量で出てきた日には勝てないぞ」

「魔導師の投射火力をもつてしても？」

「私が前世の10倍、1万両を破壊しても残り3万台。」

それにアメリカの方も同じだけ数を用意してくるだろう。

最悪なのは前世より有能なやつが粛清されてない場合だ。戦車を戦線に出てくる度全滅させていてもまたバグランチオンで押し切られる」

この”電撃戦”かそれに匹敵するドクトリンを考案し可能な限り早い段階で上にねじ込めなければ帝国に勝利はない。というのが我々の共通認識だった

「死に体のフランスと国力に乏しいノルウェーはどうでも良い。

ソヴィエトに対して一度使えれば十分なのだろう？ だったら」

「いやハンナ、皇帝陛下は第三帝国の指導者とは違う。我が帝国は東方に戦争を拡大し先制攻撃を仕掛ける理由がない。ソヴィエトのように縦深を利用して反攻の準備をする時間も不足しすぎていて電撃戦や縦深攻撃自体出来るかどうか」

「ええいクソツタレのアカ共め」

「二人共、面白そうな話をしているな。私にも聞かせてくれんかね」

そんな最中、後ろから声をかけてきた人物。真っ先に階級章に目をやる。

准将であった。

「ゼートウーア閣下！どうしてこちらに？」

「いや何、会議後の気まぐれだね。それに君達が軍大学で何かをしているという噂も聞いた」

「気にかけて頂き光栄の至りであります」

「君達2人はその若さで我軍の撃墜王、それも女性となると、誰でも覚えてるだろう」

「さて、君達2人に聞きたいことは2つだ。

先程の話の内容も気になるが、一応確認しておきたい」

まさか：ハンナと私の隠蔽スコアの事がバレたか…？

「君らを撃墜王たらしめている、撃墜スコアの件だ。何か心当たりはないかね？」

元々スコアを5分の1以下で申告することには流石に無理があるとは思っていたが

虚偽の報告はやはりまずかった。だがここでそれを認めてしまうと私の後方勤務と

出世の道がっ

「スコアの過小報告に関してですか？」

あつさり認めるな私の立場を考えろ！

「そう、それだ。私は別に君達を責めているわけでも、懲罰を与えようとしているわけでもない。

単純に理由が知りたいのだよ。過大報告ならともかく過小報告をする理由が分からなくてね」

「特別休暇を取りたくないだけです」

「休暇を取らない？」

「小官に休暇は不要でありますし、何より祖国が侵されているというのにのんきに休暇など取っていられません」

「なるほど、愛国心故にというわけだな」

「小官の出身は東部のシュレージエンですが、戦争が長期化し疲弊すれば連邦の参戦を招き、結果、故郷がライン戦線と同じ状態になるようなことを許すわけには行きません」

ルーデルの故郷。シュレージエン。

前の世界では大戦後、ポーランドに併合された事からもわかるように帝国でも東部に位置し、

連邦が侵攻してきたならば戦場になるのは目に見えた位置にある。

前世のルーデルが休暇を嫌ったのも、コミーに故郷を荒らされたくないからだと言っていた。

「連邦の参戦を危惧しているのかね？」

「危惧ではなく確信です」

「…分かった。二人共、実際の撃墜数は数えているかね」

「2人合わせて600に少し届かない程度かと」

「よろしい。では今後も3分の1程度の報告で構わない。参謀本部内だけでも実態を把握しておきたい」

「了解しました」

「休暇に関しては…全体の士気に関わるルールだ。今後は書面を用意して”取得”してくれたまえ。それ以外には関知しない」

後々分かるのだが、この”取得”は要するに書面だけでもそういうことにしておいてくれという事らしい。

…私とハンナ、2人揃って”休暇が不要の人”扱いされたのに気づくのはこれからかなり後のことだった。

10：大隊

「スコアの件ともう一つ、君らの意見が聞きたかったのだが、貴官ら2人はこの戦争をどう捉える？」

問われている内容が明確でないので明確にしようとした矢先、ハンナが先に答えた

「大戦に発展しうると考えています」

「大戦…とは？」

「主要列強の大半を巻き込んだ大規模な戦争。世界大戦と呼ぶべきでしょうか」

「…根拠は？」

ハンナは主観が入りすぎてるので割り込んで説明は私が引き継ぐ。

「まず帝国は他の列強に対して国力、軍事力の点で頭一つ抜けて優位に立っています。他の列強に対して1対1であれば勝利できるでしょう」

「うむ、共和国には勝てるだろう」

共通認識があるというのは話がしやすくありがたいことだ。

「しかしながら、この優位は他の列強には脅威であり、共和国を勢力下に入れることを連合王国や連邦が見逃すとは思えません」

「彼らはこの戦争には直接関わっていないはずだが？」

「仮に共和国を帝国が併合、もしくは国力を抽出できる状態にしたとすると、帝国は2つの列強と同時に戦争をして尚、優位に立つことが出来る超大国、いえ”覇権国家”となります。仮に帝国が敗北したとすると、逆もまた然りです」

「なるほど。そのような圧倒的な脅威が目の前で誕生するのを何も言わずに見守る事は出来ない。そういう訳だな」

「はい。これを阻止するためには共和国と帝国が消耗して共倒れになるようにするしかありません」

「具体的には？」

「外交的圧力、レンドリース、義勇軍の派兵等が分かりやすいかと」

「直接参戦の可能性は？」

「帝国が共和国に勝利した、若しくはその可能性が高いとすれば、多少無理にでも参戦すると推測します」

「勝利、敗北、共倒れ。どれを取っても帝国にとって最終的な勝利とは言い難い、と」

「はい」

「では我々はどうすれば良いのか？」

「勝利に対する考え方を変えねばならないでしょう。完全勝利は最終的な敗北に繋がら

かねません」

「勝利を目指さない…と？」

「勝利の定義を変えるべきです。現状のままの“勝利”を目指すのは危険です。

共倒れを防止するという点では帝国の消耗を限界まで抑制し敵に出血を強いて、戦費を回収できる程度の条件での講和が最も益のあるものと考えます」

「どっかの世界線の遊戯では消耗抑制ドクトリンは某仏国の士気の低さを再現するために用意され、

負ける運命が確定した残念国家、実質罰ゲーム用、カエル野郎専用の梅毒ドクトリンなので

あまりおすすめたくない。というかこれ採用したらフォウニーウオーもなく負ける気がする。根拠はない。

「現状の塹壕戦は他の列強の思う壺ということか…」

「残念ながら」

「我々もこの勝敗が見えない塹壕戦を何かしらの方法で解決しなければならないと考えている。空から見て、この塹壕戦に思うところはなにかね」

「私達が見ていた第七戦闘団の防空範囲は航空戦で圧倒的な優勢ですから、敵の突撃は歩兵が対処する前に破碎されるかなり特殊な地域になるので別としまして、」

という前置きをしつつ

「たまに派遣される敵方が航空優勢な地域を見る限り、敵の戦車運用があまりにも分散しているがゆえに運良く失敗しているという印象を受けました。戦車は塹壕戦を突破するのに非常に適した兵器です。

一方我が方はそもそも航空戦において押されており、航空優勢な地域は高練度の魔道師が集中投入される”特殊地域”と言えるラインラント周辺にしか無く、ラインラント以外ではそもそも攻勢を実施できないため戦車の攻勢運用自体がされていません。

他方、ラインラントでは戦車は不要です。我々がいる間、敵方は航空機ですら空を飛べる状態にはありませんでしたから」

「航空機？」

「ルーデル大尉は高高度上昇と高速飛行ができるので戦闘機まで落としてしまいます」
「魔導師よりも的が大きい分むしろ落としやすいくらいです」

ハンナが肯定する。

確かにUFOじみた動きをする魔導師などよりも的が大きく、自分も散々乗り回し、ときには追いかけて回され動きが先読みできる戦闘機など完全にカモでしか無いだろう。

詳しくは聞くまいとゼートウアー閣下は話を続けた

「…君たちは、塹壕戦において戦車と制空権が重要だと考えているのだね？」

「はい。航空優勢と戦車の集中運用に加え、歩兵を自動車に乗せることで戦車の機動速度に随伴し、更に可能であれば野砲も自走化。敵が対処できない速度で攻撃すれば敵は塹壕を建設する間もなく崩れると考えています」

「先程話していたのはその事かね」

「はい、ですがまだ研究の途中でして…」

「途中で構わん。まとまっている範囲で話してくれ」

二人で検討していたのは「縦深攻撃」及び「電撃戦」に魔導部隊の要素を入れたもので、

機械化すべき砲兵の一部を爆撃機と魔導部隊で置き換え、更に偵察を魔導師のみで実施する。

こうすることで迅速に広範囲で正確な敵戦力の把握が可能となり、電撃戦における先鋒部隊の基本である「戦闘の回避」を徹底する。

さらに、迂回不可能な場合は近接火力支援を行い地上部隊の突破を援護する。

しかし、これら2つを実現するためには敵の魔導師及び航空戦力の排除が必要で、制空任務も加わる。

特に魔導師は近接火力支援、偵察、制空を行わねばならず

魔導部隊への負担が非常に大きいドクトリンとなる。

このため先鋒の機械化部隊に随伴するのは高練度の部隊を用いるか、数的な優位を確保するかとの二択となり、どちらにせよ必然的に魔導師の集中運用が重要となり、

魔導師部隊の大規模な再編成と機甲戦力の拡充、歩兵の自動車化、機械化を同時に行う必要がある。

「開戦時の共和国による機動戦は同様の考えによって行われたものだと思います。

魔導師戦力が壊滅し補給部隊が打撃を受けたために撤退していますが、

仮に突破された場合は多大な損害を被っていたことでしょう」

「戦闘教義の時点で遅れを取っていると言いたいのかね」

「残念ながらその可能性は高いと考えています。

現在の共和国軍は装甲部隊を分散運用していますが、開戦初期に集中運用を提案した人物が居たのは確かです。

失敗したために歩兵支援の分散運用に切り替えています」

「…わかった。だが歩兵まで機械化するとなると時間と予算が必要だ。今すぐ改良できそうな部分はないかね」

「魔導師も突破重視の集中運用をする事でしょうか。高練度の魔導師のみで構成された部隊であれば敵の後方に侵入するだけで敵方の補給を断つことができますし、小さい空

輸負担で機動防御も可能です」

「わかった、検討しておこう。」

機動戦理論の方は完成次第私のところに回してくれ」

「はい」

後にゼートウーア准将の手に渡った戦略論文は参謀本部で再検討され、

”大戦の形態と戦局予想及び目標策定”という名前で参謀本部に広まることとなる。

1924年9月某日

帝都ベルリン ザルカ食堂

休日。軍大学が休みだと言うだけだが結局いつもコレと行動を共にする。

「きょうはどうしようかなー」

「本当に何歳なんだお前」

「ーさいー！」

なんか精神年齢が年々下がってる気がする。今は精神年齢4―6歳くらいだろうか。そんな事を考えていると、珍しい人物が店に入ってきた。

「ウーガ大尉殿、珍しいところでお会いしました」

「いつもここだと衛兵司令に聞いてね」

「なるほど」

「デグレチャフ中尉、ルーデル大尉、同席させてもらっても良いかね」

「いいよー！」

ちなみにコイツ、この状態だと上官相手でも口調が変わらない。

「もちろん。どうぞ」

「…ルーデル大尉はいつもとは大分…」

軍大学だと寝てるか真面目モードかどっちかだから驚かれるのも無理はない。

「おかしいでしょう？ 切り替えが激しすぎて疲れるんですよ。」

「こんなのが撃墜数ランキングの上位を張ってたなんて国民に知られたらどうなるやら」

「まあ、年端も行かぬ少女を戦わせてたと非難轟々だろう」

「わたしは好きでやってるのになー」

「…失礼を承知で聞きたいのだが、君たち2人はなぜ軍に志願した?」

…: どういう意味だろう。軍にいるのがふさわしくないとも思われたか

「いや、階級やその他のことは関係なく単純な興味からの質問だと思つてくれ」

「はあ」

「君達ほどの才能があれば道はいくつもあるはずだ。なのに何故軍に志願した?」

「魔導師適正があるとすれば軍からは逃げられません。早かれ遅かれ軍に入るだけです」

「しかし徴用は早くとも15歳から、戦争がそれまでに終われば軍に入らずとも良いし、それに軍大学に入れるほどの学力があれば、帝国大学に入ってあらゆる徴用を避けることが出来る。なのに何故」

…: 正直に話すわけにも行かない。言つても理解できるわけがない。

「私の父は軍人で、戦争で亡くなつてしまつたそうです」

「…」

「孤児だつた私に他の道などありませんでした。魔導適性があり、いずれは軍に入る。

ならばと孤児院を一番早く抜け出す方法、”軍に志願する”という手段を用いたに過ぎません」

「しかし士官学校に入るほどの学力があれば高等教育への道も」

「ありませんよ。孤児に選択の余地などないのです。

むしろ私は恵まれているのですよ。本来なら入れないはずの士官学校にも、魔導適正があるから入れた」

「軍人遺族なら恩給は……」

「私は父親の顔も知りませんし、母親が何者なのかもわからない私生児です。ただそう知らされているだけです」

あまり嘘を語るのは気が向かないが…

「る、ルーデル大尉は」

「わたしはねー、空が飛びたかったの」

「空？」

「ある日おおかーさんがパラシュートのおもちやを買ってきて、それを真似してパラシュートを作って二階から飛び降りたの。」

空は飛べなかつたけど、少し浮いた気がしてもう一度飛んでみたら、もつと遠くまで飛べたの。

それを繰り返してたらずーっと遠くまで飛べるようになって、学校で調べてもらった魔導適正があるって」

自伝か何かに書いてた話と”こつち”にきてからの話をこつちやにしてるな。

「…」

「それでね、軍の魔導師になったらもーつともーつと遠くまで、高くまで飛べるってきいて士官学校に行くことにしたの！」

「そうか…」

スコアや軍大学での態度とはあまりにも乖離したいかにも子供らしいハンナの回答に戸惑っているようだ。

「しかし、君達はまだ子供だ。軍人はやめるべきだ」

「えー」

「……まあハンナの方はそう言われても仕方ない。」

完全に普通の女の子が前線で敵を墓場に、いや墓場すらないところに送り込んでいるのだ。

一般的な人間なら想像しただけで嫌になる。

外から見る限り純真無垢な幼女が、数千、いや数万という人間を屠っている。

これは絶対におかしいし正すべきかもしれない。だが……

「戦争が終わったら民間の魔導師になる道だつてある」

「ウーガ大尉殿、大尉殿は“コレ”はともかく小官の資質を疑われるのですか？」

私は違う。見た目はハンナとそう差はないが一人前の軍人として振る舞っていると

自負している。

年齢こそ子供だが中身は当然別物。實力主義の帝國軍において私の存在を否定するのは宣伝省位のものだ。

「それは違う、君を資質無しというなら帝國軍將兵全員が銃を置かねばならないだろう」
そのような私の考えを否定し、続けた

「だが君のような子供が戦争に行くことに違和感を覚えるのだ」

「まあ…そうでしょう。特にこの幼女大尉なんてこれでトップエースの一角ですからね
ですが、私に関してはたまたま身長が低いだけの一般的な士官であると考えていただき
きたい」

「だが」

「ウーガ大尉、どうされたのですか。そこまで言うのはあなたらしくない」

「じ…実は子供が生まれたんだ。女の子の…」

「それは、おめでとうございます」

「君を見ていてふと思った。自分の娘も戦争に行くことになるのかと、

可愛い盛りの子供を戦場に送る社会など……」

「おかしいと思います。」

私自身、宣伝省の方からは退役するべきだと何度も言われています。安心してください

い大尉。

「社会は、まだ」正常です。私達二人が例外なだけで」

「わたし、おかしい?」

「お前がおかしくなかったらこの世の何がおかしいんだ」

なんかもう上官ではなくてポケをかましてくる面倒な妹みたいだ

「ちなみにルーデル大尉は家族に反対されなかったのか?」

「おかしさんは、『毎日崖から飛び降りるよりはもう軍隊行くほうがマシね』って

おとーさんは主が力を与えてどうの言って良くわからなかったけど、とりあえず賛成
してくれた」

「ご、ご理解のある両親だな」

「わたしは飛ぶのを邪魔してくる奴等をね、この世から根絶やしにするの!」

ハンナのかなり狂気的な一言を聞いたあとはウーガ大尉はこの件について触れな
かった。

……本気で敵を全部根絶やしにする気だろうか

1924年10月某日

帝国軍参謀本部 陸軍第一晚餐室

「まずは、昇進おめでとう。デグレチャフ大尉」

「ありがとうございます。大佐殿」

「いきなりだが、貴官の配属についてだ。古巣の第七戦闘団に原隊復帰や教導隊というのが本来のところだが…」

「言わなくとも分かる。参謀本部のが本命だろう。」

「参謀本部からも一件、来ている。存分に迷い給え」

「選り取り見取りでありますな」

「そんな訳がない。実質参謀本部案件一択。」

「参謀本部の件については、ゼートウーア准将から直接お話があるそうなので…」

「そう言つて人事局のコードル大佐は席を外し」

「小官はこれにて」

「ご苦労コードル大佐」

「ゼートウーア准将に話を引き継ぐ。」

「参謀本部案件は吉なのか凶なのか…」

「さて、貴官らには新規で大隊を編成してもらおうと考えている。参謀本部直下の実験

的な大隊だ」

主語が複数形。つまり……

「それは、ルーデル大尉と」ということでしょうか」

「そのとおりだ。彼女は昨日同じ話を快諾してくれた。ちなみに彼女も少佐に昇進している」

凶であった。大隊を率いて前線に出ろというのが参謀本部直々の命令である。断れるわけがない。

奴とセット扱いになった時点で嫌な予感はしていたが、

戦争にルーデルが前線に出て暴れまくり、代わりに私は参謀本部付きで夢の帝都ライフという夢は脆くも崩れ去った。

どうしてこうなった……

ルーデルのせいとは言わん。奴が居なければ私は北方ですでに死んでいるはずだ。

「君ら2人の“縦深突破”と“電撃戦”は参謀本部でも高く評価しているし、仮に連邦の膨大な兵力を相手にした時には最も効率的なドクトリンであると考えている。だが予算を大量に使って機械化部隊を作る以上、参謀本部以外からの反対で頓挫しかねない。君らにはそれらを、特に財務省を黙らせるだけの戦果を期待している」

「…お言葉ですがルーデル少佐一人で十分なのは？閣下も御存知の通り”アレ”ならば連邦一個軍の戦闘力をほぼ一人で奪えますが」

「それでは意味がない。人事局などの反対を押し切ったのだから、君らには”電撃戦”の要素の一つとして魔導師の集中運用と襲撃が効果的であることを参謀本部以外に見せつけてほしい」

「人員の選定はこちらで？」

「人事局との折衷案だな。教導隊から数人を送り込むが、あとは東部戦線を主体に西部戦線からも支障のない範囲で好きに引き抜いていい。48人以下で編成してくれ。手段も任せる」

「増強大隊ですか。部隊名は」

「ルーデル少佐から今後も規模を拡張することを考えて独自の編成形態を取りたいとの意見から名称及び編成が独自のものを要求してきた。」

「第52魔導戦闘航空団の第一大隊という事になっている。略称I/JG52…やたらと中途半端な数字だが、これがどういう意味か大尉は分かるかね？」

「い、いえ…」

JG52、私もヤツも知らないわけがない。

エーリヒ・ハルトマン、ゲルハルト・バルクホルンが所属したエースだらけの第52

戦闘航空団。

元SG2指揮官、ハンナ・ウルリカ・ルーデルがその部隊に付けた名前は推測するに、その部隊の目標を示すものである。

対地攻撃をしながら”10000騎”を撃墜。連邦の魔導人的資源が現在のところ大粛清に伴い推測で3万以下なので、その3分の1を狩り潰す…本気でアカを根絶やしにする気なのだ。

ルーデルも分かっているだろうが撃墜数というのは”普通”多めに報告される。

過小報告してもっと殺せると喜ぶような斜め上のバカは全地球上の全史を探しても流石に一人しかない。

そしてルーデルが今カウントしているのは推測撃墜ではなく撃墜確定のもののみ。つまりJG52を遥かに超えるスコアを目標にしているに等しい。

……根絶やしという言葉が、妙に現実味を帯びてきた気がする。

「ただ、運用統合の都合で表向きは単なる3桁番号を持つ増強大隊だ。編成番号V60¹。

新設されるJG52の指揮下に編成番号V601の大隊が配置される形になる。

なお、編成する大隊の48人に戦闘団本部人員は含まないものとする」

ちなみにこの場にルーデルも呼ばれていたのに居ないのは「自主訓練中行方不明」と

いうことらしい。

実際は准将に直接「ラインで暴れる予定なので無理です」と断ったそうなの。つまり奴はすでに実質原隊復帰している。共和国はまた多大な出血を強いられるだろう

1924年11月某日

参謀本部 V601部隊準備室

さて、部隊を編成するとして、どうするべきだろうか。

求められているのは「集中運用を目的とした高練度部隊」である。

引き抜きが自由とはいえ、帝国最高練度部隊と推測されるラインラントの第七戦闘団から引き抜くことは戦線に支障をきたしまくる。

∴東部から引っこ抜いて再訓練して編成するしかないか

というのは表向きの考え。実際は“如何にして部隊編成で時間を稼いで前線に出る時間を削るか”という算段を立てていた。

そんなことしていたらハンナがキレそうなものだが、ヤツは“訓練”と称して西部戦線に向かったものの、

現在は実質205に原隊復帰。ラインラントで一年ぶりの猛威を奮っているに違いない。

カエル野郎共には悪いが貴様らの命は無駄にせず私の後方勤務時間を稼ぐダシにさせてもらおう。

とにかく過酷な条件で募集を募って志願者集めをできるだけ引き伸ばしてやる。

……という予定だったのだ。

実際に大量の志願書が届くまでは。

どうしてこうなった。

気が遠くなる。どういうことだ…頭が回らない…

ハンナが帰ってきて書類の山を見回したあと募集要項を見て、さらに精神をえぐってくる

「お前、この文面で募集出したのか？」

日本じゃどうか知らんが、前の大戦でも民族や国家の存続に貢献し名誉を得るためなら命を捨てるやつはいくらでもいただろう」

「いや…戦前日本はまさにそういうのだらけだ…」

今思えば思い出す限り一番古い例では島津の捨て奸すてがまりを筆頭に戦争となれば命を捨てる侍だらけの島だった。

江戸を挟んだあともかなり…

「自分の感覚だけで人を制御するのは難しい。士官学校でもそうだが、妙なところで失敗してるな。」

平時日本の会社員感覚と国家存亡の危機にある国家の感覚は全くの別物だ」

「全くもってその通り……」

至極当然のことを言われ、愕然とする。

ちよつと考えれば分かるものなのになぜ自分は自分の基準で募集文を書いてしまったのか。

そんな考えが足りなかったばかりにこの書類の山…

現実逃避をしても仕方がない。

「まあいい、これだけ志願書があれば処理に凄まじい時間がかかる。”念入り”に審査して時間を稼いでやる」

「これ以上遅滞させようとするとするなら職務怠慢として報告するぞ」

「それだけは勘弁してくれ！」

防御重視という扱いなのだが、指揮統制が上がらない、士気も上がらない、生産ボーナスがちよつとだけ付くがどうせ役に立たないというゴミっぷり。

多分一次大戦なら役に立つんじゃないかなー：

x x

用語解説：カエル野郎

フランス料理にカエルがあるので、”蛙食い野郎”という意味なのか

”froggy”という古典的な差別語。

ちなみに二次大戦後は降伏が早かったので「サレンダーモンキー」が追加される

用語解説：サレンダーモンキー

Cheese-eating surrender monkeys (チーズを食べ

ながら降伏するサル野郎ども)

の略。言わずもがなフランス人のこと。

11：訓練

これだけ志願者がいるのだ。であればこれを逆手に取って屈強で才能ある魔導師だけかき集めて

圧倒的に強力な部隊を作るほうが生存率向上のためには合理的だろう。

選別のための試験をどうするか：

私は光学術式を用いた偽装を主軸とした試験を提案したが、ハンナから横槍を入られた。

曰く”ラインでいくら飛び回ってもデコイを使う奴はほとんど居ないし、居てもデコイごと全部ぶちのめせばいい”

とのこと。

ハンナ本人もデコイを使えない。使わないのではなく使えない。

意外に思われるかもしれないが、ハンナは”飛行” ”空力制御” ”術弾による火力投射” ”防殻術式” 以外はからつきし。新兵以下なのだ。魔導刃は出来るがこいつは使わない。

士官学校では”ヤーボのようだ”と評したが実際、戦闘爆撃機と身体が一つになった

ようなもので、

それ以外はいくらやっても覚えられなかったのだ。

本来、攻撃手段には他に「爆裂術式」「貫通術式」「空間爆撃術式」等があるが、ルーデルには区別がつかないようで、

士官学校で行われた能力試験では本来貫通術式を使う試験だというのに、

術弾のみで100mm装甲板を4枚貫通していた。多分やつの術弾はHEAT弾か何かだろう。

そもそも術弾のみで貫通術式を凌駕する貫通性能があるので不要とも言える。

この異世界というゲームに生み出されたバグか何かか。

狙撃誘導弾も撃てなければ光学術式などよくわかってない。

”速く飛ぶ” ”機動中の相手に正確に射撃する” の2つさえ出来ていれば防殻術式すら必要性が薄いというのがハンナの理論である。

それよりも”空力制御”の方を重点的に学ばせるべきだというのだ。

1924年12月1日

「うわああああああああああああああああああああ」

それで、これか…

「はいじゃあ次の人ー」

ハンナが事務的に人間を選別している。

我々は地中海はクロアチア辺りの海に面した崖に來ている。

そこで何をしているかと言うと、志願者に20mほどの崖を飛び降りさせているのだ。

宝珠はつけているのだが、耐海水／水圧加工の特殊品で、さらに飛行魔術が使用できないように細工が施されている品。

…モンテイ・パイソンに「カミカゼ・スコットランド人高地連隊」というスケッチがあつたな。

まさにこんな感じで飛び降り訓練をするのだが訓練中に部隊が全滅するという。

幸い、最低限の安全は確認したので誰も死なないはずだ…斜め前に飛んだりしなければ。多分。

この試験の目的は、「空力制御ができる才能のある人間の選別」にある。

本能的に空力制御を行い自由落下せずに最低限でも滑空できる魔導師のみを集められないかという目論見だ。

今の所、数は少ないものの何人かが滑空できている。

といつても自由落下よりも少しマシな落ち方をする程度。

これを更に訓練してハンナの飛行速度に追従できる大隊を編成出来れば良いのだが

：

ちなみにセレブリヤコーフ少尉は元々才能があつたのか、

ラインラントでハンナに追従していたためか結構遠くまで飛んでいった。

案外残つた。90人なのでこれを48人になるまで更に選別する。

次の試験兼訓練は高高度適応。位置エネルギーを確保するなら可能な限り高い高度を飛行できる必要がある

航空魔術師というのは高度8000ftまで登れるのもほんの僅かな精鋭だけで、昇るとしても酸素ボンベがなければまともに動くことも出来ない。

そのような試験をしようとすると、一人が

「大尉、目標高度をもう一度お願いします」

「聞こえなかったのか？ 目標は高度1万ftだ」

セレブリヤコフ少尉はなにかおかしいの？とでも言いたいかのように少しだけ首を傾げていた。

「そんな、仮に昇れたとしても気絶するのでは…」

「気絶しない人材を求めている。今我が隊の求めるのは後から改善できる練度ではなく、才能である。」

6000ft以上に昇ることがまずない魔導師諸君はあまり知らないかもしれないが、生まれながらにして高高度適正、つまり低酸素適正がある人間、ない人間が居る。先日の滑空飛行試験と同様、今回も才能を選別する。

諸君らが取りうる選択肢は2つ。単核宝珠で飛行術式と酸素発生術式を同時に展開するか、

飛行術式のみで上昇し、生身で可能な限り高高度に耐える事だ」

「しかし高高度に上昇してもし気絶したら…」

「もちろん、私の責任になる。パラシュートは背負ってもらおうし、私かルーデル少佐が地面に衝突する前に回収するので安心しろ」

ちなみに、ハンナは2200ftまで酸素ボンベも予圧も酸素発生術式もなしに数分で上昇する。

前世の時点で”異常高度に耐えうる”という評価がされていたとはいえ、あんな事したら普通は減圧症になると思うのだが…

本人は”毎日飛んでいたら順応も酸素もいらなくなった”そうだ

高高度に住めばある程度は順応するのでそういうことだと納得しそうになったが、慣れでどうにかなるものではないはずだ…

以上の2つにおいて合格水準を上回ったのはセレブリヤコーフ少尉以下55名。

あとは基礎体力と精神力を確認し、この中から質の低い7人を蹴落とす。

次は単なる山歩きだ。

これもハンナ発案で、「撃墜された場合に友軍に合流するまで徒歩で撤退出来る必要がある」とのこと

まあ、何十回と撃墜されてその都度徒歩で帰ってきた人間の言葉は非常に重く、採用せざるを得なかった。

この訓練の内容は非常にシンプル。

一切の魔力を使用せずに山中を歩き、追跡し、ルーデル少佐を確保する。

ただこれだけ。12歳の少女を捕まえるだけが訓練。

それが登山家に片足をつつ込み、低酸素症と一切無縁で、

山岳歩兵顔負け行軍をするという点を除けば簡単なことだ。

三日後。結果は言うまでもない。

本人曰く、「これでも言われたとおりの手加減はしたんだがなあ」

12歳の少女とはいえやはり6000m級の山に登りなれた上に高山病の類と一切無縁。

片や体力的には優越している男共十1とはいえ2000m級の冬山なんて一度も経験のない奴ら。

更にハンナの移動能力はこの冬山で道もないのに日中8時間に限っても10kmを軽く超える。

なので一日の移動時間を4時間に制限した上、松明を使い移動しない時間は焚き火を常に焚いて置くように命じた。

「…まあ行軍能力に難のある奴らは蹴落とせたから問題ないということにしておこう」
この時点で残り50名。

次に対尋問訓練という名の根比べとか我慢大会とかそういうイベントを予定してい

たのだが、

ハンナは興味が無いのかまたライン戦線に帰っていった。

第52戦闘団の臨時訓練本部から前線までは片道300km。ハンナなら片道2時間もかからないので日帰りだって可能。

ハンナ本人にも対尋問訓練が必要な可能性を考慮したが、よく考えたらアイツはそもそも捕まらないのだった。

：…ついでだから追跡回避訓練もしておくか？

12月後半の訓練実施メモ

根比で3人が脱落して48名が確定した後、もう一度雪山を歩かせた。

今度は予定で6日。

ハンナなら2日で済む距離だがこいつらは8日間もかけやがった。

ここまで差があると流石にあの雪山おぼけを捕まえるのは無理があったと実感する。雪山に慣らすためにも順序を逆にすべきだったかもしれない。

しかし予定を超過した罰として追跡回避訓練を課した。

ハンナを連れ戻し周辺の陸軍部隊や空軍とも追跡訓練として協力してもらい、

三日間雪山を舞台に壮大な鬼ごっこ、若しくはかくれんぼ。

ここで捕まる無能には追跡回避訓練終了までの間、二周目の対尋問訓練を実施。

追跡を回避できないならせめて尋問には耐えてもらわねばならない。当然のことだ。

12月24日からの休暇も存在しない。前線で同じように休みのない人たちに申し訳ない。

1月1日は一次訓練過程の最後として0時から新年を祝う花火を打ち上げた。

ただしI/JG52の隊員は地上にいない。

同じように年末年始を訓練で過ごす高射部隊に協力してもらって”花火”を避ける、若しくは耐える訓練を実施した。

…察しのいい人はお分かりかと思うが”高射砲”と”対空機関砲”の放つ花火である。

曳光弾の比率が高い対空機関砲を夜間に撃つというのは結構綺麗なもので、シリア内戦では新年祝いの花火代わりに撃ちまくっていた。

これを0時から初日の出となる夜明けまで概ね8時間行い、これ以降休暇とし一次訓練過程を終了した。

1月8日

V601臨時本部

一ヶ月間先送りにしてきた長めの休暇を終え、

ハンナをラインから呼び戻したので第二次訓練過程の準備を始めようとした時、参謀本部から通達があった。

「参謀本部から公用使の方も来ています」

命令書を受け取って持ってきたのはセレブリヤコーフ少尉。

命令書によると、20日までに601は南東方面の駐屯地に移動し

南東方面軍司令部の指揮下に入れとの事であった。

ついでに私とハンナの1階級昇進も付属していた。

「どういふことだ？まだ基礎体力訓練しかしていないぞ？」

魔導師らしいことといえば新年花火大会と高高度適応選抜訓練しかしていない。

高速飛行、対地攻撃、対空攻撃等の訓練は全くしていない。

部隊としての組織力を確保するために必要なことは何もしていない。

まだ部隊として成立していないぞ!?

「至急参謀本部を呼び出せ、確認が必要だ」

「その必要はない」

言葉を遮って部屋に入ってきたのはレルゲン中佐だった。

「レルゲン中佐殿！」

「昇進おめでとう、デグレチャフ少佐」

「ありがとうございます」

「そういえばルーデル中佐はどこに？」

「夜明け頃にラインラントから帰ってきて、そこで寝てます」

応接用のソファでハンナが毛布をかぶって横になっている。

「参謀本部で噂には聞いていたが、本当にラインラントに出向いているのだな……」

「おい起きろ。参謀本部から公用使だ」

「にゆう……あと5分」

毛布を頭までかぶってそっぽを向いた。小学生か。

「お前それでも軍人か？」

「戦いに行くなら確かにそうだけど今すぐ起きる理由ある？」

……キャラ崩壊著しい。

「ある！邪魔だ！」

「いやデグレチャフ少佐、無理に起こさなくていい。私は別に構わない」

「ほらー」

「中佐殿がそう言われるなら…」

「噂通り、上官と部下というより姉妹だな」

「これでも大学に在る間は真面目だったんですが、その後ラインラントで暴れるようになってからこんな感じで…」

「疲れているのだろう。祖国への貢献は疑いようもないな」

「そういえば軍大学入学選考で“コレ”が問題になったと聞きました」

「まさか軍人であっても”休みたくない”などという人物が存在することが分からなかった。許して欲しい」

「どう考えてもルーデル中佐がおかしいのが悪いですよ」

あの後、レルゲン中佐からは「参謀本部は編成が完了したと考えていること」「訓練内容について参謀本部の面々が驚愕したこと」を伝えられた。

当然訓練は完了していない。機能としては不十分だとして命令の変更を求めた。

翌日、参謀本部は「訓練が完了していない」という私の主張に対して

”査察を実施し、その後正式な命令書を発行する”という返答を出してきた。

意図的に評価を落とす事も考慮したが、私の将校としての能力に疑問を持たれる方がまずい。南東行きは覚悟するしかない。そうだ。

査察が実施された。

目的は新編成となる601大隊の隊長が練度不足による訓練期間の延長を求めている事の判断をするためだ。

ちなみに戦闘団司令は「休暇」で不参加である。司令の飛行に誰もついていけないためそこにいる意味が無いとのこと。

この「戦闘団司令官」というのは参謀本部では知らぬものが居ない、例のハンナ・ウルリカ・ルーデル中佐。

「腑抜けどもめ！ たった八千だぞ！」

そして隊員に対して怒鳴っているのが副隊長、ターニャ・デグレチャフ少佐。

「高度8000？ 聞き間違いじゃないのか」

「一応酸素ボンベがあれば一万程度まで行けますが重すぎて現実的では…」

査察に來た將校達がざわつく。航空魔道師の上限高度は通常6000ftまで、そこから上は酸素不足や減圧で飛ぶことだけでも危険であるとされる。

「ライン戦線では一応8000まで昇ってきた敵が居ました。半分溺れていましたが」
デグレチャフ少佐が將校達の方に寄っていつて説明を始める。

「そういえばルーデル中佐も高高度戦闘をしていたと聞いたが」

「ルーデル中佐は上限二万五千ftまで上昇できるのですが、私もこの四核宝珠を用いて一万八千が限界です」

「しかし隊員はどうやっているの?」

「隊員にはエレニウム工廠が先行量産している最新の二核宝珠を取得し装備させています。」

酸素発生術式を使う事もありますが、基本的には低酸素耐性のある者だけを集めたので八千までは術式無しで飛べるかと」

「ルーデル中佐もそれで二万五千まで?」

「いえ、あれは”宝珠抜きでも滑空する生き物”かつ”気圧の影響を受けない生き物”なので、まだ既存の単核型しか使ったことがありません。」

近い内に渡そうと思っただけはいるのですが、渡したら何がどうなるか…宇宙までぶっ飛びかねませんね」

「デグレチャフはルーデルにこの“出力倍増宝珠”を渡した後、

自分に降りかかるであろう災厄を想像しながら軽くため息をつき、説明を続けた

「何にせよ、敵も二核宝珠を生産できてしまえば八千までは容易に飛んでくることでしょう。」

我々はその上を行かねばなりません

そのため、今後は高度12000を速度400以上で飛べるように訓練したいと考えています」

「400!?少し前の戦闘機並みだぞ!」

「一体どうやったんだ、それも九七式の為せる技か?」

「九七式のほうがやりやすいのは確かです。が、通常の飛行術式とは異なります」

「それはまさか、噂に聞く“空力制御”というやつか?」

「ええ。普通の飛行術式は地面、若しくは空間に対しての相互作用に干渉しますが

ルーデル中佐が考案……と言っても良いのかわかりませんが、”大気との相互作用に干渉する”術式になります」

「そういえば以前飛行機での訓練がどうこうと聞いたが、どういうことなのだ?」

「私自身一度墜落しているのですが、力学的には飛行機の模倣なので前後2つの揚力を発生させ、

これを調整しつつ推力を発生させることで飛行します。

この調整に失敗すると姿勢を制御できなくなり回復困難なスピン状態に陥ります。空軍の方がいらつしやるならご存知かと思いますが」

「しかし魔導師なら術式を切り替えれば良いだけではないのか？」

「そうも行きません。スピンの始まった段階で正常な感覚は失われ大抵パニックに陥ります」

「ちなみに601の隊員にはその飛行訓練は？」

「まだです。ですから飛行訓練の時間だけでも確保したいのです」

あとはまあ、この大隊には致命的な欠点がありません」

「致命的な欠点？これだけの能力を持っていないから？」

「ええ、この大隊は才能を徹底的に選別しました。」

裏返すと、魔導師の限られた人的資源からではこの練度と能力を持った大隊は増やせないのです

少なくとも、東部配置の人員からの抽出ではこれが最初で最後でしょう」

結局、南東方面への再配置は覆らなかつた。

だが”訓練を再度実施する時間を確保できるように配慮する”と確約してくれた。仕方がないので南東管区、もといハンガリーで飛行訓練に勤しむとしよう

第52魔導戦闘団 (J a g d g e s c h w a d e r 52)

本部小隊

航空団司令：ハンナ・ウルリカ・ルーデル中佐

第601魔導飛行大隊 (601/JG52)

大隊長：ハンナ・ウルリカ・ルーデル中佐

(実態：ターニャ・デグレチャフ少佐)

同第一中隊 (I/601/JG52)

中隊長：ターニャ・デグレチャフ少佐

(実態：ヴィクトーリヤ・イヴァーノヴナ・セレブリャコフ少尉)

同第二中隊 (II/601/JG52)

中隊長：マテウス・ヨハン・ヴァイス中尉

同第三中隊 (Ⅲ / 601 / JG52)

中隊長 : ヴィリバルト・ケーニツヒ中尉

同第四中隊 (Ⅳ / 601 / JG52)

中隊長 : ライナー・ノイマン中尉

用語解説 : HEAT弾

対戦車榴弾 (High-Explosive Anti-Tank) の略だが、日本語では「成形炸薬弾」と呼ばれることが多い。化学エネルギー弾。要するにRPGの頭についている弾のこと。

着弾したら火薬の力で金属が超高速で吹き出し目標を削る。

運動エネルギー弾である徹甲弾は基本的に金属の塊で、

「敵の装甲に固くて重い物質を高速でぶつけてやれば穴が開く」というごく単純な考えで作られていて、

砲弾の飛翔速度と貫通力が比例するのに対し、

HEAT弾を始めとする化学エネルギー弾は同じ弾頭であればどのような砲、

発射手段であつても角度が同じなら同じ貫通力が得られる。

(極端な話、人力で直接装甲に貼り付けても良い)

(一方英国はバネで飛ばした↓PIAT)

このため、RPG-7のような個人携行型対戦車火器の弾頭は大抵HEAT弾である
(LOSAT? 知るかそんなもん)

第二次大戦中にドイツで大量生産されたパンツァーフアウストが貫通力200mm。

かの有名なRPG-7で発射できる弾頭の中で一番安くて一般的、

どの武装勢力でも持つてて某所では1発1000円で撃てたと噂のPG-7V/P
G-7VM弾頭が

それぞれ270mm/300mmなので、別に300ミリ貫通自体はそこまで脅威ではない:と思う。

XXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説: 大気干渉術式

独自設定。2話からずっと使われてるルーデルの飛行術式。

感覚的には最低2つ、姿勢制御までするなら4つの揚力を制御しつつ、

さらに推進を加えて3つ若しくは5つの状態を同時制御する。

真つ直ぐ飛ぶだけなら2つでも良い。

管理と制御が難しいだけで、術式としては推進まで含めて一つとカウントされる。

独立したものである

X X X X X X X X X X X X X X X

用語解説：飛行術式

原作設定。ここでは「地面若しくは空間に対する干渉」と定義した。

12:ダキアI

1月26日　ブタペスト郊外駐屯地

事前にもらった忠告の通り、ダキアが宣戦布告した。

既に動員を開始していたので今更感しかないが。

おととい、参謀本部から極秘裏に受け取った情報によると

以前より協商連合、連合王国、共和国の3カ国から参戦交渉を受けていたダキアは、トランシルヴァニア地方の併合を条件に参戦を決定したという。

それを捕捉した帝国は再度ダキアの戦力調査を行うものの、その実態は惨憺たるものの。

装備は割と更新されつつあるようで、英仏が装備更新で不要になった駐退復座の無い

旧式野砲を

機動砲として多数購入しつつ、

更に105mmクラスの榴弾砲を師団砲兵用に少数ながら輸入。

歩兵の小銃は二十年くらい前まで前装ライフルが半数程度を占めていたようだが、

最近、全てを後装式ライフルに改修若しくは更新できたらしい。

おそらくスナイダー銃のようなブリーチロック式が殆どで、多連装ボルトアクションは英仏からの輸入品。数も多くないだろう。少々古めだが、装備はまあ悪くないように思える。上層部もそう考えただろう。

だが我々二人は様々な情報を鑑みて、敵戦力をかなり低めに評価した。ダキア軍の戦力評価は主に4つの要因によって低くされる。

1つ目は、動員体制。

前世世界で言うところではナポレオン戦争においてフランス大陸軍が暴れまわって以降、

軍隊というものは大きく変化した。

まず“国民国家の徴兵軍”がやたらと強いことが分かった。

志願や傭兵なんかと比べ物にならないくらいの人数を集められるのに士気が高い。

それまでの拉致同然の徴用とは違い、名誉と祖国への忠誠で動いてくれる士気の高い兵士が大量に確保できるのだ。

この世界の列強諸国も当然徴兵制を採用し、隣接する国の殆どが徴兵制へと移行した。

ダキアも例外ではなく、”一応は”国民皆兵になった。しかし増えすぎた人数は2つ目、3つ目の問題を生む。

2つ目は、補給体制。

国民国家の徴兵軍というのはとにかく数が多い。その分要求される補給物資も多い。例えば一次大戦開戦時のドイツ帝国軍なら予備役まで全部かき集めれば550万人が動員できる。

当然戦闘をせずとも食料は550万人分用意しなければならぬし、弾薬も必要になる。

郊外の道路もろくに舗装されていない上、そもそも自動車自体が少ない時代。

このような時代において、補給のための陸上輸送は鉄道以外では困難。で、ダキアの鉄道事情はどのようなものか。

列強と比べると残念極まる、というのが実情である。地図から見ただけで分かる。秘密裏に敷設したり軽便鉄道を増設していたとしても、まずそもそも首都近辺に複線鉄道がない時点で論外。

国家総力戦を戦うには圧倒的に輸送力が足りない。

この場合、補給をどうするかといえば選択肢は2つ。

馬や牛などの畜力か人力。

この結果、輜重兵がやたらと多い。

3つ目は致命的な士官不足。

国民国家の徴兵軍は、平時は士官の比率が高い状態となる。

これは戦時動員を開始した場合に適切な数になるため。

士官の数というのは作戦の遂行能力、指揮統率に直結する。

実際、一次大戦における帝政ロシアは莫大な人的資源と徴兵可能人数を抱えており、ドイツが550万に対して2000万人以上徴兵可能だった。

だが、その莫大な人的資源の運用にはいくつかの問題が残っていた。

その一つが士官の不足。兵3000人に対して士官13人という隊もあった。

ここまで士官が少ないと散兵運用が難しく、戦列歩兵に近いものになってしまふ。

もう一つが工業力不足による装備の不足。支給されないやつは死体から小銃を拾っていたそう。

かの有名な“銃は二人に一丁”という話はソ連ではなく帝政ロシアの話なのだ。

そしてそれだけ纏まっていると当然機関銃の餌食。

一人で300人なんて簡単には纏められないし複雑な動きはできない。

「下手すると」戦列歩兵が適切」と言われても仕方がないレベル。

：まあ、どこかで聞いたような話だ。

一次大戦のルーマニアそのものなのだが。

前世通りであれば識字率が低すぎて士官にすら文盲が多数存在し、

農繁期には兵を除隊しなければ経済が維持できないとか…。

そして4つ目。これが我々にとって一番重要。

”どこを掘り返しても魔導師の情報も航空戦力の情報も出てこない”ことだ

今の所、宝珠を生産できる国というのは限られる。

航空戦力だって大規模に予算を割けるほど実用性がまだ認められたわけではない。

それに、列強でもない工業化が不十分な途上国が買ったとしても維持が難しいのだ。

英仏に金を出せば当然売ってくれるだろうが、まず運用するための産業基盤がない。

それには整備人員や派遣パイロット、更に自国パイロットの新規育成まで、

全部セットで行えるだけの金を払う必要がある。

21世紀で例を出すなら、5000万ドル程度のはずのF-16Vを

整備人員、予備部品、ミサイルなども込みで1機辺り1.5億ドル出した国が存在し

たはずだ。

世界有数の自動車産業が根を張り、国内に複数の重工業メーカーを抱え、戦闘機すらライセンス生産可能な日本という国に住んでいると案外わからないが殆どの国というのは、整備するための産業基盤が存在しない。

なお、この事は大战におけるアメリカの強さにも直結する。

”自動車産業が強力で自動車を整備する産業基盤が揃っている”というのは機械化、自動車化部隊の創設、運用を容易にしようとする。

これがこつちの合州国にも適用されるから恐ろしい…。

更に、ハンナ個人のルーマニア人に対する評価が加わる。

「スターリンググラードでの奴らの情けなさといったら最悪極まる。

冬季に入り掛けていたというのに彼奴等、”渡河攻撃”に対して崩れて敗走しやがった。

防衛陣地で備えてたのに、まだ川が凍ってないのに渡河攻撃相手に敗走するんだぞ？信じられるか？」

「そうやって崩れて逃げていくルーマニア人共を見て、こいつらは戦力として計上するに値しないだろうと思った。奴らの代わりに毎日アカ共の戦車をぶっ壊した。奴らの

せいで多くの同胞が死んだ」

「二次大戦の酷さも知っている。奴らの弱さはドイツと違って20年じゃ変わりようがない」

ちなみにこの後はナチスの戦前戦略の話が続いた。

確かにナチスの戦前の経済政策は戦争準備としては天才的、

未来人が来たんじゃないかと思うくらいの手際の良さだが…

後にして思えば、この話をしているときのハンナは前世のそれに戻っていた気がする。

さて、話を戻してダキア軍は航空戦力も魔導師も無し、

更に師団も自動車化もされていない歩兵編成のみ…だがこれは運がいい。

ダキアは訓練の途中で実戦に投入されることとなった我が隊に、

”実弾演習の的”を提供してくれるのだ。生きていて一応反撃してくるやつを。

ダキア戦初日の状況としては

”事前に動員を確認して国境に配置された4個師団が損害もなく一時的に後退し、増

援師団が到着するまで後方に防衛線を敷いて待機、という状態らしい。

レルゲン中佐が南東方面司令部から命令書を持参してきた。

「デグレチャフ少佐、南東方面軍司令部から遅滞戦闘の要請があった」

「遅滞戦闘……？」

はて、私は敵の先鋒師団に対して火力投射して壊滅させるつもりだったのだが。

「中佐殿、”遅滞戦闘”でありますか？ダキア軍の足止めをしろと」

「難しいのは理解できるが、再配置中の南東方面軍が投入可能になるまでの時間を稼いでもらいたい」

「お言葉ですが、レルゲン中佐は我々の大隊にとつて遅滞戦闘が難しいとお考えで？」

「いかなルーデル中佐とて、陸軍の支援なしに複数の師団を止めることは難しいだろう。

砲兵支援がなければ火力が足りない」

…150mmクラスの榴弾を直接照準で一方的にバカスカ撃ち込まれたらどこの国の師団でも数分で混乱状態に陥ると思うが

「分かりました。601は遅滞戦闘に出撃しますが、司令部に伝言を」

「何かね？」

”601はこれより敵軍先鋒集団を襲撃する。

「これを壊滅せしめた場合は直ちに師団を反転させ、残ったダキア軍の掃討を求む」と

「なっ!?!」

「敵は所詮、前近代的な軍事組織です。魔導師の脅威となりうる対空装備もなければ戦闘機もあるかどうか怪しい」

「自分が何を言っているのか分かっていいるのか?」

「中佐殿、敵の越境前に事前の準備砲撃と制空戦は実施されましたか?」

「いや、そのような情報は無い」

「つまり、その程度の連中ということです。それに、撃滅くらいしないとルーデル中佐が退屈します」

公用使が来ているというのに応接室のソファで横になっているハンナに目を向ける。

「ラインにかえりたーい」

「というより既に退屈しております」

「…一応確認しておくが、当該の敵軍先鋒集団は三個師団だ」

「戦争は数ではありません。」

いかに敵が大人数であろうと統制が取れないならそれは軍隊と呼べません」

レルゲン中佐は最早言い返す言葉もなさそうである。

「セレブリヤコーフ少尉、大隊全員に三種対地攻撃戦装備で出撃準備させろ。」

「今日は夜まで帰れん」

「了解しました！」

「あと、これだけ珍しい現象をゆっくり観察出来る機会はもう無いだろう。」

出来れば記録しておきたいのでセレブリヤコーフ少尉はビデオカメラを持参しろ」

「ビデオ…なんですか？」

「あ、いや、映像記録用の16mmカメラだ」

「それとレルゲン中佐。どこまで進撃してよろしいのですか？」

「な、なに？」

「敵の抵抗はほぼ無いでしょうから、我々は今日一日で行軍可能な範囲であればどこに対しても攻撃が可能です。それが敵の首都であっても」

「デグレチャフ少佐！貴官は何を言っている！ルーデル中佐は少佐の意見が理解できるか!？」

起き上がってソファに座り直し、

セレブリヤコーフ少尉が置いて行ったコーヒーを飲み始めていたハンナが仕事モードで答える。

「私が行かなくても先鋒集団を撃滅し、ついでに兵站を派手に攻撃することは容易で

しよう」

「ルーデル中佐、本気で言っているのか？」

「一方的に叩ける時点で勝敗は決まっています。」

三個師団の戦闘力を永久に奪うには投射火力が幾分少ない気はしますが、再編成で数日間機能停止させる程度には問題ないかと」

「大隊、傾注！」

「さて、大隊諸君。残念ながら君らが待ち望んだ戦争はまだお預け、今回は訓練の続きだ」

「今回の訓練は、ダキア大公国が特別に我々に提供してくれた訓練用標的、約60万に對する対地攻撃だ。」

諸君はこれを銃撃しても良いし、術式で爆破しても良い。

このような訓練は中々出来るものではない。諸君らには、歩兵部隊がその機能を喪失していく様をじっくり観察してもらいたい」

「ターニヤ、それはどういうことだ？」

訓示を自分でやらず部下に押し付ける我が戦闘団の司令官が問う。

「軍隊というのは組織的な戦闘ができてこそそのもの。どこを攻撃すれば敵が組織力を失うか、

どのような攻撃が効果的かというのをゆっくり観察できる、恐らく最初で最後の機会になる。

効率よく敵の戦闘力を奪う方法を学んでおけという事だ」

「全部潰しちや駄目なのか？」

「お前みたいに魔力が無尽蔵でいつまでも砲撃してられるやつが他に居てたまるか」

「ふむ」

「そういう意味ではルーデル中佐はあまり手出しをしないほうが大隊のためにはなるな」

「帰っていいか？」

「軍法会議に掛けられたいなら。どうぞ中佐」

この遠足の引率が義務であることがえらく不満だったらしく、黙り込んだ。

「最後になるが、標的は一応反撃してくる：はずだが、

もしダキア軍相手に落とされたら懲罰訓練か不名誉除隊させてやる」

同日

トランシルヴァニア地方某所

『こちら第601航空魔導大隊^M、後退中の陸上部隊へ。越境した敵軍を撃滅するべく移動中。』

敵軍の正確な情報を求む』

南東方面司令部から聞かされていた、魔導部隊の増援が通信を送ってきた。

『こちら第81歩兵師団本部^{S I N F D i v H Q}、敵方数多く、方面軍司令部の指示によりやむなく後退中。斥候部隊の報告では敵軍先鋒集団の規模は三個師団程度、721デシマル448の地点を北西に行軍中』

『こちら601、情報感謝する』

『こちら81、武運を』

師団本部は一時、車両を停止して上を飛び去る601を眺めていた。

「死ぬ気だな、彼らは」

”敵軍を撃滅するべく”とは言っていましたけど、たった一個魔導大隊で三個師団はどうにもならないでしょうね」

「我々も遅滞戦闘を行うべきでは」

「方面軍司令部は我々を後退させて、彼らを前線に送った。鉄道を利用できない我らを

後退させる時間を稼ぐため。彼らの献身を無駄にはならない」

「たった一個大隊で三個師団を相手にする…」

「英雄だ。我々は英雄の姿を目撃しているのだ」

「本部総員、601に敬礼！」

師団本部人員は一齐に敬礼すると、再び車両に乗り込んで車列を組み、北西方面へ撤退していった。

13：ダキアⅡ

三個師団。出撃前に確かにその額面上の兵力よりも実戦力をかなり低めに見積もつた。

だが…

「…なんだろうな、これは」

ハンナが眼下の敵を見ながら呆れている。

「派手な軍装、隊の機動基準になる隊旗…」

今の所はやってないだけで、この分だと行軍統制用の軍楽隊も居るだろうな。

分かる人はこの時点でもう分かる。

そう、眼前に居るのは立派な戦列歩兵であつた。

恐らくダキアには連隊単位で使える無線機などの通信設備がないのだ。

あつたとしてももう少し大きい単位、下手すると師団規模。

もしかしたら師団本部でも電話を使っているかもしれない。

「なあターニャ。昔のことはよく知らないんだが、これが戦列歩兵つてやつか？」

「あ、ああ。間違いない」

流石にここまで酷いとは思ってなかった。

ダキアのさらに向こうには『瀕死の病人』というあだ名が付いた国が居るが、そこでも多分これよりはマシだろうに…

本当はこの国家規模で行われる渾身のギャグに大爆笑するのが礼儀なのかもしれないが、

残念なことに想定以下すぎる実態に動揺していた。

「帰っていいよな」

やっぱり言い出した。確かにハンナの出る幕は一切ない。見ることもしか出来ない。

「せめて課せられた任務を完遂して眼下の三個師団が壊滅したことを見届けてからにしてくれ…」

「暇だ…」

「だったらせめて映像記録を頼む」

「そうする」

ハンナはセレブリヤコーフ少尉からカメラを受け取ると敵集団直上へ飛んでいった。

「大隊各位、最初の敵師団には通常の野戦対地襲撃を実施せよ」

第一中隊以外は対地攻撃を開始した。

襲撃陣形を取って対地攻撃を行っている。

「参つたな副官。我々もやることがないぞ」

対地襲撃というのは増強大隊の場合、最大3中隊で実施され

最低でも残りの1中隊が制空権確保を行う…が

戦列歩兵の援護に航空魔導師や戦闘機が現れるはずもなく、第一中隊は暇を持て余していた。

「私は難戦する羽目になると覚悟していたのですが」

「たった三個師団、4―5万人程度の装備も腐つてて統率もろくに取れなくて、

100年遅れにもかかわらず仕方なく戦列歩兵を続けてるような連中相手に悲愴になるとは。

とてもライン帰りとは思えん発言だな少尉」

「少佐殿、三個師団ですよ？ラインみたいにも重砲の支援ありませんし…」

「それは相手も同じだ。そもそも、ろくに対空防御も出来ないのだから」

「いえそういうわけではなくて」

ん？

ああ、いや確かに私は間違っていたかもしれない。

「セレブリヤコーフ少尉、私が間違っていたようだ」

「へ？」

「腐りすぎていてろくな戦闘能力も持たない、統率もまともに取れない人間の集団を師団というのもおかしいな」

「えっあの」

「正確には三個師団ではなく5万人くらいの群衆ないしは暴徒、鼻屑目に見ても軍隊以下の存在、武装市民といったところだ。

ユーゴスラビアの領土防衛軍が非常に優秀に見えるくらいには酷い」

「ゆ、ゆーぞ？」

「なんでもない」

ユーゴスラビアはちゃんと教育された士官が十分な数いて、二線級とはいえ周辺国の正規軍勢力と組織的な交戦可能な程度に装備も充足していて、ドクトリンも良くできていた。比べるのは失礼だ。

「ルーマニア人は世界が変わってすら同じことを繰り返す…いや、こつちのほうが酷いな」

愚痴を言いながらルーデルが戻ってきた。

「お前はついにカメラにすら飽きるか…ここまで統率が取れないとちつとも参考になら

ん。

「カメラは止めていいぞ。フィルムがもつたいない」

訓練用標的としてもフィルムよりも価値がない。なんなんだこの時代遅れ共は。

ダキアの弱さからして、訓練を中断させられたのではなく、

訓練の延長として、実弾で対地攻撃する訓練が出来ると認識していたが、これでは訓練にもならん。

若しくはライン戦線で木馬に縛り付けられたカエル魔導師共と楽しく訓練ビクニツクしてたほうがマシだったか…？

「見ろ、逃げていく方向がバラバラだ。スターリンググランドじゃ一応逃げる方向が一定だったから再編成してなんとか防衛に使えたが、あれじゃ再編成どころか集合なんてできん。この師団は終わったな」

ハンナが明らかに軽蔑の眼差しを向けている。

「後方の陸軍には謝罪が必要かもしれないな…周辺住民が襲われないように逃亡兵共を掃討してもらわなければ…」

「司令部に報告しておけ。」601は敵先鋒集団を撃滅せり。陸上戦力による残敵掃討を求む」

敵に再編成されるのは悪いことばかりではない。なんせ統率を持った集合した部隊だから、後々面倒が少ない。

部隊として投降してくれると非常に助かるのだ。

「隊長、あれはなんでしよう?」

セレブリヤコーフ少尉が指差す先には敵の連隊が行進を停止して、

中央部を開けて四角い陣形を作っていた

「は?方陣?」

「友軍に騎兵はいません…よね…?」

「ポーランド辺りに機動戦大好きな騎兵師団がいくつか居るが南東方面には来ていない」

「ぼーらん…?」

「忘れろ」

…奴ら、もしかしてドイツ第二、第三帝国とかではなくプロイセン軍と戦いに来たの
ではなからうな。

若しくはオーストリア大公国…?下手すると士気の低さと練度不足でそれにすら勝

てないな。

せめて伏せて射撃する訓練くらいしないと、せつかく買った後装式も意味がないという。

ドライゼ銃を装備したプロイセン軍にはまず間違いない勝てない。

”開いた口が塞がらない”にも程がある。

「あの場で簡易でも塹壕を掘っておけば多少は被害を防げるでしょうけどね……」
他の隊員も流石に呆れている。

「いやいくらなんでも時代錯誤が過ぎる。我々には戦列歩兵に見えただけで

何かしらの仕掛けがあるかもしれん。一応、少し試してみるべきかもしれんな」

「アドラー2からアドラー1、聞こえるか」

無線でハンナを呼び出そうとした次の瞬間

第二中隊が突撃陣形を崩して敵射程外に離脱した。

「何考えてるんだ第二中隊は！」

「少佐殿?!」

「セレブリャコフ少尉、第二中隊に攻撃停止命令、ヴァイス中尉をここまで連行しろ。
抵抗したら射殺していい」

「りよ、了解……」

「で、中尉。弁明を聞こうか」

「あの少佐殿、弁明とは一体」

「敵前逃亡の疑いだ。なぜ突撃陣形を崩して反転し、距離をとった？」

説明に納得できなければ貴様をこの世から永遠に解任する」

「はっ、敵歩兵が対空射撃隊列を形成しましたので

” 教範どおり” 射程限界に離脱し各個にて機体列への牽制射撃を命じました」

「は？教範？」

「第二十二野戦航空魔導戦技教範規定であります」

…：そういうえばハンナが士官学校時代、飛行指導を依頼された時に

” まずその前にこのふざけた教範を直せ” と怒りながら教官共に怒鳴っていた部分だ…

東部ではまだ使われていたのか。あれは。

” 対空陣地の迂回を推奨する” というやつか」

「は、はい」

「いいか中尉。あれはなんだ？」

最寄りの方陣を指さした。

「対空射撃陣形であります」

「だが重機関銃すら無い、ただの歩兵の隊列だぞ」

「密集歩兵隊の戦列射撃陣形ですので、教範どおりに迂回を命じました」

…再教育が必要な。こんなゴミどもが相手の時に気づけて良かった。

「教範どおり…と？」

「はい」

「貴様は一体何を見ていた、貴様は高速飛行時はどの高度をどの程度の速度で、何を使つて飛ぶ！」

「はい！我が隊の規定では高度8000を速度300—350にて、大気干渉術式を用いて飛行します！」

「で、それは教範のどこに書いてあるんだ？」

「いえ、高度6000以上は原則飛行禁止とされています。大気干渉術式は影も形もありません」

「そうだな。そして、飛び方が変われば戦闘術も変わる。我々は旧来の常識を破壊した事を上層部に証明せねばならない。」

「お前は下で見苦しく足掻いてる旧時代の遺物と同じ、古くて腐った常識に囚われている」

「申し訳ありません」

「もういい、手本を見せてやる。ルーデル中佐、敵の目の前に出て行ってみてくれ」
「あい」

ハンナは敵方陣のすぐ近くまで高度を下げると防殻を展開したまま空中で静止した

「なんのつもりだ！撃て撃て撃て！」

将校が射撃を指示する…が

ダキア軍歩兵は四方八方からハンナに対して射撃をするものの、当たり前だが一切通らない。

「効いてない…？」

そう何者かが呟いた途端、小銃の射撃はまばらになり、最後には止まった

「貴様ら何をしている！撃て！撃ち続けんか！」

戦列を率いていた将校が拳銃を片手に怒鳴る。

「無理だ…こんな相手に勝てるわけがない…」

そして、組織が崩壊した。ハンナに対して射撃していた歩兵は陣形を崩し散り散りに

なつて崩れ始めたのだ

「逃げるな！逃げるやつは敵前逃亡で銃殺だぞ！」

将校は威勢のいいことを言っているが足が震えている。

ハンナはかつて見た風景と重なつたのか非常に不機嫌なご様子。

『貴様ら腰抜けのせいでスターリンググラードで同胞が大勢死んだ……』

今度こそお前らルーミア人は敵だ。今度こそ逃さない。殺してやる』

無線越しに物騒な言葉が聞こえた直後、ハンナによる怒りの爆撃が始まつた。

敵方からは悲鳴すら聞こえなかつた。

術弾射撃を始めて1分もしないうちに崩れて逃げ始めていた敵四個連隊が地上から消えた。

「面白いものが見れたな。まさか一発も打たずに敵が敗走するとは、中々見られない。撮影しておけばよかった」

「少佐殿、私は」

「まあ、ああやって全方位から射撃を受けて何分も平気でいられるやつもそう多くない。だが十分な速度で飛行していればあんなに当たることもなければ脅威でも何でも無い」

「少佐殿、大変申し訳ありませんでした」

「ヴァイス中尉、今回は教範を庭で燃やして全て忘れろと命令していない私の責任も大きい。」

訓練に問題ありということだ。なので、今回は「ちよつとした事」をしてもらえば不問とする」

「ちよつとしたこと…ですか」

「そうだ、あそこの歩兵連隊に単独で高速突入して一発以上射撃してこい」

「一人でありますか!?!」

「死にはしない。ちなみに断ったら命令違反、敵前逃亡なので当然この場で銃殺だ」

「りよ、了解しました!」

ヴァイス中尉は敵連隊に突撃し、弾倉にあるだけの術弾をぶつ放して戻ってきた。

「敵はどうなった?」

「吹き飛びました」

「当然だな。しかし貴官だけではなく他の連中も同じような状態かもしれん。」

任務が終わったら古い常識を焼き払った上で全員にみっちり新しい常識を叩き込んでやる」

全く、歩兵相手に実弾演習をして正解だったな。

こんな状態ではライン戦線でカエル共相手に制空訓練したらどんな損害が出たこと

か：

参謀本部が訓練をやりすぎというのは勘違いも甚だしい。まだ足りない。

：正確には選別と体力系の訓練を中心にすぎただけの事だ。部隊としては全然未完成。

教範のことも含めて参謀本部には分厚い報告書をぶん投げておこう。

用語解説：ユーゴスラビアの領土防衛軍

冷戦期に西側とも東側とも同盟を組まず、

地理的に東西勢力の中間においてユーゴスラビアを存在させるために考案されたあの意味、”苦肉の策”

ちなみに正規軍は領土防衛軍と別に存在する。

ユーゴスラビアにおいては高校に”軍事訓練”の科目が存在し、

ここで予備役相当の訓練を受け、国民全てが男女を問わず国土を防衛するために武器を取る、

全民衆防衛、トータルナショナルディフェンスというドクトリンが採用された。

領土防衛軍は各連邦加盟国が別個に管理しており、連邦全土に広く武器弾薬庫を分散

させ秘匿、

更に武器弾薬の製造設備も各連邦加盟国に一つづつ配置されることとなった。

冷戦後、

” 以前より存在した民族間問題”

” 民族間問題の調整をしていたチトーの死去”

” 各連邦加盟国が領土防衛軍を別個に運用できる体制”

” 国民全てが予備役相当の民兵となりうること”

” 冷戦終結によるユーゴスラビアという寄り合い所帯の存在価値の消滅”

等の「何故今まで内戦にならなかったのか不思議なくらいの条件」が重なり、

ユーゴスラビア紛争が勃発。

結果として領土防衛軍が各連邦加盟国の国軍となり、ユーゴスラビア連邦は崩壊し現

在に至っている。

X X X X X X X X X X X X X X X X

用語解説：ポーランド騎兵

史実ポーランドのポーランドソビエト戦争において、

一次大戦直後だというのに大胆な機動戦を実施し

圧倒的に装備と兵力で勝るソビエト軍を追い返した連中。

二次大戦においても騎兵旅団11を保有し、ドイツ軍と交戦したがその戦果はよくわからない。

ただ半自動車化されていたと思われるので、ある程度は効果があつたのではなからうか。

”帝国”においても何故か半自動車化された騎兵がポーランドあたりに配置されている模様。

x x x x x x x x x x x x x x

用語解説：ドライゼ銃 (Dreyse Zündnadelgewehr)

1836年から量産された我々がよく知るボルトアクション小銃の始祖であり、最初期の後装式小銃である。薬莖は現代のように金属ではなく紙。

火縄銃のような前装式から、後ろから装填できるといふ利点があり、伏せたまま再装填できるようになった事で弾が当たりにくくなるという利点がある

14 : ダキアⅢ

第一中隊は小隊に分かれて周辺の偵察を命じていた。

『第1小隊から大隊本部へ』

そんな中、セレブリヤコーフ少尉から無線連絡があつた。

この場合の大隊本部とはハンナと私二人の本部小隊のことだ。

「こちら本部。どうした」

『軍団本部らしきものを捕捉しました』

「何？FCP（前線指揮所）や師団本部ではないのか？」

『いえ、これ以外に本部、指揮所、司令部らしきものは見当たりません。

無線を発しているのもこの一箇所のみです』

まさかだった。

無線機が少ないのではないかという予想はしていたが、斜め上に来やがった。

師団単位ですら無線機を持っていないのだ。そういえば野戦電話も見かけていない。

奴ら、本当に18世紀水準の軍隊に少し新し目の装備を与えただけ、なのか……

「分かった。すぐ向かう。第一中隊は次の地点へ集合せよ」

「かえりたーい」

ついにストレスが上限に達したのかハンナは飛行中だと言うのに幼児退行し始めた。

「えーと、軍団本部…だよな？」

セレブリヤコフ少尉が発見したという軍団本部は、馬車の列だった。

…馬車。

一次大戦の基準で言えば、馬は大事だ。

鉄道から降ろされた物資は馬が前線集積地まで運ぶ。

いや二次大戦でも使える自動車があまり多くなかったり気候や地形、インフラの都合で自動車ではなく

あえて馬を使うことはよくあった。

だがここ、トランシルヴァニア地方はそんなことはない。

比較的乾燥していて別に自動車の使用を妨げるようなものもない。

極端に道路の整備が遅れているわけでもない。

が、馬車。

馬車なのだ。馬車。帝国や合州国では国民車という概念が出現したというのに、

馬車。

これ、どうやって無線の電源取るんだ。

「通信内容からすると、本国の総司令部との交信みたいなので恐らくは…」

「平文なのか？偽電を使った偽装の可能性は？」

「ありません。この地域では平文の通信しか行われていません」

「うーむ…」

あまりにも酷い状態だが、

英仏の支援があるなら軍事顧問が派遣されていて何か仕掛けているかもしれない…

？

「面倒くさい！直接確かめる！」

ハンナが軍団本部にすっ飛んでいった。

「お、おい待て！」

「こんにちはー」

「な、何だお前は!?!」

移動中の軍団司令部の目前に、

宝珠と補助具を付け、軍服と思わしき服を着て小銃を背負った黒髪の少女が前方を塞ぐように降り立った。

「おじさんたち。ここで何してるの?」

「お前が一体何なんだ!」

司令部の面々は一斉に小銃を向ける。

不気味すぎる。

至って普通の少女が普通に話しかけてきているが、その服装は軍人そのもの。

普通の成人男性の軍人が相手であればこのような恐怖感はない。

あまりにも存在が異質すぎて撃って良いのかもわからないのだ。

「ねえ何してるの?」

「来るな! 近寄るな! それ以上近づくと撃つぞ!」

「ほんと? 撃ってみてよー」

さらに近寄ってくる。

「う、撃て! すぐ撃て!」

将校は兵に射撃を命じる…が当然通らない。

そこらへんの小銃の一斉射撃が魔導師相手には通らない事すら知らないのだ。

「ねえ、それ本当に銃なの? ちつとも当たらないよ?」

今度は同じような風貌の金髪少女と、いかにも軍人という連中が降りてきた。

「この度はうちの上官がご迷惑をおかけしてしまい申し訳ありません。

お恥ずかしいことに、我が国の国境警備隊が皆様を軍隊だと誤認してしまつたのです。改めまして、入国審査を行わせていただきたいと思います。

帝国へようこそ！パスポートかビザはお持ちですか!？」

「ふざけるなあ!」

将校が拳銃を撃つが、やはり効果はない。

「ビザはお持ちではない？」

残りの皆様は？ご旅行の目的は？捕虜としてであればビザもパスポートもなく入国できますが」

「やかましい!撃て!」

一斉射撃をするが、一人相手に効果がなかつたものが多人数相手に効果があるわけがなかつた。

ここまで射撃の効果がないのに多人数で乗り込んでも

さつきの下つ端連中と違って逃げださない辺り、

この軍団本部の周辺に配置されている連隊は精鋭なのだろうか…

いくら士気と練度があっても時代遅れでは意味がないな。

「面倒だ。将官以外は殺せ」

中隊に一斉射撃を命じると、数秒で周辺の敵兵が全滅した。

まあ、これだけ荒らし回れば残敵掃討など我々がやる意味もない。

此処から先は歩兵の仕事だ。

「セレブリヤコフ少尉、方面軍本部に”敵軍は組織的抵抗力を喪失”と報告して友軍の状態を確認せよ」

「了解」

「確認しました。第81師団がこちらに向かっており、

他方面の師団も反転、第七航空艦隊と第11魔導戦闘団が先行し国境線に戻っている
そうです」

「まあ魔導師と航空艦隊が付いているなら心配する必要はないか」

「我々も残敵掃討を行いますか？」

「歩兵の仕事だ。我々にはまだ出来ることがある。首都だ」

同日深夜

ダキア公国 首都ブカレスト郊外上空

イヤーなものが見える。

” 国民の館 ” だ。

ルーマニアの独裁者が作り上げた” 宮殿 ” だが、ある意味チャウシエスクの墓標。

政権が倒れた後は国会議事堂として使われていたが、

なんでこれがこんな時代にあるんだ？あれ作つたの1980年代だろう。

建築自体が困難だと思うんだが…まあいい。

首尾よく事前に聞いていた兵器工場を発見。

先程は国民の館と煙突がかぶっていたのでまさかとは思つたが流石に違った。

「兵器工場が対空防護されていないというのがにわかには信じられません」

「奴ら、自分たちが使わないものは相手も使わないとも思つてるのかもしれない。

それよりも時代遅れの連中の割にはこんな時間でも工場を動かせることが驚きだ。

まさか24時間営業しているのか？」

確か工場を24／7で常時運転すると故障が頻発して生産効率が低下するというソ

連の5曜日制の教訓があったな。

このまま放置しておけばそのうち効率低下してそういう教訓を生むだろう。

「私たちには好機です！敵国首都に奇襲を掛けますか!？」

違法行為を進言するセレブリヤコーフ少尉。寝不足か？

戦争の仕方しか教えてなかったが、士官学校で覚えさせられると思うのだが。

「セレブリヤコーフ少尉、我々は戦時国際法を無視する野蛮な集団ではない。」

市民への無差別爆撃や軍とは無関係の施設を攻撃してはいけない」

まあ、それが文字通り守られるかといえは…

「失礼しました!」

「全部隊に徹底させろ。目標は軍需工場のみ、それ以外は誤射も許さん。

避難勧告も出せ。規定通り、国際救難チャンネルでだ」

「しかしそれでは奇襲効果が無くなるのでは」

「人員の退避は出来るだろうが、退避できるのは人員だけ、重要なのは生産設備そのもの

だ」

人員も纏めて”事故死”させられるとなお良い…いや？ちよつと待てよ。

「これだけ弱いと最早、首都攻撃すらあまり意味がない」

ハンナが私の脳内を覗いたのか、思ったことを横取りして口にした。

「中佐殿、それはどういう事でしょうか」

ヴァイス中尉が尋ねる。

「いや何、よく考えてみる。」

ダキアの鉄道の貧弱からすれば、あそこで何かしら生産されたとして前線に届くまでに結構な時間がかかる。

そして、そう遠くないうちにこの国は帝国の占領下に置かれるだろう。

その時は工場は無いよりはあつたほうが良い。

ただでさえ粗末な工業力を何もゼロにしてやる必要はない」

「では我々はどうしましょうか」

「鉄道だ。鉄道の橋梁、なければ路盤ごとふっ飛ばして、工場向けの送電網を破壊すれば十分」

まさに気づいたことを代弁された。

「目標を変更する。鉄道施設と工場の送電系周辺施設。」

セレブリヤコーフ少尉、警告を発しろ。規定通り退避を命じると」

「私やる！」

本当についてさつきまで真面目に攻撃目標を語っていたハンナが無線機に飛びついた。

「…まあルーデル中佐がやるほうが嘘っぽくて奇襲効果が保たれるかもしれないな」
「わーい」

そもそも深夜の鉄道と送電網など、

反撃もなければ防護のしようもない相手にやるなら奇襲効果なんてあつてないようなものなのだが。

「けいこくします」

「わたしたちていこくぐんは、これよりぐんじしせつと、てつどうをこうげきします！
わたしたちは、さんじゅつぷんごにこうげきします！」

…確かに送信されたはずだが、5分経つても警報の一つもならない。
奴らにとっては一体何だと思われてるんだろうか。

…30分経過。反応なし。

「よし、中隊に分かれて攻撃を開始する。第一中隊は工場周辺の送電施設を攻撃、それ以外は鉄道路線沿いに飛行し崩れやすそうな所があれば攻撃する」

「これは…どういことだ」

第81歩兵師団は南東方面軍司令部から「ダキア国境へ戻り敵歩兵師団と交戦せよ」との司令を受け

翌日の朝に国境地帯へ戻ったが

そこにあつたのは敵師団ではなく、硝煙の匂いと血の鉄臭さが混じり合った赤い大地。

あちこちに落ちている死体が、そこに師団が存在した事を物語っている。

「まさか、601がやったのか？」

「殲滅つて…文字通りじゃないか」

誰一人として生きていない。死体回収すら行われていない。

つまり、組織として機能する軍隊はこの場に残っていないという事だ。

そして撤退したわけではなさそう。敵の司令部テントらしきものがそのまま残っている。

『こちら601MB、81InfDiv、聞こえますか』

『こちら81、どうぞ』

『こちらの不手際で敵師団を適切に殲滅できず、敵兵が散り散りに逃げてしまった。

住民に危害を加える前に周辺の村の防衛と逃亡兵の掃討をお願いしたい』

『…了解した』

『感謝する』

『601、貴隊はこれからどうするのか』

『こちらは敵首都攻撃を完了した。任務を完了したので帰投する』

ダキア開戦より数日後

おかしい、何かがおかしい。

英国が手を回し、圧力をかけまくって貿易を妨害しまくり、帝国への物資流入はかなり低下しているはず。

ルーシー連邦も帝国への食料輸出を停止している。

まともに貿易できているのはイタリア代わりのイルドアくらいのものだ。だというのに食糧事情の悪化が遅い。

これが一次大戦基準なら既にじゃがいもすら足りなくなってきたいてもおかしくない頃だ。

当然、ここは前世とは色んな所が微妙に違う異世界だ。

前世のドイツと同じに考えるべきではない。

だがそれでも一般的な市民の食事がK—Brot止まりどころか、

小麦が普通に手に入ってしまうのはいささか違和感がある。

遅くとも、もうそろそろK—Brotが出てきても良い頃だ。

そこで、ふと気になって図書館でここ十数年における帝国の政治と農政情報を確認した。

だが調べる前に以前新聞で読んで少し違和感があった名前、それも聞き覚えのある名前を一つ思い出した。

それは「現財務大臣の”ヒャルマル・シャハト”」

確かナチス党政権下で開戦の数年前まで経済大臣だった男だ。

あまり記憶に無いのだから確かメフォ手形とかに関わっていた気がする。

更にもうひとり。”ヴァルター・フンク”

二人揃って前政権から引き継ぎ8年という長期間、

シャハトは財務大臣、フンクは財務副大臣とライヒスバンク総裁を兼任している。

名前は聞いたことがあったが軍人でもなければ脅威にもならないので、

別に気にすることも無いと思いい調べずに居た。

そしてその経歴と政策を調べ直した結果、一つの結論に至った。

「こいつは、転生者だ」

用語解説：国民の館

概ね作中の説明通り。

何故か漫画版では”ダキアの兵器工場”として登場したので登場。

あんなクソデカブツが工場とか勘弁してくれ

x x x x x x x x x x x x x x

用語解説：ライヒスバンク

ドイツ帝国の中央銀行のこと。

XXXXXX
XXXXXX
XXXXXX
XXXXXX
XXXXXX

用語解説：メフォ手形

軍事予算の水増しのために用意された偽装企業“MEFO”が振り出した有価証券。

国債ではなく手形にしておくことで現金の移動を無くし、

インフレを防ぐ（実際には後回しにする）目的で作られた。

”1939年”から償還が開始されたが、償還のための予算は

ユダヤ人資産をいじくり回して最終的に”アリア化”もとい没収したり、

国外にある分は”償還の無期限延期”したり、ドイツ軍占領地域にある分は回収して

無効化した。

が、結局はかなりの額を国債よろしくライヒスバンクが抱えることになり

戦争になって有耶無耶に。

（一応終戦まで償還は実施されたがそれでも半分近く残っていた）

XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：KK—Brot

原作でもよく出てくるアレがより凶悪になったブツ。

ライ麦パンを、ライ麦の代用品として、ジャガイモを粉にしたものを10%使うパン

がK—brot。

ジャガイモ粉の比率がだいたい20%前後になるものがKK|Brotと呼ばれる。KKK|Brotは流石に聞いたことがない。が、存在したとは思う。

そもそもパンの体をなしているのか分からないけど。

そもそもK|brotというのはジャガイモ粉以外を混ぜたものもあつたようで、とうもろこし粉、豆類粉、ルタバガ（カブに似たモノ）粉等も混ぜられていた。

番外2：ナチスの影と、お買い物帝国

1924年2月某日

帝都ベルリン、財務省ビル 第一会議室

財務副大臣とライヒスバンク総裁を兼任するヴァルター・フンクは戦時下におけるインフレ問題に対する提案をするべく、

財務省の官僚とライヒスバンク幹部及び理事会を一斉に招集した

全員が集まると、フンクが話し始めた

「諸君。我が国のインフレは長引く戦争で悪化する一途だが、

この度ダキアが降伏したことによってちよつとした対策が可能になった」

官僚と幹部たちはざわついた。戦争が続く限りインフレが続くと思っていた。

そもそも戦争におけるインフレというのは当然起こるもので必然のものだ。

特に国家総力戦におけるそれは凄ましい。

何せ国力の限界まで物資を消費しまくる上、生産人口がごっそり戦場に持っていかれ
るため

ただでさえ生産が低下するのに消費だけはやたらと増える。

しかも構造が単純故に一目で解決できないものと分かる。

投入される労働力の過剰化もさることながら“物資不足”はどうしようもない。

「インフレが避けられぬのなら、帝国ではなく他国が被ってくればよいのだ」

ドイツ第二帝国では一次大戦において、このインフレもとい物資不足が致命的な結果を生んだ。

英国の海上封鎖開始以降、まず飼料が輸入であったため家畜の数自体が減少、

馬は軍が輸送のために大量に徴用され農業自体の効率が低下。

輸入率が高かった小麦の供給量が一気に低下。

更に政府の思考停止とも思える市場の価格統制を開始。

通貨価値は低下し続けるのに売却可能な価格が固定されてしまったため、

農家の生産意欲が低下して”後のコルホーズじみた”状態に。

価格が安価に統制されることで売却を渋った農家は

価格統制される穀物やジャガイモの生産をしなくなったり、

家畜の飼料に流れるという実に効率の悪い状態に。

大戦前、化学肥料と火薬の材料となる窒化物は輸入されていたが

1912年に開発されたハーバー・ボツシュ法によつて大気中の窒素からアンモニアを生産できるようになり

ドイツは輸入が止まっても化学肥料と火薬を生産できた。

だが国家総力戦による極端な消費の増大により肥料はほとんど生産できず、ほとんどを火薬生産に回された。

各種農業機械も生産設備が軍需に回されて更に農業効率が低下。

軍役に就くことが出来る成人男性は尽く戦場に行き、

老人と女子供だけが残された銃後においては工場が人的資源を優先的に供給されたため、

更に農業従事者が減る。当然食糧生産はどんどん低下する。

具体的には終戦時の食糧生産量は開戦時の半分にまで低下していた。

特に1916年はじゃがいも生産量が開戦前の5200万トンに対して29万トンとひどい有様。

1916年の12月以降、ドイツ国内では餓死者が続出し始める。

これをカブラの冬という。

更に食料を輸送するはずの鉄道網が軍需輸送にばかり当てられ、

「食料はあるのに都市まで届かない」という状態が頻発。

そこにただでさえ栄養失調で体力が低下していたのに1918年、スペイン風邪（インフルエンザ）の流行が重なりさらなる追い打ちをかける。最終的に75万人が餓死したのである。

さらにこの間、当然インフレも同時に発生しマルクの価値はどんどん低下していたにも関わらず

政府は穀物及びジャガイモの価格を統制し続けた。

それにより更に統制外作物の生産へ流れていった。

その後1917年、農奴制がまだ残っており、

西欧の産業革命以降、”農奴を犠牲にして食料を輸出する”スタイルを貫いてきた帝政ロシアも

食糧不足、国民と政府中枢及び皇帝の間での認識の乖離など、

ドイツ第二帝国と非常によく似た状態に陥っていた帝政ロシアは革命によって崩壊。

皇帝一族は殺されソヴィエト（評議会）が政府を運営する体制になった。

当然ドイツ第二帝国でもロシアを手本にするように革命が発生した。

もつとも、こちらは帝国政府主導で皇帝の退位を勝手に宣言したものであるが。

以上のような一次大戦の失敗を”帝国”も繰り返す可能性があった。

だが転生者であり財務大臣のヒャルマル・シャハト、財務副大臣のヴァルター・フン

ク

更に農政大臣ヘルベルト・バツケがこれを予見し、防ぐべく事前に対処をしていた。ちなみにバイオダイナミック農業は当然ながら検討すらされなかった。

「それは一体……」

「簡単だ。占領した国から物資を抽出すればいい」

「しかしそれでは陸戦条約に違反してしまいます！」

「もちろん、それは分かっている。だから形を変えてやればいい。今からそれを説明する」

再びざわついた。何を言っているのかよく分からなかったからだ。

言った本人としてはこれをやるのは二度目なのだ。

前やったときにはシステム的には成功した。

ナチス党の実態というのは、“一次大戦反省会”という面がある。

ナチ党員に限らず、一次大戦の悲惨な有様はドイツ国民の中にある種のトラウマを植え付けた。

食糧不足、鉄道輸送の不備、産業基盤の不足、そしてそれらが生み出すインフレ。

ナチスは国民に対して“一次大戦のような失敗は二度としない”と約束した。

そして、ナチス政権は一次大戦の反省を国家運営に反映させた。

まず農業生産力に注目し、少なくとも自国の供給力のみで餓死者が発生しないように集中的に資金を投下した。

結果、50%を割っていた食料自給率は85%まで上昇、

更に鉄道網の強化に加えて、自動車を戦争に活用するためのアウトバーンなどの道路網整備。

国民に仕事と十分な休暇とレジャーを与え、

自動車産業基盤を整え、余暇を楽しむための国民車、KdF—Wagenを開発。

戦時の徴兵対象世帯の給与保証及び遺族年金も、

平時比85%という高水準を確保し、更に追加で軍務給料も出る。

ナチス・ドイツは「もし戦争になっても」国民を飢えさせず、満足させることに全力を尽くした。

革命が起こるまでと、起きてからを見届けたナチスは、

同じ失敗を繰り返さないことにかけては全力であった。

「まず、この“ReichsKreditKasse 帝国信用銀行”が軍票を発行する」

そして、戦中政策の一つとして出てきたのがこの“ReichsKreditKasse ドイツ信用銀行”であった。

ドイツ信用銀行RKKは、ドイツの占領国に置かれる。

まず最初にポーランド、次にベルギー、オランダ、フランスの順に置かれ、

ReichsKreditKassenschein
R K K 証 券を発行する。

このR K K証券こそ、ナチスドイツの戦時経済の中核である。

R K K証券は、表向きはライヒスマルクと等価の紙幣である。

戦地、占領地での給与はR K K証券によってのみ支払われ、現地でするように命じられる

額面からするとライヒスマルクと交換できるといふように見せかけられているが、実際は異なる。

まず、このR K K証券はドイツ（帝国）国内での流通が禁止である。

何故ならこれをライヒスマルク（以下R M）と交換するとR M自体がインフレを起すためだ。

R K K証券は占領地において、占領地の現地貨幣との交換のみ認められる。

そして、占領地において軍の給与はR K K証券若しくは現地貨幣によってのみ支払われる。

この現地貨幣との交換レートに仕掛けが存在する。

例えば、フランス・フランとの交換の場合、

戦前レートを考慮すると15フラン \parallel 1 R Mのはずなのに、

占領政策として20フラン \parallel 1 R Mでの交換を強制される。

占領地の住民はR K K証券はR Mに相当するとみなしているため、個人は普通に受け取る。

そして、R K K証券は被占領国政府が、ドイツ側が決めたレートで現地の貨幣と交換する義務があったとした。

これは実態としては「R Mに対する強制的な通貨安」である。

この強制通貨安はとある現象を発生させる。

それは「現地に配置された占領部隊の個人単位の爆買い」である。

例えば初期のフランスの例で言えば、国全体で25%引きバーゲンセールをしている状態なのだ。

モノだらけの現代ですら、20%キャッシュバックであれだけ群がるのであるからして、

物がそう多くない頃、一次大戦のトラウマが物資の貯蓄を促す。

どのような結果になるかは、言うまでもない。

国家そのものに割引札を立てる。これがR K Kの目的であった。

そして軍と政府、正確にはナチスの面々はこの爆買いを奨励した。

北アフリカの靴、フランスのピロードと絹製品、

ギリシアのリキュール、コーヒー、タバコ、

ロシアのはちみつやベーコン、
ノルウェーの大量の鯿など、

多種多様な物品が占領地からドイツ本国に軍事郵便として大量に送られた。

ある兵は、本国の家族の食卓や生活のために。

ある兵は、本国で待つ恋人のためのプレゼントを。

ある兵は、帰還した時に交換材料になる酒などの嗜好品を

ドイツ軍は師団単位で定期的に前線、占領地などを移動するため、

大きい市場のある占領地にでとにかく買い漁った。特にフランス。

当時の手紙や証言を引用すると

”昨日は4キロのココアを購入しました、今度送ります”

”香水、オーデコロン、明るい色の革手袋、ガールフレンド用”

”パリで思いもよらぬお洒落なものを手に入れた、君あての靴と生地を送る”

”銅版画、化粧道具、玉ねぎ、婦人靴、爪切りバサミ”

”急ぎバターと大きな石鹸4個も入れて正午の便で出しておく”

”追加のバターポンド”

”さらなるバターを求めて遠征”

”君あてに便箋とバターを送る”

” ほぼ毎日、郵便屋さんがフランスにいる父からの小包を届けてくれました。コーヒー、ココア、チーズ、チョコレート、オートバイ用の革手袋まで。

近所の奥様達もこぞって占領地に居る夫にどんどん送金し、いろんなものを送つてもらつて、

消費しきれないほど来るので、そういう時は余つた分を交換していたのです”

” 本国へと休暇で帰還する兵の列車の網棚は、天井まで荷物いっぱい重い旅行鞆や異常に膨らんで不格好な包などが限界まで載せられていた”

こうしてヒトラーいわく、「もつともつましい輸送者」になつた兵士たちは本国へと様々な物資を持ち帰つた。

わずか20年前、戦争によつて物資や食料が欠乏し、飢餓を経験した人々は、今度は戦争によつて平時よりも満ち足りた生活を送ることが出来た。できてしまつたのだ。

ナチスドイツは、こうして国民との約束を果たし、

ドイツは結局最後の半年になるまで食糧不足とは無縁だったのである。

そしてこの成果は、20年前の飢えた苦しい戦争を忘れさせるには十分すぎた。

” 戦争の悲惨さ” なるものは、たとえ経験した本人たちであつたとしても、

こうやって上から塗りつぶしてしまえば容易に忘れられる。

現代日本でも言われる”それ”がどれだけ滑稽なもので役に立たないものか。言うまでもあるまい。

「しかし、このような事をするためには軍との協力が必要になりますが」

「その点も抜き無。参謀本部が機械化部隊の追加を要求してきていな。

この予算を確約することの交換条件としたい」

「既に来年の予定歳入を超えた額なんですよ!？」

「RKKプランさえ通れば、あとは共和国に勝ってもらうだけで後からどうでもなる」

「さて、以上だ。後日改めて採決を…」

そう言おうとした矢先、全員が一斉に立ち上がり、全員の拍手を以て決定された。

この”RKKプラン”は帝国の財政及び占領統治の基本方針に組み込まれることになる

帝都ベルリン 参謀本部鉄道課

「グレーナー課長。対連邦作戦用の再配置輸送計画に関してルーデルドルフ准将が相談

がある」と……

「ああ、わかった」

「ルーデンドルフ」め、今度は何を言い出す気だ？」

転生者、カール・エドゥアルト・ヴィルヘルム・グレーナー准将。

実戦経験付きの鉄道兵站の（変態的）専門家、重度の鉄道運用オタク。

鉄道課に入るなり戦争計画そのものに民需輸送が計上されていないことを指摘。

参謀本部軍令部に民需と軍需を両立した鉄道輸送を前提とした戦争計画を立てるよう求める、

最終的に多額の予算で設備を増強しつつ、

路線あたりの輸送量を限界まで高めることで民需軍需を両立可能な戦時輸送計画を作り上げた。

参謀本部では「帝国鉄道の独裁者」「スジ引きの魔術師」とも呼ばれ、

輸送計画の都合上、作戦どころか戦争計画全体にも大きな発言権を有していた。

参謀本部でどのような戦争計画、戦争計画が出来たとしても、

鉄道課が不可能と判定すればすべてやり直しになるのである。

グレーナーは前世、参謀本部地理測量課に配属され鉄道課に移り鉄道課長となった後、

戦時食糧庁に出向、その後ルーデンドルフを始めとする参謀本部と対立、ウクライナへ左遷される。

1918年10月、終戦直前に参謀次長を辞任したルーデンドルフの後任となり、終戦処理を行った。

その後参謀総長、交通大臣、国防大臣、内務大臣を歴任、

内務大臣としてナチスの突撃隊を禁止した後、

ナチス党の取り込みを図るや党の方針に反対して政界を引退。

その後第二次世界大戦開戦前に死去。

ちなみに前世では鉄道課がいたくお気に入りだったらしく、

こちらでは何度も昇進と作戦課長への栄転の話が持ち上がったが、

本人が鉄道課に（変態的とも言える）極端なこだわりがあったためか、

昇進を繰り返し階級が准将だと言うのに未だに鉄道課に残り、

相対的に鉄道課の立場は大きくなり作戦課と同列の立場にまでしてしまった。

更に言えば、戦争が始まれば更に鉄道課の権限は増大する。

何せ国家の輸送のほぼすべてを握ることになるのだ。

鉄道課は国家と国民の生命線をその手に握ることになる。

当然ではあるがグレーナーの輸送計画は一次大戦の教訓を多分に盛り込んでおり、

参謀本部で唯一、”国家総力戦”世界大戦”を考慮していた。

だが鉄道をいじれば本人はそれで良かったため、当然他人に言うことなどしていない。予算の根拠として最悪の状況、世界大戦の話を一度したきりである。

下手に作戦計画や戦略などで評価されてしまうと

鉄道課から引き剥がされてしまうかもしれないという恐れから、あえて何も言わないのだ。

前世でも苦勞した食料事情は気になったものの、

新設された農政省のヘルベルト・バツケ農政大臣が

あまりにも”わかつている”政策を連発し、前世の反省点を全部反映していいたため、

とりあえず放置することにした。

当然、仮に世界大戦に発展して前世と同じような状況になればさらなる行動も考慮していたが、

今回は第二帝国と違って国民からは純然たる防衛戦争として認識された。

予算、食料、鉄道の準備が何故か未来人が来たかのように万全である。

これならば、なんとかかなるとグレーナーは踏んでいた。

「何、機械化師団だと？」

「財務省がとある条件と引き換えに来年度分の機械化歩兵関連の追加請求予算を確約するらしい。」

「実際の支払いは先に手形で出せと。」

「その条件とはなんだ」

「軍票の発行を財務省とライヒスバンクが管理することに合意しろと言ってきた」

「軍票を？」

ルーデルドルフから渡された書類には“RKKプラン”と書かれていた

「なんでも帝国信用銀行ReichsKreditKassenなるものをダキアに作って、

そこから軍票を発行してダキア政府に支払わせる…らしいが、詳細はまだ良く把握していない。」

それに鉄道課宛てにも、占領地からの個人の軍事郵便荷物荷物を増やすために追加で毎月30000tの輸送量を確保しろと言ってきた」

「これ以上負担を増やせというのか！」

「奇妙なことに、鉄道予算まで上乘せしてきた」

「何？ …わからん。財務省は何を考えている」

「私もさっぱりだ。鉄道課なら何か分かると思っただがな」

と言いつつ、グレーナーには少なくとも言い出したのが誰なのかは予想がついたかつて、ライヒスバンクの地下金庫に”ReichsKreditKassen ドイツ信用銀行”の証券が紙幣代用として用意されていた。

このドイツ信用銀行の代用紙幣は、戦時において硬貨から金属資源を回収し、その代用として市場に流通させるための代用紙幣である。

この措置はグレーナーが国防大臣在任中に緊急戦時体制用に財務省に対して提案し、直ちに実行可能なように紙幣をライヒスバンクに預けていたものである。

こちらの”帝国”ではそのようなものが存在するとは聞いていない。

だがそれを思いつきそうなヤツが一人、いや二人。

(シャハトめ、何を始める気だ?)

X X X X X X X X X X X X X X X X

用語解説：ReichsKreditKassen 帝国信用銀行 / ReichsKreditKassen ドイツ信用銀行

基本的には同じものと捉えて良い。ライヒスバンクから人員を派遣されているため、軍ではなく財務省もしくは経済省系の組織。

帝国信用基金という訳も存在する。

XXXXXXXXXXXXXXXX

解説：RKK証券／ドイツ信用銀行証券／帝国信用銀行証券

ReichsKreditKassenCheinene

RKK証券が史実で誰が考案して用意したのかは不明であるが、少なくとも開戦前から存在していたのは確実。

”硬貨から金属資源回収”という目的で作られたと思われ、ライヒスバンクに保管されていた。

実際には突発的な思いつきでポーランドに設置されたのが始まり。

その後占領国ごとに設置されていく。

開戦まで”ドイツ信用銀行（ReichsKreditKassen）”なる組織は存在しなかったため、

「代用紙幣にそう書いてあるから」という理由でRKKの名前が決まった。

ちなみにReichsKreditKassenの「帝国信用銀行」という訳語は「ヒトラーの国民国家」のもので

他には「帝国貸付財務紙幣」という訳をしている書籍があるが、

RKK証券自体と混同しており、証券そのものは”ReichsKreditKassenCheinene”であり誤訳である

X X X X X X X X X X X X X X X X

用語解説：ドイツ革命

ロシアと同様に階級社会であるドイツ第二帝国は国民の状態を政府上層部や皇帝は把握できておらず、

把握した頃には既に手遅れだった。

18年春の”最後の攻勢”も失敗したため講和を模索し始めた。

食料と経済状況は悪化していたが前線はフランス側に押し込んでいたため、

一般国民は敗北するとは思っていなかったたので、国民の間で混乱が広まり革命に至った。

この後のごたごたで「ユダヤが悪い」とか「共産主義者が悪い」などの話が発生し、ナチス誕生の原因ともなる。

X X X X X X X X X X X X X X X X

用語解説：ライヒスマルク

1924年から1948年まで使われたドイツの通貨、

また、作中における”帝国”の通貨。

X X X X X X X X X X X X X X X X

用語解説：18年春／最後の攻勢

1918年の春、ロシアが戦争から離脱したことで東部戦線に配置した兵力を西部に再配置できるようになり

これによつてドイツには西部戦線で数的な優位が生まれた。

当時、前年に参戦したアメリカが200万の兵力を投入するべく準備しており

18年中に勝利できなければ敗北が確実であると認識しており、最後の攻勢であつたが

18年春季攻勢は失敗に終わる。

ちなみに目標は恐らくパリ降伏メソッド。

XXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：パリ降伏メソッド

近現代史でナポレオン以降サレンダーモンキー呼ばわりされフランスが雑魚扱いされる、

ある意味元凶にして伝統。

それは”パリに敵軍が接近もしくは入城すると(まだ交戦を継続できるはずなのに)フランスが降伏する”

というものである。

実例は

ナポレオン戦争（1814年）と

百日天下とワートルローの後（1815年）

普仏戦争（1871年）

第二次世界大戦（1940年）

XXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：バイオダイナミック農業

ヘルベルト・バツケの前任、リヒャルト・ヴァルター・ダレがハマっていた農業スタイル。

本筋と全く関係ないので気にしなくても良い。分かる人向けワード。

XXXXXXXXXXXXXXXX

用語解説：KdF—Wagen

フェルディナント・ポルシェ博士の長年の夢の一つ、国民車。

後の「Volkswagen Type1」である。

専用の切手台帳に毎週購入できる専用の切手を貼り付け、台帳の切手が全部埋まるとKdF—Wagenが買える。という仕組みがあった。

なお国民に車が納車される前に戦争が始まったため、

Volkswagen Typelの6400万台に比べ、KdF—Wagenとして生産された車は非常に少ない

xxxxxxxxxxxxxxxx

解説：バター

バターの話がやたらと引用されているが、全て同一人物の手紙。

母親と恋人のどっちにもバターを送っており、

他の手紙の引用も見ると、数ヶ月で結構な量のバターを送っている。

推測で5—10kgほど。なお彼と彼の家族に関しては一切不明。

番外3：休暇と超合法戦略

前回から時間は大きく飛ぶ、それは一年か二年か…

19xx年某日

共和国首都　パリ財務省ビル

共和国は、敗北した。

「クソツ！なんだこの条件は！」

共和国の財務官僚は頭を抱えていた。

敗戦で頭を抱える事といえば普通に考えれば巨額の戦費を支払わせる賠償金である。

だが帝国は休戦条約に関して、賠償金ではなく、財務条件を出してきた。

これは陸戦条約の、以下2条項に基づいた請求であった。

第三款 敵国の領土における軍の権力

第48条：占領者が占領地において国の為に定められた租税、賦課金及び通過税を徴収するときは、

なるべく現行の賦課規則によって徴収しなければならない。

この場合において占領者は国の政府が支弁した程度において、占領地の行政費を支弁する義務があるものとする。

第49条：占領者が占領地において前条に掲げた税金以外の取立金を命じることは、軍または占領地行政上の需要に応じる場合に限るものとする。

連合王国及び北アフリカで暴れている残党との戦争状態が解除され、

正式に平和条約が結ばれた後に国交が正常回復するまで占領可能であり、

この際、被占領国である共和国政府は占領経費を支払う義務があるとした。

この占領経費を払えという請求が一つ。

その次が

第52条：現品徴発及び課役は、占領軍の需要の為になければ市区町村または住民に対

してこれを要求できない。

徴発及び課役は地方の資力に相応し、

かつ人民がその本国に対する作戦行動に加わるような義務を負わない性質のものであること。

前掲の徴発及び課役は占領地方に於ける指揮官の許可を得なければこれを要求できない。

現品の供給に対してはなるべく即金にて支払い、それができない場合には領収書を以てこれを証明し、

かつなるべく速やかにこれに対する支払いを履行しなければならないものとする。

この「現品の供給に対してはなるべく即金で支払い、出来ない場合には領収書で以て証明し速やかにこれに対する支払いを履行しなければならない」とした部分で領収書を「軍票」とするのは普通のことであるが、

この「共和国内で流通する軍票」に強制流通力を共和国政府が保証し、支払い履行、換金義務が共和国政府にあるとしたのである。

要するに、R K K証券で発行されるライヒスマルクを共和国政府がフランソワ・フラ

ンで支払えということだ

RKK証券は基本的にただの紙切れである。RKKが刷るだけで発行される。帝国の都合でいくらでも増える。そこまではまだいい。

特に3つ目が酷い。

「RKK証券の為替レートはRKKが指定した金額で固定される」

というのだ

これは強制的通貨安を意味する。

財務省官僚はしばらく考え、この条項の目的に気づいた

『奴らは共和国から物資を搾り取る気だ』と

物資を搾り取るために略奪をするのは、昔であれば珍しいことではない。

共和国も王政だった頃は行軍するために麦畑を刈り取りながらということもやったし、

農村からの略奪、徴発は日常茶飯事。鉄道のような高速、大量輸送手段がなかった頃、

それをせずに軍隊を維持することなど不可能だったから当然の権利だったのだ。

このような超大規模な戦争であれば同じように略奪徴発を実行しなければ

帝国も軍隊を維持するのは難しいかもしれない。

しかし、陸戦条約に於いては以下のように規定されている

第三款 敵国の領土における軍の権力

47条：略奪はこれを嚴禁とする。

当然、略奪は「やつてはいけないこと」である。

だが国家の存亡の危機であればそんな事は言つていられない。

かつて、ルーシー連邦はその建国初期において国境や主権が曖昧な地域で略奪を繰り返した。

これはやはり食料がなければ軍隊が機能せず、食料を十分供給できない軍隊は政府に従わないためであった。

だが、帝国は略奪をしないと決めた。問題が多すぎるのだ。

R K K証券方式の利点は、馬、食料、燃料を奪われ、あるいは帝国軍のための労務を要求された

被占領国民にとっては、その対価としてR K K証券が支払われ、

その証券は最後にならずフランソワ・フランに変換される。

これによって被占領国民には直接的な損害は生じないように思われる。

徴発の負担をRKK証券が被占領国の経済システムに組み込むことで一般国民全体に配分拡散させ、

その被害を薄く広くすることで被占領国民に認識されにくくする。

これは物資を徴発する側にとっても精神的障壁を大きく取り払う。

一般の兵士は普通の経済活動をしていると思いきわが、実際には被占領国から物資を抽出する略奪活動なのだ

普通の略奪を行うと、中世の傭兵などならともかく現代の国民国家で、徴兵軍であれば士気は大きく下がる。下手すると反乱が起こるだろう。

そして、RKK証券は

「高度に発達した経済システムを悪用し、罪悪感をシステムで代替する」という代物だ。

このRKK証券を交換するための現地貨幣は何処から出てくるかといえば、被占領国政府の予算から出てくる。

『ドイツ人は我々から何も暴力を用いて奪い去ったわけではない。礼儀正しく適切に購入した。』

ただし我々から奪った金を使って支払っていたのだ』
と戦後とあるフランス国民は語ったそう。

当然税金だけでは足りなくなる。

となると、貨幣の新規発行でこれを補うしかない。

貨幣の新規発行が続けば当然貨幣の価値は低下、相対的に物価が上昇、典型的なインフレが発生する。

その上この貨幣の新規発行を止める手段を政府は持ち合わせていない。

そして、そうして物価が上昇すると帝国：ドイツは更に交換レートを切り下げているインフレが加速していく。

ドイツがR K K証券を発行する限り、交換する義務が生じる。

それに口出しする権利は被占領国の政府には無い。

一次大戦後、賠償金が原因でハイパーインフレを起こし

戦争は終わったというのに餓死者まで出した事を経験したドイツ、

それもナチスにとってはある種の報復であったように思える。

こうして被占領国はドイツ、もとい帝国に為替レートを押さえつけられ、

安価に物資を供給し続けることで緩やかに略奪、搾取されていくのだ。

被占領国と占領国、双方の国民を巧妙に騙したのだ。

フランソワの財務官僚たちは、この構造に気付いた。

国際法、陸戦条約における合法性を確保しながら、

被占領国民どころか自国民さえも騙しているであろうその手腕に恐怖した。

ドイツ人：いや帝国人というのは、ルールは守るのだ。

守りながらこのような事をするから始末に負えないし恐ろしい。

違法行為ならば被占領国であつても文句を言う事はできるし、

それに関して戦後の賠償金を取ることだつて容易だ。

だが今回のこの手法は、合法である。

「…なんて奴らだ」

「これ、政府は本当にこの休戦条約に調印するのか!？」

「俺達に拒否権なんてあるわけ無いだろう。必ず通る」

しかし、ナチス・ドイツ：いや帝国の本当に恐ろしい部分は彼らすら想像できない所にあつた…

二ヶ月後

フランソワ共和国首都パリ某所 第52戦闘団臨時本部

共和国に勝利した帝国。J G 52にも占領地での休暇が認められた。

そして休暇に入ると同時に大量のR K K証券で臨時の給与が支払われた。

「懐かしいな、R K K証券か」

「ああ、お前は知ってるんだったな」

「まさかシャハトが転生者だとは思わなかった。あまり記憶にない奴だが」

「…出撃ばかりで買い物とかしてなさそうな印象があるが、なにか思い出があるのか？」

「同僚に頼んで買い物は良く行ってもらった。実家と嫁への仕送りもよくやったもん

や」

「具体的にはどういうものを送ったんだ？」

「東国ではフランスみたいで工芸品はほとんど手に入らなくてな。

食料品ばかりだ。母親やうちの嫁はうまく交換してたようだが」

「で、これの交換レートは今いくらなんだ？」

ハンナが聞いてくる。あれ、なんか楽しそうだぞ？

「1ライヒスマルクあたり20フランソワ・フランが公定レートだ。フラン自体の価値

がよくわからないが」

「街に出れば嫌でもわかるさ。さて着替えるぞ」

ちよつとまで、着替える!?

「軍服じゃ駄目なのか!?!」

冗談じゃない勘弁してくれ：私服だけは…

思い出したくもないようなもの、押し付けられてるのしかないんだぞ!

「目立ちすぎると買い物しにくいし、何よりここは我々が散々いたぶった敵国だ。

軍服をまとった少女が居ると噂を立てば恨みを持った奴が攻撃してくるかもしれない。

とりあえず宝珠だけは隠し持っとけ」

「お前は良いかもしれないが、私は男だ!お前だけで行け!」

「往生際が悪い!だったら街で納得できる服を買え!」

「服を買いに行く服がない!行かないぞ!」

「ターニャ!せっかくの休暇を楽しむぞ!次はいつ休めるか分からんからな!」

じゃあ私が見ている眼の前で泣きじゃくっている金髪の子供は誰かって？
外見から察するにターニャ・デグレチャフじゃないでしょうか。

「お、おいターニャ?」

ハンナが困惑するという非常に珍しい現象が見れたが、そこは今本当にどうでもいい
はて、これはどういうことだろう。

眼の前の金髪少女はひとしきり泣いて、泣き止んだ。

「おねーちゃんたち、だれ?」

ターニャ・デグレチャフと推測される少女は外見相応の話し方を始めた。
いや本来の年齢と比較すると、幾分身長が低いかもしれない。
肉体的には同年齢のはずのハンナよりも身長が低い。

「おいどうしたターニャ!?!」

「少佐殿!?!」

そしてその反応に対して慌てている上司と部下。

更にそれを横から見ている私。

いやまて、あれ？私は誰だ？

『貴様はターニャ・デグレチャフに入っていた魂。それは間違いない』

何者かが語りかけてきた。それも脳内に直接働くかのような。

私はこの感覚を知っている。覚えている

「存在X！」

そしてその記憶から出てくる反応は怒り。

『貴様がそう呼びたいのであればそうしている』

「これも貴様の仕業か！ついに肉体と精神を分離しやがったか！」

『違う』

「は!？」

『私は貴様を転生させ、恩寵を与えたが貴様らには特に何もしていない。観測していただけだ』

「じゃあこれはどう説明する！貴様以外に出来るやつなど居てたまるか！」

『貴様は自らあの肉体から出てきたのだ』

どういふことだ・・・？

『たまにあるのだ、魂が肉体を受け入れられず不具合を起こすことが。』

貴様の知る言葉であれば、幽体離脱、多重人格、臨死体験。貴様は異世界から持ってきた。そういうことが起きやすい』

「戻るのか？」

『じき戻る』

：戻るのであればもう適当に放置しておこう。

私の肉体がどんな醜態を晒すか分かったものではないが、

”見ていない” ”記憶にない” 事にしておいたほうがまだ良い。

「ハンナ・ルーデルも同様のことが起きているのか？」

多重人格の疑いといえは真つ先に思い出す。

『あれは貴様と違ってこの世界とあの肉体を受け入れている。そのようなことは無いだろう』

薄々気づいていたが、私とヤツの最大の違い。それは前世に対する執着と未練。

やつは大戦を戦い抜き、アルゼンチンに移住し、60を過ぎてあとは余生を静かに過ごすだけだった。

だが私はまだこれからという所で死んだ。いや殺された。

やつにとっては文字通り第二の人生、

私にとってはある意味前世の続き…

いつもやたらと楽しそうにしているのは、

かつて”戦車狩りはスポーツ”と抜かしたように

魔導師狩りをスポーツかの如く楽しんでいる。

この世界を拒絶する理由がない。奴にとっては再びのボーナスタイム、

祖国、故郷と家族を再び守るチャンスを得た。

そして守ることと、楽しむことは矛盾しないのだ。ヤツの中では。

…そういうえば

「一つ、聞きたいことがある」

『何だ』

「何故ルーデルを転生させた。私を追い詰められた環境に置くことが目的だろう」

『それも私ではない』

「なんだと!？」

まさか、本当に神…いや存在Xにとっても想定外の存在だったのか!?

『私の考えを妨げる何者かが、この世界を大きく変えようとしている』

「その何者かは、他にも転生者を送り込んでいる、と」

『全く、” どうしてこうなった” のだ』

「はんつ、あたかも唯一神のごとく名乗っておいてそのザマか

少なくともお前に唯一神を名乗る資格はないな」

『…』

存在Xは答えず消えた。

「おいターニヤどうした!」

「少佐殿!」

「ふえっ」

ターニヤは突然怒鳴られるかのように問われて今にも泣き出しそうになっている。

そしてハンナはすぐさま何かを察した。

「あ、えーとターニヤ。おねーちゃんたち話があるから、待つててくれる?」

「う、うん」

ハンナはヴィーシヤを部屋の隅まで引つ張っていった

「中佐殿、あれはまさか…」

「ああ、過度のストレスによる幼児退行の類…正確には二重人格のたぐいだ」

ハンナは自分の身体に起こっていることを把握していた。

だからこそ、適度に精神を肉体に引っ張らせて不整合を緩和していた、

ターニャは逆に封印することで何とかしていたのだが、それが崩れたのである

「どどどどうしましょう」

「私だつたら別に構わないがアイツのあの状態は部下に見せられない。

さつさと着替えさせて街に出かけてしまおう。全員私服ならそうそう分かりやしな
い

数日の間は宿も外で適当に取る。上には旅行のため連絡不能と電話しておく」

「通りますかねそんな事」

「特に作戦をするような時期でもない。特別休暇先送り分今すぐ全部使わせろと言え
ば必ず通る」

「りよ、了解！」

「とりあえず自己紹介しとこう。記憶が無いらしい」

話を終えるとターニャの方に向き直った

「ターニャ、私はハンナ、こっちはヴィーシャよ」

「よ、よろしくー」

脳裏にデグレチャフの恐ろしい顔でも浮かんだのか、ヴィーシャの笑顔がひきつって
いる

「ハンナおねーちゃんと、ヴィーシャおねーちゃん！」

(か、かわいい)

ヴィーシャの笑顔が作り物から本物に変わった。誰も気づかなかつた。

はずかしくて見ていられない。

まさか、存在Xはこうなること分かってて肉体から精神を引き剥がしたのか!?

あの理不尽極まりない欠陥システムの権化みたいな奴のことだ、

神を自称していても嘘をついていたって何ら不思議はない。

「じゃあターニヤ、とりあえず街に出るのにその服はなんだし、着替えようか」

「はーい」

服を着せられた、いや自ら進んで着た。

ヴィーシャも着替えて戻ってきた。

「中佐殿、準備完了しました！」

「よし、さっさと出かけよう」

15：ノルデンI

1924年2月20日

ダキアが降伏してから一ヶ月、

訓練期間を終えた直後、転線命令が出た。次は北方方面軍。相手は当然、協商連合である。

この一ヶ月間は“古い常識を排除し新しい常識を植え付ける”と共に、ルーデルが直伝の回避理論を徹底的に、実弾を使って教え込んだ。

教官本人曰く、“敵味方の立体的な配置、飛行方向、速度さえ把握してればあとは本能が避けるようになる”らしい。

実際どうなのかは実戦にならない限りは未知数である

さて、北方の戦況はラインに戦力が分散されて以降はろくな攻撃作戦も組めず、

こちらも延々と塹壕戦を継続していた。

「やつと雑魚のカエル野郎とおさらばだー！」

「楽しそうだな」

「的撃ち程度の奴しか居ないからな共和国は」

同日0900

「大隊傾注！」

「既に伝えたとおり、我々601大隊は転属命令が出た。ノルデンで北方方面軍司令部の下に入る。」

この一ヶ月でだいぶまともになったとはいえ、やはり実戦不足の感は否めない。統率と士気に関して言えば自信を持てる水準になったのだが：

「ノルデンまでの移動だが、訓練の延長として長距離行軍を実施し、ノルデン地域に敵魔導師などが展開していた場合はそのまま交戦する」

「少佐、我が隊には長距離機動の経験が無いものが多数おります。」

1000kmもの距離を移動して交戦までするというのはいささか危険ではないでしょうか」

ヴァイス中尉の意見具申。

「確かにもつともな意見だが、先程も言った通りあくまで訓練の延長だ。我々には長距離機動の訓練をする時間は無い。ここで付いてこれないようなら今後大隊の機動に付いてこられない」

ハンナが更に説明を入れる。

「大気干渉術式なら大した距離じゃない。他の魔術師なら8時間以上かかるもしれんが、我々にはたかが3時間程度だ」

同日1041

北方ノルデン地方 ハルムスタード上空4000ft

『「こちらノルデンコントロール、ヴァイパー大隊の北西より接近する魔導師1個大隊を捕捉」』

「クソツ協商連合め、どれだけ」 志願兵「を集めてやがる」

1923年12月、魔導師戦力を日に日にすり減らし人的資源の限界が見えてきた協商連合を”延命”させるため

連合王国は表向き参戦をせず、

” 協商連合に国外からの志願義勇兵 ” という名目で魔導師部隊を協商連合に送り込んでおり、

共和国も同様の考えで魔導師を派遣していたのである

「今日これで何大隊来たんだ」

「もう数えてねえ」

大量の“志願兵”投入により一ヶ月で北方戦線の帝国軍魔導戦力も消耗していた。

『ヴァイパー大隊へ、悪い知らせだ。敵2個魔導大隊の接近の報告あり。北東10kmの地点』

「2個大隊だと!?!」

大隊全体が疲弊しているところに合計3個大隊など来られたら耐えられるはずがない。

だが、不幸にもそれだけでは終わらなかった。雲の切れ間に影が見えたのだ。

「CP!爆撃機が接近!数20!」

『迎撃機が間に合いそうもない、迎撃は可能か?』

「高度が高すぎる!敵魔導師にまわりつかれてるうちは無理だ!」

『集積地を爆撃されれば、物資不足で前線が崩壊しかねん』

「…了解、帝国に栄光あれ」

『いや待て、おい、それは本当か?』

「CP、どうした?」

『CPよりヴァイパー大隊へ、増援が来た。撤退を許可する』

「増援？一体どこにそんな戦力が」

『中央からの派遣だ。コールサインは“アドラー”』

「アドラー？…まさか!？」

『喜べ、我らが守護天使様のご帰還だ!』

開戦からの2ヶ月間で当時前線に配置されていた敵魔導師を尽く撃墜し、空を高速で駆け抜けるルーデルの姿に、北方方面軍の中では“銀翼の守護天使”の二つ名がついていた。

ハルムスタードより南方10km

「ノルデンコントロールより入電、敵三個魔導師大隊に爆撃機20」

「かなり多いな」

「よし、爆撃機は私一人で良い。そのまま最寄りの一個大隊を潰す。残る2個大隊はそつちで仲良くはんぶんこしてろ。但し時間がかかるようなら全部いただくからな」

ハンナが早速割当を決めた。

ハンナの手にかかればデカいうえに遅く、回避すらままならない爆撃機などというの

は”一航過で全滅させられる”程度の存在でしか無い。20機なら60秒持てば良いほうだろう。

あれが相手にいる場合、爆撃機は編隊を組まないほうが良い。

後部機銃の射撃は当たらないか、通らない。彼らが知るはずもないが。

「ルーデル中佐!?!何言ってるんですか!?!相手は大隊ですよ!」

ヴァイス中尉が理解できなかったらしい。

そりゃいくらハンナとはいえ実際に見てみないとあの異常な空戦性能は分からん。

目前にして初めて理解できる類のものだ。書類に書いてあったり人から聞いた話で信じられる範囲に無い。

「ヴァイス中尉、大丈夫ですよ。ルーデル中佐なら問題ないですって」

流石にセレブリヤコフ少尉は慣れたらしい。

「ノルデンコントロールより続報、要撃機を上げるそうです」

「断れ、要撃機のほうが遅い」

北方方面軍空域司令部 ”ノルデンコントロール”

「601より入電、”手出し無用”とのこと」

「いくら”天使”でも相手は爆撃機だぞ、高度と速度が足りないのではないか?」

「それが…巡航速度で3000、高度は8000を維持しながら接近してきています」
「何？それは小隊ではなく大隊全体でその速度と高度なのか？」

彼らはルーデルの飛び方を熟知している。ルーデルだけならむしろ多少遅いくらいだが、

大隊全体が高度8000、巡航速度で3000となると魔導師が手を出せる高度と速度ではない。

「大隊全体で間違いありません。数50です」

「601の話は噂には聞いていたが、本当に全員がルーデル中佐のように飛んでいたら協商連合は遠くないうちに魔導師を枯渇させるだろうな…」

突然、601を示す光点群から一つが急に加速して突出した

「速度5000、高度、1万、1万1000、1万2000…まだ上昇しています！」

「本当にそれは魔導師なのか!？」

「わかりません。故障や誤検知の可能性もありますが、こんな事できるのは…」

「ルーデル中佐か…」

「アドラー1、高度1万5000、速度500で敵爆撃機と接触します」

「観測班によく見張らせろ。魔導観測では爆撃機がどうなった分からないからな」

その数十秒後、早速入電があった

「観測班からです！」

「早いな」

「敵爆撃機は1航過で全滅！」

「本来は驚くべきなのだろうが…流石にもう慣れてしまったな」

「アドラー1、魔導観測から消失しました！」

「なんだと!？」

進行方向前方上方にて、突然連続して爆発が発生した。

「な、なんだ!？」

ヴァイス中尉が驚いている。

いや、アレを見慣れていないセレブリヤコーフ少尉以外の隊員全員が驚いている

「ルーデル中佐ですね。敵爆撃機は全滅したようです」

双眼鏡を覗き込みながらセレブリヤコーフ少尉が観測結果を報告した

「あれが…ラインの魔女…」

隊員の誰かがそう呟いた

『アドラー1からアドラー2、このまま敵魔導大隊に食いつく』

『アドラー2了解』

『アドラーから全隊へ、隊員諸君聞こえるか？』

急がないと全部もらうからな。一発も撃てなかつた隊員は一ヶ月酒抜きだ』

ちなみに601では基本的に禁煙である。呼吸器系に問題を抱えた場合には高高度適性が低下するためだ。

喫煙行為は命令違反なので、最悪銃殺にしている。性能維持のためには軍事上必要なのだ。

そもそも選別時点で喫煙者がほぼ弾かれていたのだが。

人事局には「魔導師は禁煙に務めるべきである」という報告書を投げた。

「だ、そうだ。各中隊は襲撃隊形に移行して高度と速度を上げろ。10000で350だ」

「了解！」

ほぼ同時刻 連合王国 派遣義勇軍前線司令部

「敵1個大隊と交代するように増援が現れました。同じく1個大隊規模ですが」

「どうした」

「…高度1万、速度350です」

「何？間違いないのか？」

「故障していなければ……」

「例の新型宝珠を装備した大隊だろう。まさかラインよりも前にノルデンに出てくるとはな」

「だが我が方は6500が限界これでは全く手出しができない上、

速力でも追いつけないとなると、戦闘の主導権を握ることすら出来なくなってしまう」

「量産されて広く配備される前に早急に多核宝珠を完成させてくればいいが……」

この新型宝珠ならば敵は、その高度差と速度差によって

”安全な高度から好きなタイミングで攻撃でき、迎撃は困難、追撃は不可能”という圧倒的なアドバンテージを得る

これは、仮に他国の魔導師が高度8000が飛べたとして、601大隊を迎撃しようとしても、

魔導観測管制から比例航法による精密な誘導を受けたとして、ヘッドオン状態では1回のみ攻撃機会が発生するのみであり

進行方向から左右45度の範囲外では迎撃自体が不可能である事を示す。

誘導無しでは恐らく発見することすら出来ない。

その上仮に攻撃が当たったとしても選別された魔導師と九七式による防殻が抜けるかといえば……

まあ、そういうことである。

これらの要素が重なった結果

”前線に敵魔導師がどう配置されていようと敵前を悠悠々飛び越え、後方の任意の地域に対して攻撃が可能”

という状態になる。魔導師の対処には戦闘機は使えなくもないのだが、

やはり魔導師を排除するには魔導師が適しているため、後方にも魔導師を配置する必要が生じてしまう。

ちなみに今の所、大気干渉術式は共和国や連合王国側には存在を察知されていない。新型宝珠の投入と時期が被ったせいでもそのように解釈されたのである。

「開発が間に合わなければ戦闘機で叩くか、爆撃機に魔導師を乗せる必要がある……」
と、その時

「エイブル大隊の報告、友軍爆撃機編隊が一瞬で消滅と」

「なんだそれは、編隊が一瞬で消し飛ぶわけ無いだろう、問い直せ」

もちろん、普通であればありえない。

爆撃機編隊の機銃攻撃を受けながら襲撃し

編隊機すべてに瞬時に当てるなど何者がなし得ようか。

「…エイブル大隊、応答ありません。交戦報告もなかったのですが突然無線が切断されました」

「ど、どういうことだ!?!、観測機ではどうなっている」

「観測機からはエイブル大隊の反応が次々消失しています」

「敵魔導師の反応はあるか!?!」

「ありません」

「何がどうなっている… 光学観測班を呼び出して状況確認を」

「それが…そちらも繋がりません」

「電波妨害の類か?」

「そういうわけではないはずですが」

「敵大隊がベーカー大隊及びチャーリー大隊と接敵、交戦を開始しました」

観測機の光点は2大隊と1大隊の交戦を映していたが、連合王国側の宝珠反応だけが一方的に消えていく

「高度差がきつすぎるな…。ネームドの魔導反応はあるか?」

「いえ、該当データはありません…ですがこの高速運動は…」

「ラインの魔女」か？」

「恐らくは」

「…撤収の準備をしておけ。敵魔導師が接近してきたら即時退避だ」

連合王国にも「ラインの魔女」の存在は認識されていたものの、

その正体は相変わらず不明で、未だ共和国及び連合王国の魔導照合データベース上には存在しない。

何せ共和国では交戦した部隊が何らかの理由で報告できず、

魔導観測にすらほぼ引つかからずに接近してきて、仮に記録できても

観測拠点のほうが消えていく事が多く、

運良く残っていても残っているのはあまりにも断片的で十分な記録時間が得られないため

”記録不能 照合不能 扱いされる。

「噂によれば魔女は二人組、姉妹だったな」

「共和国の記録によれば最近は一人でライン戦線に出てくるそうです」

「…この場にいるのも、一人であってほしいものだ」

その瞬間、観測機に突如光点が現れた。帝国の、それも多核宝珠反応だ。

「敵、直近！」

「どこだよ！」

「高度0、距離…ほぼありません」

空気が凍りついた。

退避どころか魔導師が観測網を無視し突然出現、
建物に張り付いた。

死んだ。この場にいる誰もがそう思った。

彼らにとって一年よりも長く思えた10秒が経過した。

「…」

誰もしゃべらない。喋れない。喋りようがない。

だが攻撃は来ない。

その凍結した空気を壊すように、何者かがドアを叩いた。

「…わ、私が出よう」

情報将校が席を立ち、ドアに向かった

開ける前に外にいるのが誰なのか確認したいが、

本当に敵魔導師なら攻撃行動に移るかドアを破壊してくるであろうし、

そもそもドアを叩いてくる時点で敵対以外の意志があると見るべきだ。

最早確認することすら不要に思え、そのままドアを開けた。

そこには：　少女がいた。

だがその少女は普通ではなかった。

軍服を着て、飛行補助具と新型と思わしき宝珠を身に着け、

背中には帝国軍の魔導師用制式小銃。

見た目からすれば明らかに軍人であるが、少女だという一点がその認識を阻んでいた。

「おじさん、ここに何してるの？」

ダキアでの生存者がここに居たら、この時点で発狂して失禁していたかもしれない。

「き、君は？だれ？」

「私はハンスⅡウルリカ・ルーデル中佐！」

「ちゅ、中佐？」

少女は名前と階級を名乗った。それも中佐。

「き、君はどうしてここに？」

「あのねあのね、双眼鏡を使つてのぞき見してた人を潰したんだけど、
このものぞき見してるんじゃないかなーって」

「えっ」

「ちらちら光つてうるさいから、何人か居たけど全員ころしちゃった」

「光学観測班をやつたのは君か……」

「やっぱりおじさんの仲間なの？」

「そ、それは」

「じゃあ、邪魔だから死んで？」

「なっ!？」

『アドラー2からアドラー1、覗き見している奴らが消えたようだが』

『ああ、ちゃんとドアを開けて中身確認してからふっ飛ばしたぞ』

追尾するべき目標の方向を単純に追尾する（単純追尾）のではなく、目標の移動方向を加算した上で追尾する方法。

「追尾者から見て追尾する目標が常に同じ方向に見える」のが理想。

高速な目標に対して単純追尾を行うと一度真後ろに付く事になるため、速度が劣っている場合は絶対に目標と接触できない。

だが比例航法ならば速度的に劣っていても（条件にもよるが）一度は目標と接触できる。

ただし交差点での一瞬しか攻撃タイミングがないため、近接信管付きの術弾でもないと有効な攻撃が当てられないだろう。

16：ノルデンII

レガドニア協商連合。

自分が知る前世におけるノルウェーとスウェーデンを統合した国家といえれば良いだろうか。

補給線に関して再確認すると、

工業力的に両国の首都たるオスロとストックホルムから前線付近まで接続している高規格複線が海沿いにそれぞれ1本づつ、内陸部には単線の鉄道が経路を考えれば実質3—4本程度、

軽便鉄道がそれにいくらか加わるがこれは短距離輸送用なのでさほど重要ではない。あくまで馬車の置き換えに過ぎない。

もう少し時代が下るか、若しくは合州国であればトラックを使っているであろう区間だ。

帝国でもそう遠くないうちにトラック主体に切り替わる：と嬉しいのだが。

対する帝国側はバルト海の制海権を握っているため港に対する輸送能力は万全で、港から既設の鉄道と更に仮設の野戦軽便鉄道を数多く前線まで伸ばしている。

正直、ライン戦線の”戦線の両側に複線30本づつ”などといった完全に国家の全力で殴り合うことを想定した規模に比べると見劣るが、

物資輸送能力に関して言えば帝国は圧倒的に優位である。

にもかかわらず押しきれないのは地形における不利と、防御側だけが一方的に有利な塹壕戦そのものの性質が原因だろう。

制海権に関してほぼ優勢と見ていいが、スカンジナビア半島の沿岸は氷河由来の複雑な海岸線を持ち、

細長く狭い水道や海峡を複数持つっており、主要な都市、拠点等はその水道の奥に存在することが多い。

例えば、ストックホルム。

ストックホルムを戦艦の砲撃圏に収めるには南と北、2つのルートがあるが

どちらも最も狭い所で800mしかない海峡を通り抜けなければならず

そのような海峡の入り口や途中に沿岸砲、沿岸要塞が存在し、

恐らく魚雷艇、水雷艇も多数配置されているため突破は不可能に近い。

…まあ不可能と言っても

相手がよりにもよって日本の連合艦隊で、長門型若しくは大和型戦艦が編成に入っていて、

一航戦や二航戦などの空母艦載機と連携して突破を狙ってきた場合は流石に突破される。

幸いにしてこの欧州にはそんな化物戦艦共や人殺し長屋、焼き鳥製造機とか、人殺し多聞丸とか、命中率だけならルーデルとどっこいな艦載機搭乗員共は存在しないので考慮しない。

極東は秋津島にもしかしたらあるかも知れないが、今は全く関係ないな。

まあ、そのような感じでストックホルム及びオスロなどには沿岸要塞が存在する。

更に言えば、スカンジナビア半島の沿岸は上陸戦にとことん向いていない。

特にノルウェー側は酷い。

スカンジナビア半島は古い安定した岩盤の上にあり、植生が少ないため土が蓄積しづらい。

更に氷河が岩盤を削り取って作ったフィヨルドは当然海の侵食を受けにくいいため、必然的に断崖絶壁となる。

なだらかに海と接している部分はフィヨルドの奥になることが多く、

当然大規模に出来るような場所なら沿岸砲若しくは沿岸要塞が存在する。

この地質のためにビーチングに適した箇所が他国に比べて極端に少ない。

ビーチング可能な場所があったとしても何かしらの対策を取られていると見るべき

だ

2月21日

北方方面軍総司令部 作戦会議室

なんて場に引きずり出されたのだろう。

北方方面軍の司令官、ウラーゲリ上級大将を始め、

同参謀長シュライゼ中將や北方方面軍の参謀將校多数に

更に中央の参謀本部からルーデルドルフ准將。

その中で、私は階級で言えば一番下の少佐。

…辛い。いつもなら空気をぶっ壊す上官殿も今日に限って真面目な顔をしている。

…いや、彼らも辛いかもしれない。

何せ参謀本部から直々に”601大隊の隊員と同室する場合は喫煙を禁止する”

などという指令が回ってきているのだ。

戦力維持のためにそこまでするかと感心する。

幸いにしてほぼ全員が開戦からの数週間で制空権をほぼ単独でもぎ取った”守護天

使”の恩恵に与っているためか

割と素直に聞き入れてくれたらしいが…

そして皆イライラしているのが丸わかりなほどである。

「ルーデル中佐、奇襲効果を狙って雪解け前に攻勢を再開するとして、制空権は問題ないかね」

「北方の魔道師部隊が損耗しています。601を分割して運用すれば全域で優勢を確保できます。ただ、奇襲が成功しても後方まで歩兵が機動できないので効果は限定的です」

「春まで待つべきだと?」

「601ならば確実な突破支援を実現できます」

北方方面軍は、去年12月頃攻勢を検討していたらしいが、

同時期に敵の魔道師戦力が一気に増強されて制空権を確保できる見込みが立たず頓挫している

冬は殆ど動いていないらしい。

…まあ、攻勢が実施されなくて幸いだった。

冬季攻勢の無茶ぶりはナポレオンあたりを思い出せば容易に理解できるだろう。

燃料が無ければ死ぬような地域で移動するなんて戦闘する前に凍死のほうが発生す

る。

そもそも北方はラインに比べれば圧倒的に輸送補給力が弱いのだ。

ここから戦線を北上させれば更に気温が低下し、補給は滞り、兵が戦わずして死ぬ。

極端な話、防衛側はこのような低インフラ地域においては冬季は戦わずとも良い。

ただ敵を凍死させるだけの十分な縦深があればそれで十分なのだ。

：まあ、それを一番実現しやすいのがソヴィエト、もといルーシー連邦なのだが：先が思いやられる

「北に行くほど鉄道が貧弱になる…これでは無理に進むと部隊が補給から孤立してしまいます」

「しかし鉄道を敷設しながら北上となると敵が防衛線を再構築してやり直しになる。

それならばやはり早く終わらせるためにも冬季の間に攻撃を開始したい」

鉄道に依存している間は、部隊の機動が鉄道に縛られる。

だからこそ、自動車の運用は機動戦に高い自由度を与えられる。

軍馬での代用には限界があるし、鉄道をトラックで完全に代替するのも、

それはそれで頭がおかしいくらいの数のトラックが必要になる。

帝国なら最低でもオペルブリッツで50万台欲しい。

ちなみに前世の米帝なら民間に注文しただけで一年で用意できる数。クソが！

「物資の備蓄自体は十分ですが、無理に攻勢をかけて進軍速度を上げすぎると前線まで物資が届かなくなりす

トラックが大量にあれば鉄道の代わりに使えるのですが…」

私はその”自動車による自由な機動”を提唱した側としての意見を述べる…が、モノが無いことにはどうしようもない。

「…あるにはある」

そう言ったのは我々601を中央軍から北方に連れてきた張本人、ルーデルドルフ准将。

「本当ですか!?!」

やった。それが本当ならば鉄道をそこまで考慮せずとも進軍できる。

「提案されていた機甲師団の自動車化歩兵旅団を編成するため、

ポルシェ社の小型トラックがまとまった数、ヴォルフスブルクで準備されている」

「それを使えば…あ」

言つてる最中に気づいた。ヴォルフスブルクからとなると…

「輸送するとなるとかなり時間がかかる。直通で鉄道があれば良いのだが…」

鉄道ならば一度貨物車に載せてしまえば大した手間もなく到着する。

だがここはスカンジナビア。最低でも一度船を使わなければならぬし、その積み下

ろしの手間がかなりかかる。

要するに、今トラックで輸送をするのは現実的ではないのである。

その後思い返してみれば、帝国での自動車運用にはまだ問題が多い。

何より最大の問題は「運転手の数が足りない」事だ。

”帝国”は一次大戦での経済的消耗がないからか、戦間期の合衆国程ではないものの自動車普及している。

本来、ナチスによって建設されたはずのヴォルフスブルグが存在するのも、

某P社があちらの世界では一次大戦によって不可能であった、念願の国民車工場を自力で実現したらしく、

旧名のKdF-Stadtに関しては、影も形もない。

生産しているのも、”Volkswagen Type 1”という徹底ぶり。

だが広い国土と低い人口密度故に自動車が必要になる合州国と異なり

帝国で自動車の需要がさほど多くなかったためか国民車はあまり売れず、

”家用車運転手”という専門の仕事が残る程度には、積み下ろし作業のための運転手も不足している。

2月22日0900

ハンナと2人揃って方面軍司令部のルーデルドルフ准将の執務室に呼び出された。参謀本部から態々出向いて来たとなると、それ相応の理由があるのだろうか…

「一度聞きたい、貴官らは北方方面軍の攻勢計画をどう評価する」

ハンナが先に答えた

「先日の制空戦を鑑みれば601は制空戦闘力において圧倒しており、適切な突破支援さえあれば防衛線は何度でも崩すことが出来ます。時間はかかりますし勝てるでしょうが、損耗も大きく共和国及び連合王国の思う壺です」

「601を北方に長期配置する予定はない。長くても2ヶ月、それ以上は他の方面での作戦に支障をきたすと言われた」

「短期で、ですか…」

「問いを変えよう。北方方面軍の攻勢計画を陽動として捉えた場合、どう評価する？」

陽動…？ どういうことだ？ 北方方面軍とは別の行動を参謀本部、若しくは中央軍は実

行しようとしている？

それも北方方面軍に秘密で。

普通の方法ではどうやっても補給線がネックになる。

だが我々は陸軍として陸軍の思考をしていたが故に気づかなかったことが一つある。

帝国から見れば北方ノルデン、それもスカンジナビア半島の南端であるスコーネ地域は大陸から切り離された”孤島”であり

対岸の本国から一度何かしらの形で船舶輸送を挟む必要があるということ。

どこからどう輸送するにしても結局船舶への積載の手間が変わらない。

逆手に取れば、鉄道輸送区間を削減することで船舶の負担は増えるものの鉄道は補給負担が減る。

幸いにして今、帝国には連合王国の圧力で貿易ができなくなったために仕事を失った商船が多数存在している。

あとは、海軍が協力してくれるかどうか。

現存艦隊主義に流れて高価なフジツボ養殖設備に成り下がってたりはしていないはずだが…

「…北方方面軍の攻勢計画を陽動作戦とするならば…別途、海軍の協力を得ての上陸作戦は可能でしょうか」

「何!？」

…何かまずいことでも言ったか

「ゼートウーアから聞いたのか?」

なぜここでゼートウーア少将の名前が出てくる?

「おっしやつている意味が分かりません」

「いや、気にするな。デグレチャフ少佐、貴官ならば何処にどのよう上陸する?」

上陸作戦を行うにもスカンジナビアは断崖絶壁が多く、

フィヨルドの奥でない限り上陸など不可能な地形が延々と続き、

フィヨルドの入り口にはもれなく要塞砲もしくは沿岸砲が存在する。

空挺で制圧するにも厳しい。降下できそうな場所が少ない。

特にオスロフィヨルドは難しいだろう。

フィヨルド入口にあるオスカーズボルグ要塞は島を活用した沿岸要塞であり、

狭くてただ単に降りることすら困難極まる。

ヴェーザー演習作戦では要塞を強行突破したものの損害が大きかったし、

敵の主要都市に近い沿岸部となると制海権にかなり不安が残る。

あの頃のドイツと比較すると、幸いにして連合王国がまだ正式な敵ではないが、

ノルウエーの置き換えになるはずの協商連合自体がスウェーデンと纏まってしまっ

た結果、

相対的に強力になっており

連中、連合王国製とはいえ2万トン級の海防戦艦を複数保有している上、恐らくその他の艦艇、特に魚雷艇の数が多いと思われる

これをヴェーザー演習作戦のように強行突破するのは難しいかもしれない。

…いや？ちよつと待てよ？

あの世界には魔導師なんて存在しない。

魔導師ならばピンポイントに降下できる。短時間だが制圧力もある。

オスカースボルグ要塞であっても降下して制圧可能…

「…オスロフィヨルドでしょうか。沿岸要塞を魔導師の空挺降下で先に無力化し、海軍艦艇の援護のもと強襲上陸。

鉄道接続点のオスロさえ抑えてしまえば敵は補給網の半分以上を失います。戦線の再編も難しいでしょう」

半島に対する横からの強襲上陸。どこかで見た構図。

仁川に上がったら当然、「スレッズハンマー」も実行するべきだろう

「上陸後、機動力のある部隊で東へ行軍すれば、敵の前線に存在する部隊を包囲殲滅すること可能かと」

同日 1630

601大隊臨時本部

「ヴァイス中尉、オスロ付近の地図を」

「はい」

「…やはり沿岸要塞が曲者だな。古めだが帝国製の28cm砲があるのは確実、更に連合王国から35.6cm砲を購入したという情報…」

「まさか揚陸作戦でありますか」

「そうだ。我々は空挺降下にてこれを支援する」

用語解説：沿岸要塞

沿岸要塞は、無限の装甲を備えたある種の不沈艦。

基本的に戦艦と同じ砲、若しくは砲塔を備え、接近してくる敵の艦隊と交戦する。

沿岸要塞は事前及び交戦中の正確な観測に加え、海面の揺らぎの影響がないこと、砲部以外への着弾が無効になるなど戦艦と比較して圧倒的に優位な条件が揃っており、

最低でも沿岸砲より1クラス上の戦艦を複数引き連れないと攻略は厳しい。

オスカーズボルグ要塞なら備砲の35・6cm砲に対して41cm砲、日本で言えば長門型が4隻程ほしい。

大和型なら2隻でいいといえれば分かりやすいか

戦艦ほどではないにしてもやはり沿岸要塞は高価なため、当然建設されるのは要所に限られる。

日本なら対馬海峡要塞、東京湾に浮かぶ海堡を含めた東京湾要塞。

他国ならジブラルタル、ダーダネルス、オアフ島等が代表例と言えるだろう。

XXXXXXXXXXXX

用語解説：オペルブリッツ

米帝式大量生産技術を取り入れたGM子会社、オペルAGのトラック。

生産速度も米帝並み。生産ライン自体は小規模ながら年間2—3万台程度生産できた模様。

ナチスの力でGMが権利を放棄しドイツ企業となり、言うまでもなく史実ドイツの自

動車輸送を支えた。

戦後GM子会社に戻った。

xxxxxxxxxxxx

用語解説：ヴォルフスブルグ

ナチスが自動車生産のために作ったドイツの計画都市。

旧名はStadt des KdF-Wagens。略称 KdF-Stadt

「歓喜力行団の車を生産する街」の名前の通りKdFワーゲン、ビートルの工場が建設された街。

”帝国”においては、ナチスが存在しないため有るはずのない街のように思えるが、一次大戦が発生せず、資本、物資、人的資源の流出及び浪費が発生していないと言う史実との差異から、

ポルシェが何らかの方法で資金調達に成功してしまえば建設される事自体はあり得る都市。

建設時の計画生産数は年産10万台。

xxxxxxxxxx

用語解説：KdF／歓喜力行団

Kraft durch Freude (喜びを通じて力を)の略。

ナチスがドイツ労働戦線（DAF）の下に設置した組織。

旅行を始めとし、コンサート、スポーツなどの余暇活動を提供するために設置され、国民全体（民族的ドイツ人に限る）に「休暇と旅行と車」を提供する：はずだったが車に関しては納車開始前に戦争が始まったため行われていない。

XXXXXXXXXXXX

用語解説：KdF—Wagen/Volkswagen Type I

「歓喜力行団の車」及び「国民車 1型」の意味。

「フォルクスワーゲン ビートル」と言ったほうが分かる人は多いと思われる。

この2つは同一の車であり、世界で二番目の大衆車である。

ナチスはこの国民車の設計を

国民車を長年夢見ていたフェルディナント・ポルシエに委ねた。

XXXXXXXXXXXX

用語解説：「ポルシエ車製の小型トラック」

ポルシエの小型トラックは出資者からリスク低減策として要求された貨物自動車。

合州国の国民車、モデルTの貨物型モデルTを参考に、

タイプ1のシャシにフルキャブオーバーのボディを乗せるといふ至極単純な設計で

開発。

結果、「フォルクスワーゲン・タイプ2」に似た設計思想の車両が設計された。

”Lastkraftwagen^{貨物自動車} Type¹”^型と呼ばれ、無蓋モデルが軍に納入されている。

構造上、エンジンが後部配置でボンネットが無いため大戦時の軍用トラックらしからぬ見た目になると思われる。

タイプ1の国民車としての普及は遅いものの、タイプ2は馬車と合州国製の古びたモデルT及びTからの置き換えとして人気があるそう。

xxxxxxxxxx

用語解説：フェルディナント・ポルシェ

スポーツカーメーカー「ポルシェ」の実質的創業者であり、

自動車工学者、戦車設計者、アドルフ・ヒトラーの友人。

大戦前後から「安くてタフな誰もが乗れる大衆車」を作ることがを夢見て

世界中を奔走するも一次大戦の影響でどうやっても資金を確保できず、

最終的に「ナチスの国民車を設計する」という形で実現した。

”帝国”でも同名の人物が存在するわけだが、

国民車のための資金調達に奔走するなど、

新聞や資料から得られる行動が前世のそれ何も変わらないため、ターニャは転生者で

はないと判断している。

17：ノルデンⅢ

1924年2月23日 1411 協商連合クリステイアンサン

連合王国本国艦隊 第3戦艦戦隊 旗艦ロイヤル・サブリン 艦橋

第8巡洋戦隊と3つの駆逐隊を伴いつつ、第3戦艦戦隊は本国艦隊の第2戦艦戦隊に遅れること数時間。

協商連合にようやく到着、停泊した。明日以降は4隻の戦艦がここを起点に北海とスカゲラク海峡に展開することになる。

目的は帝国の上陸作戦阻止。

港に入ったロイヤル・サブリンの1km前方の岸壁にはネルソンとロドニーが係留されている。

「しかし大丈夫なんですかね、我々は宣戦布告後の入港になりましたけど、

第2戦隊はまだ宣戦布告前、中立国軍が入港したという事に……」

「戦争が始まったら些細なことさ。どうせ忘れられる」

そんな話をしていると、突如艦の前方で巨大な火柱が上がり、窓が割れた。

艦橋にいた人間の殆どは巨大な砲塔が自分たちめがけて飛んでくるのが見える前に割れた窓の破片で失明。

そして、ロイヤル・サブリンは沈んだ。

1924年2月23日 0930

ヴァイルヘルムスハーウエン 帝国海軍 北洋艦隊司令部

今回呼び出し…というより送り込まれたのは海軍の海上艦隊の拠点、ヴァイルヘルムスハーウエン。

つまり、先代皇帝はプロシア王“ヴィルヘルム”であり、現皇帝もヴィルヘルム。
…今までのパターンからするとまさか皇帝が転生者？いやそれはないか。

「定刻になりましたので、始めさせていただきます」

「では状況を説明しよう。我々海軍は陸軍が実施する北方方面への攻勢作戦に呼応し、支援作戦を実施する」

支援？実質主目的はこちらのはずだが。

陸軍が攻めあぐねている所を横目に敵の背後に致命的な一撃を喰らわせる作戦。

となると名目上でも陸軍に華を持たせてやらないと後でこじれると参謀本部は踏んだのだろう。

それに海軍が対応するあたり、そこまで仲が悪いというわけではなさそうだ。とりあえず最低限。

「北洋艦隊の主戦力である戦艦をすべて投入する戦略的大規模かつ大胆な奇襲作戦である」

「目標はオスロフィヨルド。敵後方の策源地に直接的打撃を与える」

「オスロ!？」

「無茶だ！上陸も空挺もできない、フィヨルドには沿岸砲だらけなのに！」

「それにフィヨルド入口のホーテンは海軍基地がある。その戦力も排除しなければならぬ」

当然、この目標に対する攻撃は海軍将官には驚きだろう。突破できるはずがない。

英国：…じゃなくて連合王国ならばゴリ押しで通つてしまえそうだが、我が帝国はあくまで陸軍国。

トルコに力押しするかのように戦艦を消耗することが前提の作戦など組めない。

そもそも連合王国相手に沿岸防衛が出来る最低限の戦力だけは確保せねば帝国は敗北しかねないのだ。

「もちろん、ただ突入するわけではない。そのために中央軍から精鋭の魔導師部隊を呼び寄せたのだ」

魔導師部隊は艦隊の突入に先立ち、敵砲台の無力化を実行する」

当然、魔導師部隊というのは…

「その先遣部隊だが…デグレチャフ少佐、

この場には大隊長のルーデル中佐が来ると聞いていたのだが中佐はどちらへ？」

「ルーデル中佐は既に単独で北海に向い、海域と沿岸の偵察に出ていまして…」
ハンナは北洋艦隊司令部に赴く前に何処かに消えてしまった。

そう。何時もの無断出撃だが、今回は一応書き置きを残していた。

行く先は極寒の北海。強風、悪天候、低温と状況劣悪の北海。

本来の航続距離からすれば魔導師単独での哨戒など完全に狂気。普通なら飛んでるだけで死ぬ。

案の定、会議室は困惑のどよめきで満たされた。

意味不明なのだ。魔導師は航続距離が不安定で航空機などより遥かに短く、

魔導師観測にも引つかかる。普通なら海上哨戒などしない。

「哨戒…？航空機で？」

「いえ、通常の魔導飛行でオーレスン辺りまで見てくるとか…」

「…すまないが、魔導師の航続距離はそこまで長かったかね」

「ルーデル中佐は例外が多すぎて私も何処まで飛べるのか分かりかねます」

そんなハンナの非常識度に海軍の皆様が困惑し続ける中、

その空気をぶち壊すように勢いよく士官が入ってきた。息も絶え絶え、何かあったのだろうか

「き、緊急です！連合王国が宣戦布告しました！」

連合王国の突然：いや以前からかなりの数の義勇軍を送り込んできていた上に、
そもそもダキア戦を帝国が脅威であるとするプロパガンダに使っていた。時間の問
題ではあつただろうが：

いやブリテンのことだ。どうせ宣戦布告抜きでも本国艦隊に協商連合の旗を掲げさ
せて”義勇艦隊”とかやりかねない。

そして会議は数時間、混迷を極めた。一気に作戦が実行困難になったからだ。

連合王国が帝国に宣戦布告。これは当初予定していた海上戦力比が一気に崩れるこ
とを意味する。

協商連合相手ならば海上で優勢が確保できるが、連合王国まで加わるとなると話が変
わってくる。

さて、帝国と連合王国の海軍力は、史実の独英のそれとはかなりバランスが異なる。
なぜなら帝国は第三帝国と違い、オーストリアⅡハンガリーに相当する地域が存在す
るため

地中海に面しており地中海艦隊を抱えている。

単純な戦艦保有数でいえば1：1に近い数を持つているが、地中海艦隊の艦艇はイタリア・・・イルドア同様地中海のみを想定した設計、若しくは北海から古い戦艦を回される状態で連合王国に比べ質が低いため実際の主力艦戦力比は10：7、

そしてジブラルタルは要塞が邪魔なため通過できず、戦時となれば大西洋に展開可能な戦力比は10：5以下だ。

そしてほぼ間違いないく、この上陸作戦の情報は何処かから漏れたと見て良いだろう。若しくは情報抜きに上陸作戦を予想して、協商連合及び帝国に更なる出血を強いるために協商連合の延命をしにかかっていると見るべきで、

上陸作戦が敵に予想されている以上、
連合王国が加われれば作戦は困難どころか北海艦隊の壊滅すらありうる。

「やはり作戦自体を断念するべきかも知れないな……だが」
艦隊司令長官が続きを口にする前に、会議室のドアが再び荒々しく開かれた。

「緊急！緊急電！」

聞き覚えのある女性の声。……ん？女性？

海軍に女性はほぼ居ない。とすると…

そのドアの方に目をやると、息を切らしたセレブリヤコーフ少尉。

緊急だとしてなぜ601（うち）のヤツが来る？ どういうことだ？

…確かに部隊との連絡を取るために通信室で待機させてはいたが。

「一体何事かね！」

海軍将官の誰かが尋ねた。

「ル、ルーデル中佐から先程電話がありました、” 連合王国の戦艦を撃沈した ” と」

「は？」

意味が分からなかった。

私ですら意味がわからないのだから海軍の面々は更に意味がわからなかっただろう。実際、開いた口が塞がっていない。

数時間前、

空域管制などを經由して確かにハンナは連合王国の宣戦布告を把握したとは思う。

だがいくらなんでもハンナ一人で戦艦を撃沈というのは意味がわからない。

いくら装甲を貫通できるとはいえ相手は防水隔壁で仕切られて浮力を確保できる物体だ

ただ貫通できるだけでは意味がない。敵のダメージコントロールを上回る浸水を与えなければ撃沈などできない。

「戦艦を撃沈……？」「何の話だ？」

「ルーデル中佐……例の魔導中佐の事じゃないのか？」

「意味が分からないぞ。単独の魔導師だろう……？」

「そもそも貫通術式で装甲を貫通できても……」

海軍の皆様も同意見のようだ。但し威力の認識に関して少々齟齬があるようだが。

「セレブリヤコーフ少尉。間違いなく戦艦を撃沈したと言ってきたんだな？」

「何度も聞き返しましたが、2隻撃沈したと…」

「2隻!?!何がどうなってる」

「少佐殿と直接話したいとのこと、しばらく折返しの電話を待つそうです」

「分かった。北洋艦隊の皆様、ルーデル中佐の報告を再確認してきますのでしばらく離席させていただきます」

「あ、ああ」

どよめきしか残らない会議室を後にした。

「ルーデル中佐は電話してきたと言っていたな、何処からだ？」

「ハンストホルムの監視所からだそうです」

「連合王国の” ”戦艦を” ”2隻撃沈した” ”間違いないんだな?」

『艦橋の前にだけ三連装砲塔を3つも載せるような国が連合王国の他にあるか?』

思い当たる艦が一つ。

あまりに強烈すぎて海軍にあまり興味のなかった自分でも前世からはつきり覚えて

：

「ああ、それは間違いなく連合王国の戦艦だ」

…っって何?!

「艦橋の前に三連砲塔を3基だと!」

『あんな訳の分からない配置しているのはネルソン級以外にあり得ないな』

言っってから気づいた。現在連合王国で最大の砲を持つ最強の戦艦、ネルソン級の2隻なのだ。

2隻しかない16インチ砲戦艦が2隻まとめて沈んだ。敵からすれば悪夢だ。完全に悪夢だ。

チャーチルが首相だったなら気絶して入院しそのまま引退する程度には悪夢に違いない。

「…とりあえず何があったのか最初から話してみてくれ」

『連合王国が宣戦布告したと聞いて、まず間違いなく上陸作戦の妨害に乗り出したと読んだ。』

それで北海や港を探したら、クリステイアンサンに連合王国の本国艦隊が停泊してやがった。

『岸壁が足りないのか横に4隻以上並べていた』

何というんだったか。メザシ係留だったか？日本以外でどう言うのかは分からないが

『で、24000ftで侵入してしばらく観察していたが全く迎撃の気配がないから、

ちよつとした出来心で直上から急降下して敵戦艦に一発ぶちかましたんだが…砲塔付近に直撃、貫通して弾薬庫に届いたのか誘爆した』

つまるところ、敵から見れば陸奥のごとく突然砲塔が爆発して爆沈したのだ。

『前から2つ目の砲塔のすぐ後ろに当たったんだが、直後に他の砲塔もまとめて誘爆して吹っ飛んでな。』

艦の前部は文字通り木っ端微塵、爆煙が晴れるまで観察していたが隣に係留されてた

同型艦も沈んでいた』

訂正する。全主砲塔誘爆となると本当に文字通りの木っ端微塵、陸奥はまだ前後に折れて轟沈したが

こっちは一部でも艦の形を保っているか怪しい。

どうもネルソン級は砲塔を寄せすぎて誘爆しやすいという欠陥があったようだ。

まあ二度と使えないから今更わかったところでなんだと言う話だが

『周囲の補助艦どころか街もかなり損害を受けてたと思う。あまり見てないから詳しいことは分からないが』

再度訂正だ。陸奥の爆沈よりもハリファクス大爆発に近い。下手するとそこで停泊していた艦隊が壊滅してるんじゃないだろうか

「……まあ大体わかった。しかし何故態々無線を使わず電話してきたんだ？」

『艦艇どころか街が諸共吹っ飛んだからな。攻撃の目撃者も含めてほぼ全員が死亡した可能性がある。』

無線を使うと敵に攻撃の存在を悟られるかも知れないが、軍事電話なら攻撃の事実自体を秘匿できるし、

魔導師で戦艦を沈められるというのは秘匿する価値がある。そうだろうか？』

連合王国の皆様、ハンナ・ウルリカ・ルーデルとかいう災害に見舞われましたことに

お祝いを申し上げます。

せつかくの最新鋭16インチ砲搭載の戦艦も災害の前には無力ということで諦めてください。

どうせハンナか、それこそ九五式宝珠水準の火力を出せる魔導師がラッキーヒットを出せなかりやこんな無茶苦茶が過ぎる真似はできないだろうが…

「デグレチャフ少佐、君が不在の間に概ね事実確認を済ませた。

会議中に複数の沿岸観測所から”正体不明の音”に関する報告が上がっていたようだが…詳細は分かっていたかね」

「…ネルソン級戦艦2隻を撃沈と」

「…もう一度聞きたいのだが、”何を”いくつ” 撃沈したと？」

「ネルソン級2隻、ネルソン及びロドニーです」

「う、うむ…」

会議室の面々は頭を抱えていた。

無理もない。事実かどうか、私でさえまだ少し疑っているのだ。

使っているのが急降下爆撃機とトーン徹甲爆弾ならば、実績から考えれば撃沈自体は可能かもしれない。

いや、ほぼ確実に可能だ。

特に「アレ」の場合、急降下爆撃で狙った所に高速で落とせる水準の練度を持っているだけに、

大和とかいう規格外艦を別にして、ただの戦艦では接近を許しただけで貫通弾を出し単独で撃沈できる可能性はかなり高い。

ただ誘爆まで起こすのはちよつとどうなんだろうか。運が良すぎないか。

それに過剰火力と貫通力の持ち主とはいえ、貫通術式すら使えない人間の、ただの術弾一発で爆沈してしまった。

私にも意味が分からない。

それに、ラッキーショットで敵の本国艦隊が半壊したと喜んでもいられない。

海軍にとつてはこの「術弾で戦艦撃沈」という事実は自らにも跳ね返ってくる。

仮に事実だとすると、自軍も同じ事をされないとはい限らないのだ。

たとえそれが

”規格外の高高度から侵入して気まぐれで急降下攻撃を仕掛ける術弾投射特化の超天才少女が二核宝珠を使って偶然撃沈した”

という条件が必要であっても、可能であることそれ自体が問題になる。

戦艦ドレッドノートを生み出した英国が、

その途端に自軍が保有していた大量の戦艦が陳腐化したのと同じ、

時代の変化の一端そのものだった。

1924年2月25日3：50 ヴイルヘルムスハーフェン飛行場

あの攻撃から二日経った早朝、協商連合の新聞の写しを海軍から渡された。

英語版と”スウェーデン”語版。いわゆる一面記事であった。

タイトルは”連合王国の戦艦が大爆発、クリステイアンサンの街が壊滅”

流星に戦時中とはいえ街の大部分が消し飛んだことは隠せなかったらしく、

戦艦”ネルソン””ロドニー”更には事前の情報になかった”ロイヤル・サブリン”が

轟沈、

その他10以上の補助艦艇が沈み、更に多くの艦艇が損傷を受けた事が書かれてい

た。

続きには”連合王国は同盟国人を殺しに来た”だの何だの散々書かれていた。

だが内容としては爆発事故として報じられており、

連合王国海軍は”帝国軍による破壊工作、若しくは潜水艦による魚雷攻撃の可能性が高い”と抜かしているらしい。

少なくとも一般人には魔道師による攻撃は気づかれていないようだ。

そして、帝国参謀本部や海軍は

”上陸作戦を気取られた可能性はあるがそもそも連合王国がわざわざ幾多のリスクを承知で宣戦布告してきた上、

妨害のために本国艦隊まで派遣する選択を取るという時点で敵の対応策はそれ頼みになっていた可能性が高く、

その本国艦隊が半壊して一切の行動が確実に封じられているだけで既に防衛計画が破綻に近い状態にある”

という判断を下した。

その上、敵本国艦隊はよりよってクリステイアンサンという微妙な位置に、かなり無理な配置をされていた。

これはクリステイアンサン付近に上陸があると見込んでいたのだろう。

実際クリステイアンサンはフィヨルドは縦深がなく、強固な沿岸要塞もない割に比較的規模の大きい港湾がある。

上陸した後の兵站線を確保するにはここが数少ない有望な上陸候補地点になり、もし仮に他の地点への作戦だったとしても適切な監視と偵察、搜索さえしていればクリステイアンサンで緊急出港可能状態にしておくのがベストではある。

それに引き換え、オスロフィヨルドは上陸に成功した場合の戦略的な価値は多入りが入り口の西岸、ホーテンに魚雷艇などの沿岸防衛目的の艦艇が多数配置されており更に最狭部のど真ん中に35・6cm、14インチ砲や地上設置型の魚雷発射管を備えた沿岸要塞まで存在する。

これを“既存の方法”で突破するのは不可能に思われる。

さらに爆発事故が破壊工作と見込んでいるなら、少なくとも可能性が十分にあると見ているとすれば

当然クリステイアンサンに上陸してくると踏むだろう。

そしてまず連合王国海軍は現在、残った多くの主力艦を北海に向けて動かせる状態に

ない。

ポーツマスやプリマス辺りで寝てる艦艇を叩き起こし、乗員の招集やら艦艇の集合やらやっていたら2日などすぐに経過してしまう。

何より機関が完全に停止していた場合、それを出港できる状態にするのに12時間、大型艦だと24時間以上必要になる

まあそのへんは緊急出港準備体制にある船の数にもよるが：

少なくとも、沿岸の防衛設備、通信網、艦艇が破壊されまくって混乱しているクリステイアンサンは格好の標的に思えるし、敵もそれを防ぐべくクリステイアンサンの防衛体制をなんとか短時間で整えようとするだろうし、

海軍でもそのような提案があった。

だが、参謀本部が考える作戦の目的としては

”前線への補給体制の破壊”と”敵前線後方への速やかなる進軍”が最重要視されているため、

鉄道網の重要地点であるオスロへの奇襲効果は失われていないと見込んで作戦は予定通り実行される事となった。

「さて、それでは諸君。同盟国から”誤爆”を受けた彼らをお見舞いすることにしよう」

・ネルソン級戦艦

色々問題ありまくりのヤツ。異世界だとしても海軍軍縮条約の犠牲者になっているらしく、

基本的に設計に変化がないため弾薬庫直上の水平防御が160mm。機関部直上が95mmと非常に薄い。

このため500kg徹甲爆弾（PC500）なら機関部を、1t徹甲爆弾（PC1000）なら弾薬庫を貫通可能という非常な残念なことになっており、

砲戦ならそれなりに耐えるのだが急降下爆撃に弱すぎる。

尤も、この辺は時代からすると航空攻撃を想定していないため仕方がないとは思いますが。

1t徹甲爆弾抱えた急降下爆撃機に群がれたらパイロットがたとえルーデルでなくとも、

運が悪いと一撃で爆散してしまうだろう。